

浦添ようどれⅠ

石積遺構編

—史跡浦添城跡復元整備事業に伴う発掘調査報告—

浦添市教育委員会



▲ 浦添グスクと浦添ようどれ（北上空から）



▲ 発掘調査地全景（北東上空から）



▲ 発掘調査地全景（北東から）



▲ 一番庭西擁壁と瓦溜まり



▲ 二番庭北石積と鍛冶関連遺物包含層



二番庭西石積Bと▶
金属工房跡の土坑

序

浦添市は首里城以前の琉球国中山の王城が所在した土地として知られています。浦添ようどれは、かつて王城であった浦添グスクの北側崖下にあり、英祖王と第二尚氏7代目の尚寧王の眠る王陵です。

去る沖縄戦前の浦添ようどれは、高い石垣で囲まれ、静寂で厳かな雰囲気の陵墓でした。沖縄戦中の激しい弾雨に跡形なく破壊されましたが、戦後、琉球政府文化財保護委員会によって、墓室の修復が行われ今日に至っています。

さて、浦添市では、史跡浦添城跡整備基本計画に基づき、その第一期事業として浦添ようどれの石積み復元事業を進めています。復元工事に先立ち、石積み等の遺構確認のための発掘調査を平成8年度から実施してまいりました。その結果、墓室を囲む石積みの下部が予想以上に残っていることが判明し、戦前の古写真等とあわせて分析したところ、ほぼ戦前の姿に復元可能であることが明かになりました。この成果をふまえて、いよいよ本年度から石積み復元工事に着手することにいたしました。

本書は、平成8年度～平成12年度までの発掘調査成果のうち、石積み遺構を中心に概要をまとめたものであります。この報告書が今後の浦添ようどれの復元整備ならびに、浦添市の歴史研究に供することができれば幸いです。

末尾ながら、本事業を実施するにあたり、御指導、御助言を賜りました文化庁ならびに沖縄県文化課をはじめ、諸先生方に対し厚く御礼を申し上げます。

平成13年3月

浦添市教育委員会
教育長 宮城 清

例 言

- 1 本報告書は平成8年度から平成12年度に実施した浦添ようどれ発掘調査成果のうち、石積遺構について概要をまとめたものである。
- 2 発掘調査は史跡浦添城跡整備基本計画（平成7年度策定）に基づき、第1期事業の浦添ようどれ（王陵地区）復元整備に向けた石積み等遺構確認の調査である。
- 3 発掘調査は平成8年度は浦添市単費、平成9年度～12年度は国庫補助事業（史跡浦添城跡保存修理事業）により、浦添市教育委員会が実施した。
- 4 本書で使用した位置図は、浦添市建設部作成の25,000分の1図、文化課作成の1,000分の1図を使用した。
- 5 遺構の全体平面図、墓室立面図、参道擁壁立面図の作成は業者に委託し写真測量で行った。
- 6 遺構詳細図は浦添市文化課職員で20分の1実測を行い、本書には40分の1縮尺で掲載した。
- 7 発掘調査および出土品について、次の方々から御指導・御助言をいただいた。記して感謝を申し上げます。

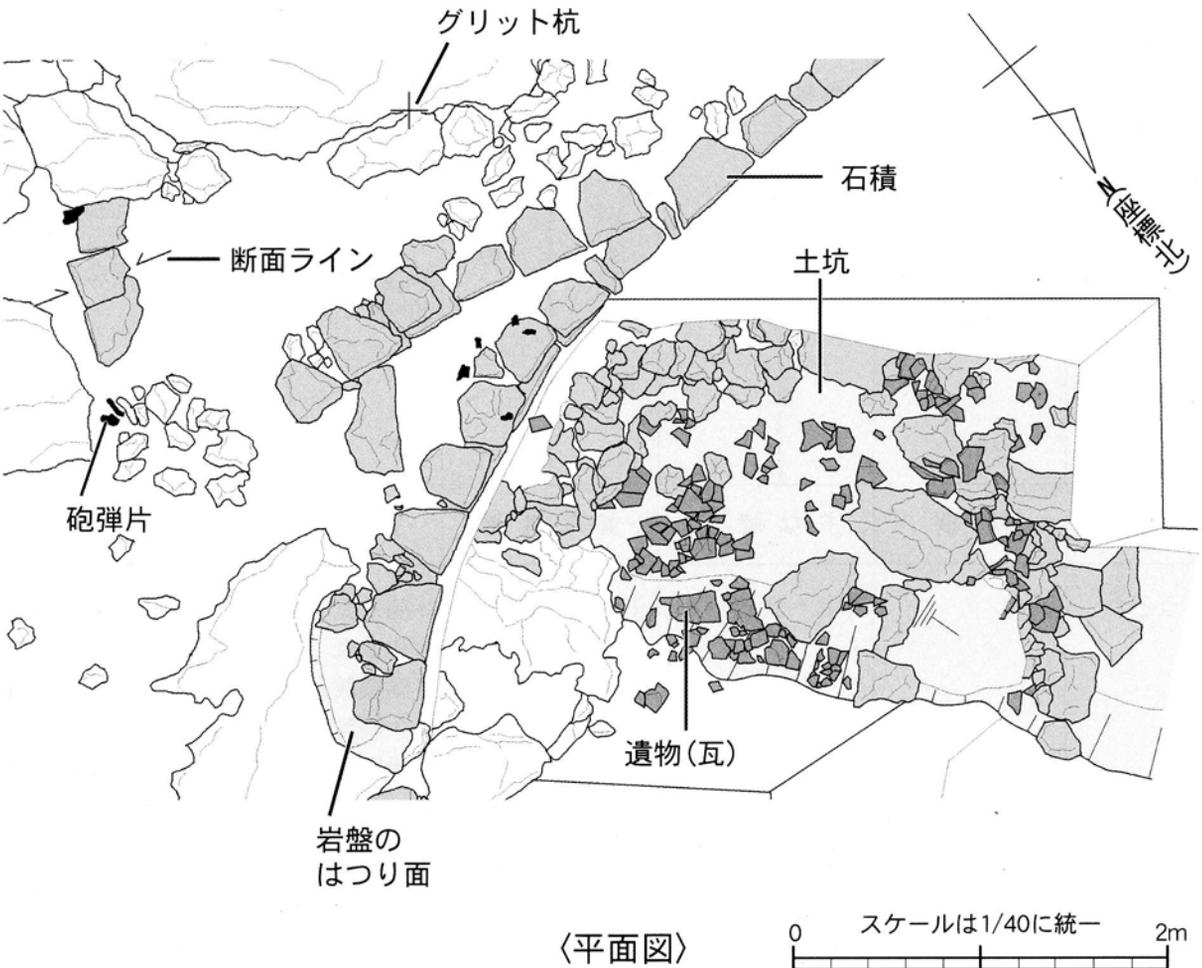
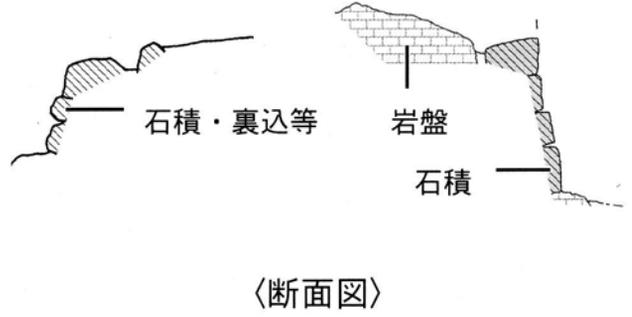
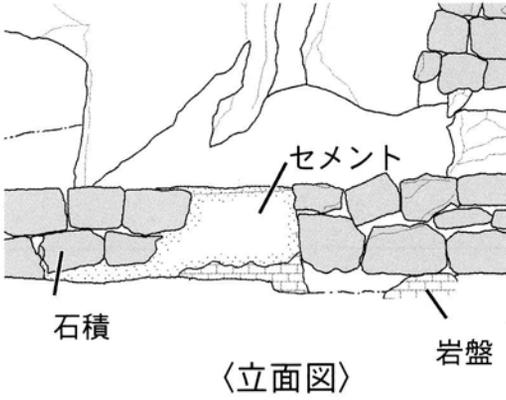
村上恭通（愛媛大学法文学部）	新海正博（大阪府文化財調査研究センター）
久保智康（京都国立博物館）	大澤正己（九州テクノリサーチ）
嶋谷和彦（堺市立埋蔵文化財センター）	石田 肇・土肥直美（以上、琉球大学医学部）
- 8 古写真および古絵図等の資料収集にあたっては、次の方々の御協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

野々村孝男（歴史研究家:那覇市在住）	・仲座 巖（那覇市在住）	・阪谷澄子（神奈川県在住）	・鶴沼 昭子（東京都在住）	・山崎穆子（熊本県在住）	・津留泰一（長崎県在住）	・屋部憲次郎（那覇市在住）
熊本県立図書館・早稲田大学建築史研究室・坂本万七写真研究所・日本民藝館・沖縄県立博物館・今帰仁村歴史文化センター						
- 9 本書の執筆は下記のとおり分担し編集は宮里信勇が行った。

第I章第1節	……………松川 章
第I章第2節、第II章、第IV章	……………宮里信勇
第III章・第V章	……………安里 進
- 10 発掘調査で出土した遺物及び調査記録等は、浦添市教育委員会で保管している。

凡 例

本書掲載の遺構詳細図（40分の1縮尺図）の図中表現の仕様は下記のとおりである。



報 告 書 抄 録

ふりがな	うらそえ ようどれ いしづみいこうへん							
書名	浦添ようどれⅠ 石積遺構編							
副書名	史跡浦添城跡復元整備事業に伴う発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	浦添市文化財調査研究報告書							
シリーズ番号	第32集							
編著者名	安里 進・松川 章・宮里信勇							
編集機関	沖縄県浦添市教育委員会教育部文化課							
所在地	〒901-2501 沖縄県浦添市安波茶一丁目1番1号 TEL：098-876-1234(内6213)							
発行年月日	2001年（平成13年）3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード						
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
うらそえ 浦添ようどれ	おきなわけん 沖縄県 うらそえし 浦添市 なかま 仲間2丁目	47208		26° 14' 37"	127° 44' 00"	平成8年度 (1997.1.16)) 平成12年度 (2001.2.26)	約2,500	史跡浦添城跡 復元整備事業 に伴う遺構確 認のため
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
うらそえ 浦添ようどれ	墳墓	中世～近世		王陵及び石積み 瓦溜まり 金属工房跡		高麗系瓦 大和系瓦 青銅製鍍金金具 鉄・銅製釘 鍛冶関連遺物 漆塗膜片など		石積み遺構以外に 瓦溜まりや金属工 房跡などが確認さ れ、浦添ようどれ の歴史に係わる新 資料が加わった。
	戦争遺跡	近代		沖縄戦中に構築 された石積み		銃弾・銃剣・鉄兜 軍人所持品類 乾パン・米などの 食料や陶磁器類		暗しん御門が旧日 本軍の陣地に使わ れていたことが判 明。

もくじ

巻頭カラー図版	
序（教育長あいさつ）	
例言	
凡例	
報告書抄録	
第I章 はじめに	1
1. 史跡浦添城跡復元整備事業と 浦添ようどれの発掘調査	1
2. 調査体制	4
第II章 調査方法	5
1. グリットの設定	5
2. 年度別調査概要	5
第III章 浦添ようどれの構造	8
1. 戦前の浦添ようどれ関連資料	8
2. 浦添ようどれ石積みの構造と名称	11
3. 浦添ようどれの復元イメージ	14
第IV章 発掘調査の成果(石積遺構)	17
1. 一番庭及び外周南擁壁	17
2. 二番庭	50
3. 外周北擁壁	62
4. 暗しん御門と浮き道	69
5. 前庭と参道	77
6. 戦中石積	87
7. その他の石積	94
第V章 まとめ—浦添ようどれの石積と年代	102
写真図版	106
浦添ようどれ遺構平面図	裏表紙袋

第 I 章 はじめに

1. 史跡浦添城跡復元整備事業と浦添ようどれの発掘調査

古琉球において、「うらおそい」と呼ばれた浦添は、王宮浦添グスクを中心にした都であった。14世紀に浦添グスクを居城とした察度王は、明の冊封体制に参入してアジア諸国との大交易時代の扉を開き、以後500年間にわたって続く琉球王国の礎を築いた。15世紀初めに王都が首里に移った後、16世紀には浦添家の居館となり、同家から尚寧王が輩出した。尚寧王の時代に琉球王国は薩摩藩の侵攻を受け、浦添グスクは焼き討ちされ、王は薩摩へ連行された。帰国した王は、一族の陵墓として浦添ようどれを修築した。浦添グスクは、去る大戦において日本軍の陣地が構築されたため日米両軍の激戦地となり、尊い多くの人命とともに、グスクや王陵も徹底的に破壊された。以上、浦添グスクの歴史の一端を述べたが、このグスクは中世～近世、そして近代に及ぶ複合的な遺跡であるといえる。

戦後は、浦添グスク一帯で採石工事、墓地造成等の開発、都市公園整備等による地形改変が進められた。このようななか、昭和43年に県営浦添大公園として都市計画決定され、昭和50年には県営浦添大公園の基本設計が策定された。

浦添市教育委員会は、浦添グスクの適切な保護を図るため文化庁・沖縄県教育庁の指導のもと、遺構確認調査を昭和57・58・59年度に実施した。その結果、小範囲の発掘調査ではあったが、城壁石積、石塁・石列、平場造成、石階段、方形石組の溜め井等の遺構が確認された。グスクの遺構は13世紀末から17世紀に及びその間は5期に分けられている。以上の発掘調査の成果を踏まえ、平成元年8月11日に国指定史跡に指定された。

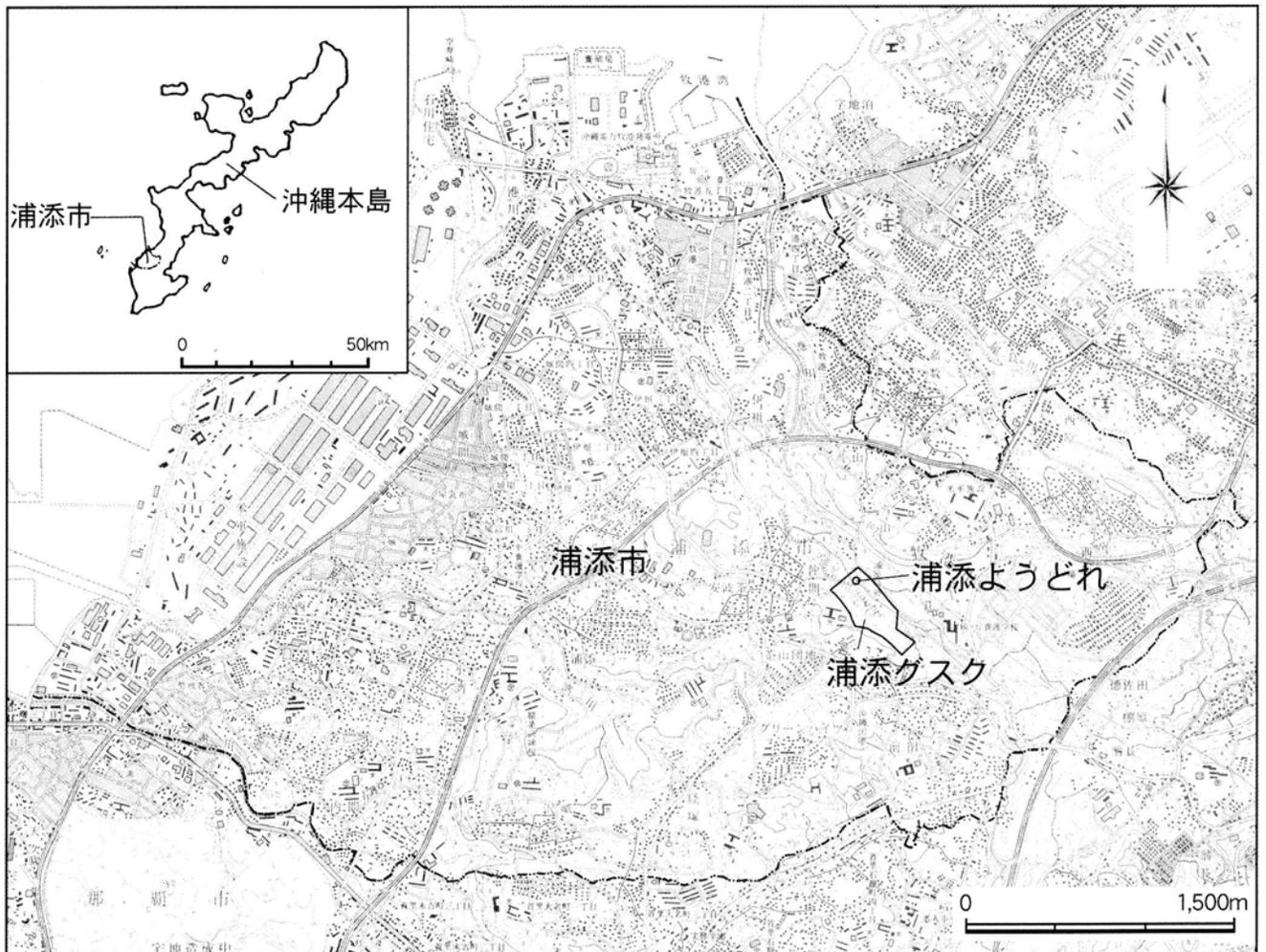
史跡指定を受けて、浦添市教育委員会では平成5年に「史跡浦添城跡保存管理計画書」を作成し、浦添グスクの保存と整備そして周辺開発との調整についての基本方針を定めた。平成8年には「史跡浦添城跡整備基本計画」を策定した。浦添グスクが他のグスクにはない歴史の厚みを持つ複合的遺跡であることを踏まえ、整備の基本方針として①浦添の歴史と文化の象徴となる歴史公園としての整備、②浦添グスクの歴史的特質を踏まえた複合的な整備、③発掘調査と学術研究に基づく整備等7つの方針を定め、4期35年の復元整備事業計画を決定した。

その第1期事業が、英祖王陵と尚寧王陵からなる「浦添ようどれ」の復元である。「浦添ようどれ」は、英祖王によって築かれたと伝えられ、1620年に尚寧王によって修築された。戦前「大鵬が翼を張るかと思ゆるもの凄い曲線を描いた」といわれた浦添ようどれの石牆は、沖縄戦で破壊された。戦後、琉球政府によって墓室の修復がなされたが、戦前の荘厳な石牆の復元には至らなかった。「浦添ようどれ」については、戦前の写真や測量図面も存在し、正確な復元が期待できること、平成8年2月に尚家第22代当主尚裕氏より寄贈を受けたことなどから第1期事業として復元整備事業を進めることとした。

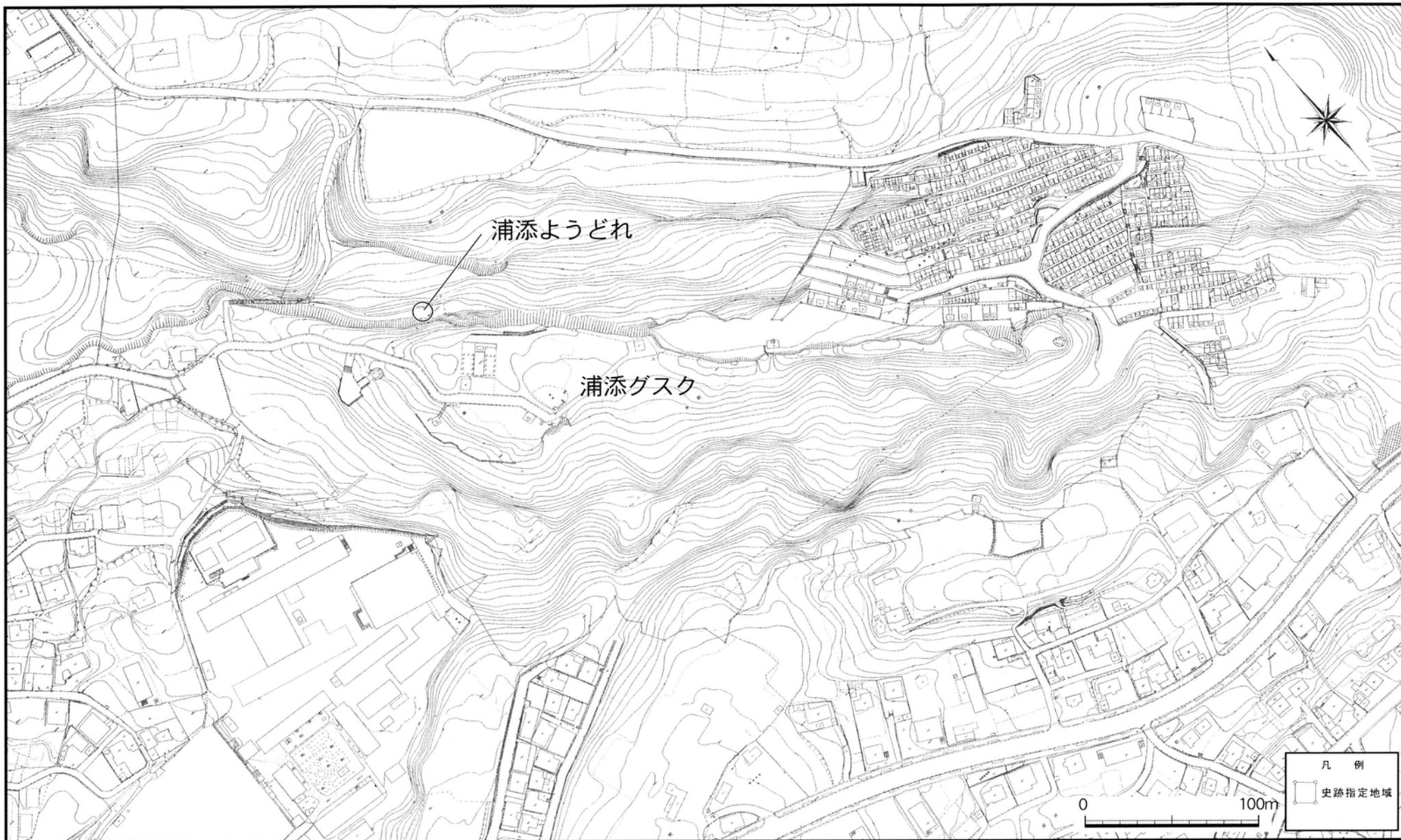
浦添ようどれの復元整備に向けての発掘調査は、平成8年度に市単費で実施し、平成9年度からは文化庁の史跡等保存整備費（一般）国庫補助を受けて実施している。平成8年度から平成12年度の5カ年にわたる発掘調査では、尚寧王によって修築（1620年）される以前のようにどれの構造を明らかにするとともにようどれ造営の際の金属工房跡の発見等の多くの成果が得られた。また、戦前に撮影された古写真、近世絵図の発見もあった。

発掘調査の成果は、毎年現地見学会を開催し、市・県民へ紹介した。王陵「浦添ようどれ」に対する市民

の関心は高く、多くの参加者が現地見学会に訪れた。復元工事は、平成12年度に着手し、平成13年度からは史跡等活用特別事業費国庫補助により進め、平成16年度に完了する予定である。



第1図 浦添ようどれの位置



第2図 浦添グスクと浦添ようどれ (S=1/3,000)

2. 調査体制

発掘調査から報告書作成（平成8年度～平成12年度）までの体制は次のとおりである。

事業所管	教育長		福山 朝秀（平成8年度～平成10年度）
	”		宮城 清（平成11年度～平成12年度）
	教育部	部長	西原 廣美（平成8年度）
	”	”	宮里 良一（平成9年度～平成10年度）
	”	”	銘苅 紹夫（平成11年度～平成12年度）
事業総括	文化課	主幹	安里 進（平成8年度～平成10年度）
	”	課長	安里 進（平成11年度～平成12年度）
事業事務	”	文化財係長	下地 安広（平成8年度～平成10年度）
	”	グスク整備係長	松川 章（平成11年度～平成12年度）
	”	文化課技査	宮城 清（平成8年度）
	”	”	松川 勝雄（平成9年度～平成12年度）
	”	文化財係	島袋 博一（平成8年度～平成10年度）
	”	”	村山 みき（平成11年度～平成12年度）
調査員	”	文化財係	宮里 信勇（平成8年度～平成10年度）
	”	”	安和 吉則（平成9年度～平成10年度）
	”	グスク整備係	宮里 信勇（平成11年度～平成12年度）
	”	”	仁王 浩司（平成11年度）
調査補助 および 整理作業	”	臨時職員	中島 徹也（平成8年度）
	”	”	宮国 正（平成8年度～平成9年度）
	”	”	大城 竜也（平成9年度～平成12年度）
	”	”	木下 秋海（平成9年度～平成12年度）
	”	”	廣木ゆかり（平成9年度～11年度）
	”	”	楚南 清美（平成9年度～10年度）
	”	”	北條 真子（平成10年度）
	”	”	山本 正昭（平成10年度）
	”	”	金田いぶき（平成10年度）
	”	”	宮崎 典子（平成10年度）
	”	”	石嶺寿真子（平成10年度）
	”	”	翁長 由紀（平成10年度）
	”	”	黒島 俊明（平成10年度）
	”	”	山里 稔充（平成11年度）
	”	”	富村 朝安（平成11年度）
	”	”	中所 亜紀（平成12年度）
”	”	山里 栄作（平成12年度）	

調査協力者 上里隆史・喜友名英理・美底ちあき（以上当時琉球大学学生）、
齊藤真吾（当時京都大学大学院生）

発掘作業員 （社）浦添市シルバー人材センターから派遣

第Ⅱ章 調査方法

1. グリットの設定

発掘調査は平成8年度から開始した。昭和初期の図面(第5図)や聞き取り調査等を参考に、石積遺構が出土する可能性の高い地点を選定した。トレンチはとくに方角を定めず、地形に合わせて設けた。トレンチは必要に応じて新設または拡張し、設定順にアルファベットでaから順に名付けた。最終的にはkまでの11箇所となった。

平成8年度の調査成果をふまえ、平成9年度から本格的調査となった。浦添ようどれ全域を対象としてグリット設定を行った。グリットの設定は8年度で確認した遺構の軸にあわせることにしたため、一番庭と二番庭以西とは別軸で設定することになった。

一番庭のグリット設定は、まず尚寧王陵の墓口を二分するかたちで南西-北東方向に基準軸を設け、これに直交して墓口前の石段から1m地点に北西-南東方向軸を設定した。

二番庭以西は、平成8年度に一部出土した二番庭西石積の軸にあわせ、西側2mで石積みに平行するラインを設けた(南西-北東方向)。また、これに直交するラインを同じく8年度出土の金属工房跡を横断するように設定した(北西-南東方向)。

いずれも直交するラインの交点を基準杭として4m×4mのグリットを設定していった。南西-北東軸にはアルファベット、北西-南東軸にはアラビア数字を付し、各グリット名は南杭の番号とした。

一番庭の南西-北東方向軸はN37.5° Eで、二番庭以西はN49.5° Eの方向(いずれも座標北より)。

2. 年度別調査概要

平成8年度

平成9年1月10日の安全祈願のあと、1月16日～3月28日で調査を実施した。

まず最初に、調査地を覆う雑木の伐採作業に着手し、これに並行して地形の平板実測(300分の1)を行った。清掃の後、一番庭及び二番庭石積の出土の可能性が高い地点を選定しトレンチを設定した。トレンチはそれぞれの地点の地形にあわせた。

調査の結果、一番庭東石積及び北石積、二番庭北石積、西石積の基礎がそれぞれ出土し、予想以上に石積遺構が残存していることを確認した。また、二番庭西石積の西側では、鍛冶遺構の存在も確認されるなど予想外の成果があった。

平成9年度

平成9年8月4日～平成10年3月13日で実施した。平成9年度は4m×4mのグリットを調査地全域に設定した。

調査は前年度に出土した石積遺構の周辺から調査区を拡張し、その延長を確認していくと同時に、未確認の石積遺構調査を実施した。調査を進める中、二番庭のほぼ中央に相当するP-3区で、二番庭造成土の下層から火熱を受けた岩陰土坑が出土した。高麗系瓦や大和系瓦が多量に出土したことから、瓦溜まりと名付けた。瓦溜まりでは古瓦のほか、鉄釘や銅釘、鍍金の脚先金具なども出土した。

一方、8年度に出土した鍛冶遺構についてもその範囲を確認するため、周囲を遺構レベルまで発掘した。

遺構周囲の炭層範囲の確認後、鍛冶遺構についての評価、調査方法及び遺物の取り扱い等について、専門家に指導助言をいただいた。

P-2区の調査では、戦後造成土の下層から暗しん御門の出口部分を確認した。戦時中構築された石積みや戦争遺物の内容から、暗しん御門は旧日本軍の陣地として使用されていたことが明らかになった。

平成10年度

平成10年9月16日～平成11年3月4日で実施。

王陵前の崖下斜面に厚く堆積した転石を除去し、一番庭北石積や北擁壁等遺構の確認のためのトレンチ調査を実施した。石積みの裏込め材だったと考えられる礫や石灰岩粉碎土などは確認できたが、石積み等遺構そのものの出土はみなかった。

墓庭のトレンチ調査では、墓庭の大部分が戦中の攪乱を受けていることがわかった。尚寧王陵前の未攪乱部でみると、墓庭造成は岩盤まで削ったあと、礫混じり土を敷いて仕上げていることが確認できた。

暗しん御門はほぼ全体が戦後の造成土で埋められていた（厚さ2m前後）。造成土中には数トンもある巨岩も混在したため、バックホウを投入して除去し、その後戦中層の発掘調査を行った。瓦溜まりの調査も前年度に引き続き行った。

平成11年度

平成11年7月5日～平成12年3月28日。

前年度に引き続き暗しん御門の戦中層調査、一番庭北石積確認のトレンチ調査、瓦溜まりの調査等を行った。

北石積の調査では、王陵前の崖下平坦部から石積みの基礎が出土した。全面露出後、一部断ち割り調査を行い、造成状況を確認した。

瓦溜まりでは、漆喰付きの瓦も出土することから使用後に廃棄されたものであることが明らかになった。鍛冶遺構と瓦溜まりについては、出土した炭片を試料にC14測定を行った。

平成12年度

平成12年5月30日～平成13年2月26日。

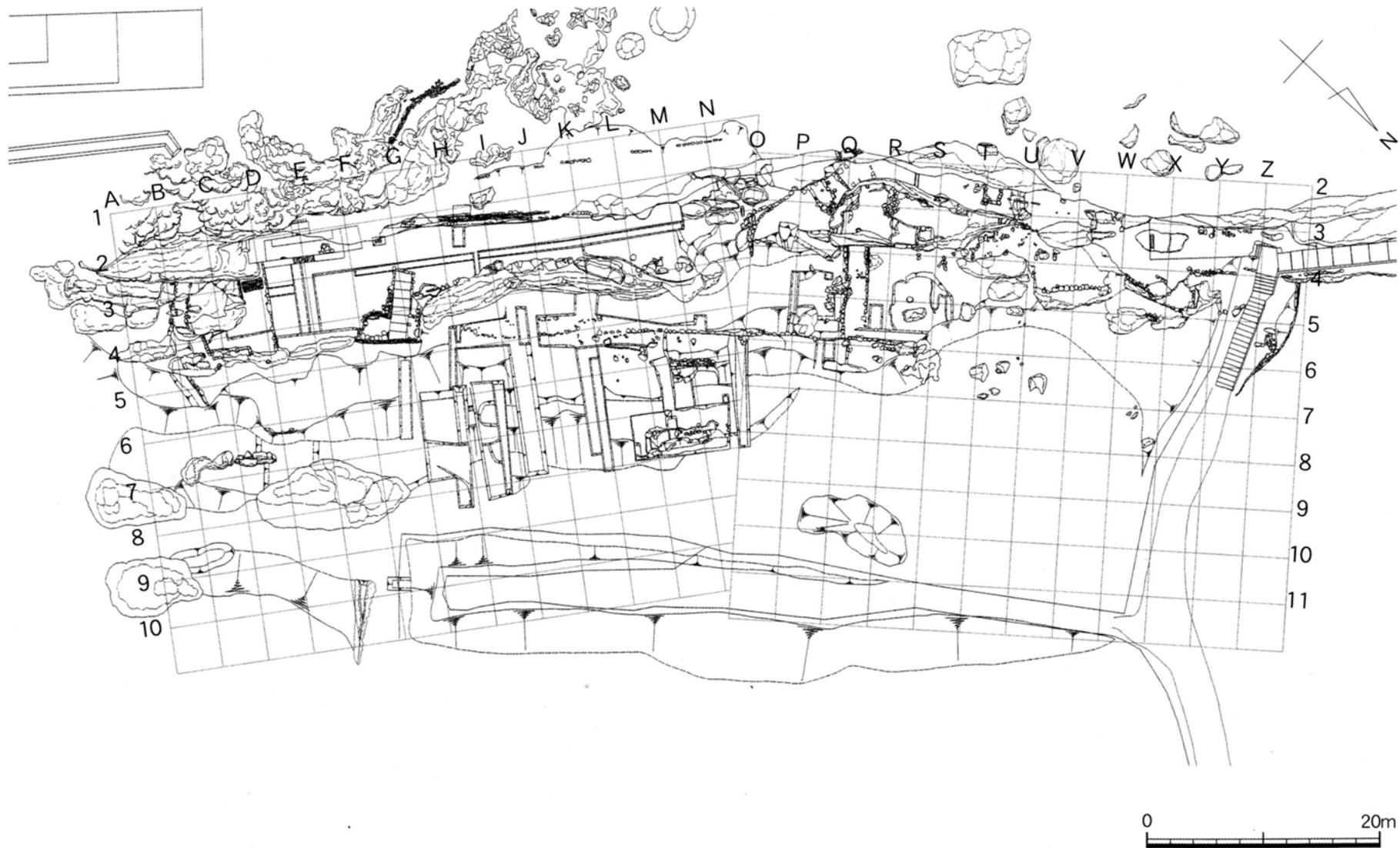
北石積確認調査、鍛冶遺構、瓦溜まり等の調査を実施。

北石積の確認調査では、崖下の巨大転石を除去しその下層を発掘した結果、一番庭北石擁壁の根石が出土し、また同遺構の北側下方からは外周北擁壁の基礎が出土した。これによって一番庭北石積、同北擁壁、外周北擁壁の位置関係（相互間の距離など）が確認できた。

英祖王陵の崖上の調査では、すでに確認されていた一番庭南石積から、さらに南側で新たに石積遺構（外周南擁壁）が見つかり、二段構造の石積みであることも明らかになった。

本年度は平成9年度以来中断していた鍛冶遺構調査を再開した。関連遺構確認のために周囲の精査を行った結果、土坑が新たに出土した。出土遺物の内容から鉄鍛冶だけでなく、銅製品の製作も行われていたことが明確になり、遺構名称を金属工房跡に改めた。

瓦溜まりの調査は、遺構範囲を確かめるためにこれまでのP-3区から、東側のO-3区へ拡張した。同区では朱漆の塗膜片など、新資料が出土した。金属工房跡とともに次年度も継続調査の予定である。



第3図 グリット配置図 (S=1/500)

第Ⅲ章 浦添ようどれの構造

1. 戦前の浦添ようどれ関連資料

浦添ようどれは沖縄戦で日米両軍の激戦地場となったため徹底的に破壊された。戦後の浦添ようどれからは、かつての荘厳な陵墓の姿を想像することができない。この章では、発掘調査による遺構図を基礎にして、図面資料、古写真、聞き取り情報を使って戦前の浦添ようどれの石積み構造を復元する。

暗しん御門と呼ばれるトンネルの通路と高い石牆に囲まれた墓庭という独特な構造の浦添ようどれは、国宝指定候補に挙げられていたが、去る沖縄戦で跡形も無く破壊された。日本軍は浦添グスクと浦添ようどれ一帯を最前線基地として要塞化した。とくに浦添ようどれは、嘉数高地に陣取る米軍の真っ正面に位置していたため、米軍の激しい砲撃で石積みはもちろん崖面までも崩落した。

崩壊した石積みは、戦後すぐに建設用コーラル材として持ち去られたため、浦添ようどれはむき出しの岩山に変わり果ててしまった。わずかに、崖を掘り込んで造られた英祖王陵・尚寧王陵の墓室石積みだけが、残骸をさらけ出しながらも採石を免れた。戦後、琉球政府文化財保護委員会が両王陵の墓室を修復したが、その周りの石積みの復元には至らなかった。

浦添市教育委員会では、平成元年の浦添城跡の国指定を受けて、その第一期事業として浦添ようどれの復元整備を行うことになった。そのための資料集として、沖縄戦で破壊された石積みの基礎部分の発掘調査と併行して、戦前の浦添ようどれ関係資料の収集を行ってきた。現在までに、図面資料4点、写真資料36点、絵画資料1点、米軍撮影航空写真資料3点を確認した。また、地元古老から聞き取り調査も実施した。

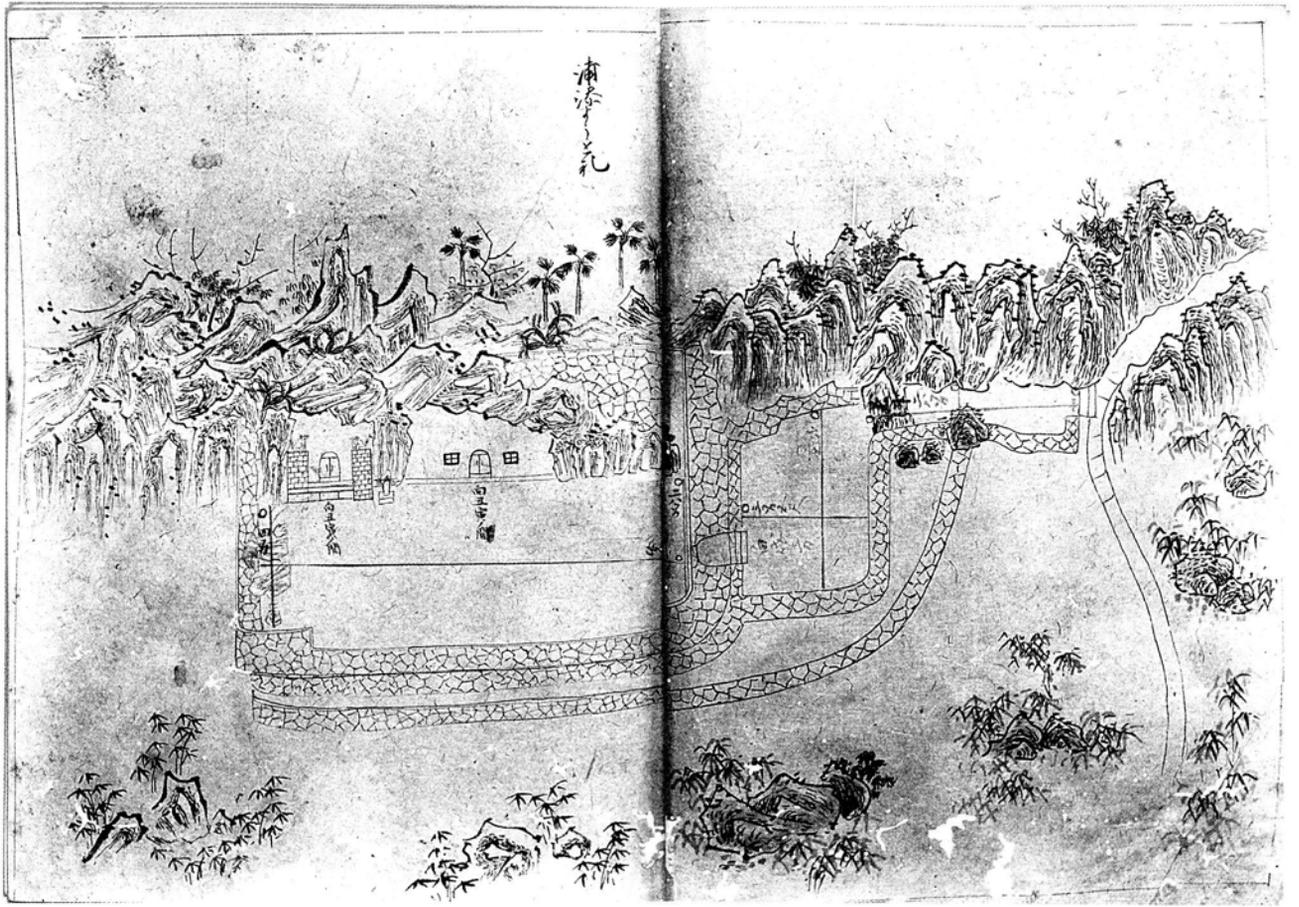
図面資料のうち、次の2点は浦添ようどれの細部まで知ることができる資料である。

「浦添ようどれ絵図」——近世琉球に作成されたと見られる絵図の複写写真である(1)。石積みの構造が的確に描写されている。特に、戦前写真には写されていない外周擁壁が描かれていることや、各部を測定した数値を記載している点で史料価値が高い。記載されている数値の単位には、近世琉球の測量の単位である1間=6.5尺(約1.97m)が使われていると考えられる。

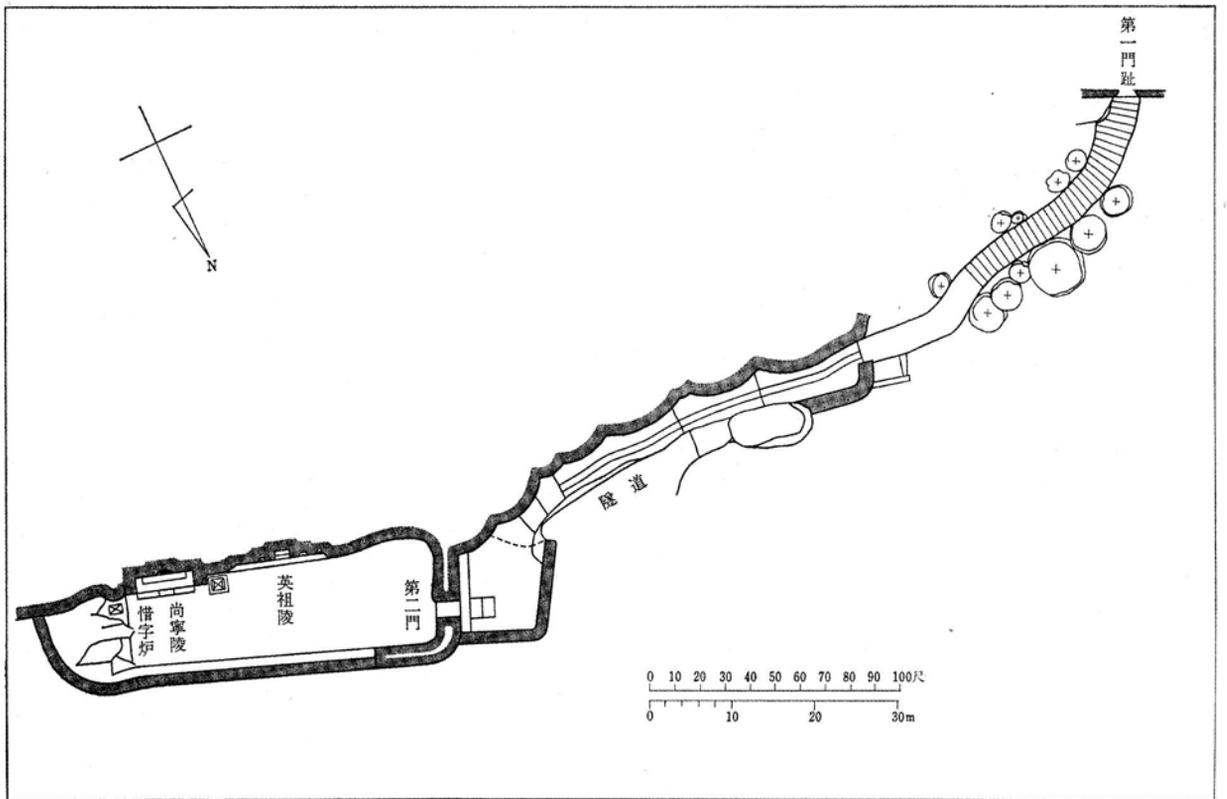
「琉球建築図」——昭和9~10年頃に作成された図面(2)。1/200の平板測量図のように見えるが、実際は、長さや方角の誤差が大きい。各部分を実測して描いた略測図と思われる。全体図としては誤差が大きいですが、石積み細部の構造や寸法を知ることができる資料である。

戦前の古写真・水彩画——戦前の浦添ようどれの古写真として、鳥居龍蔵写真、阪谷良之進写真、山崎正薫写真、田邊泰写真、坂本万七写真、日本民藝館蔵写真、森政三写真、仲座久雄写真などがある。これらは明治~昭和初期に写された写真で、次の各部が撮られている。浦添ようどれの入り口全景、暗しん御門の入り口や内部、暗しん御門から見た二番庭、二番庭からみた暗しん御門、一番庭石積のな一か御門、一番庭入り口側からみた一番庭全景、英祖王陵・尚寧王陵、一番庭奥側からみた一番庭全景、英祖王陵崖上からみた一番庭など多数存在する。これらの写真資料の解析により、浦添ようどれ各部の大きさの復元が可能である。

宮崎東里が昭和8年に描いた浦添ようどれ入り口風景の水彩画には、写真には撮られていない部分が描か



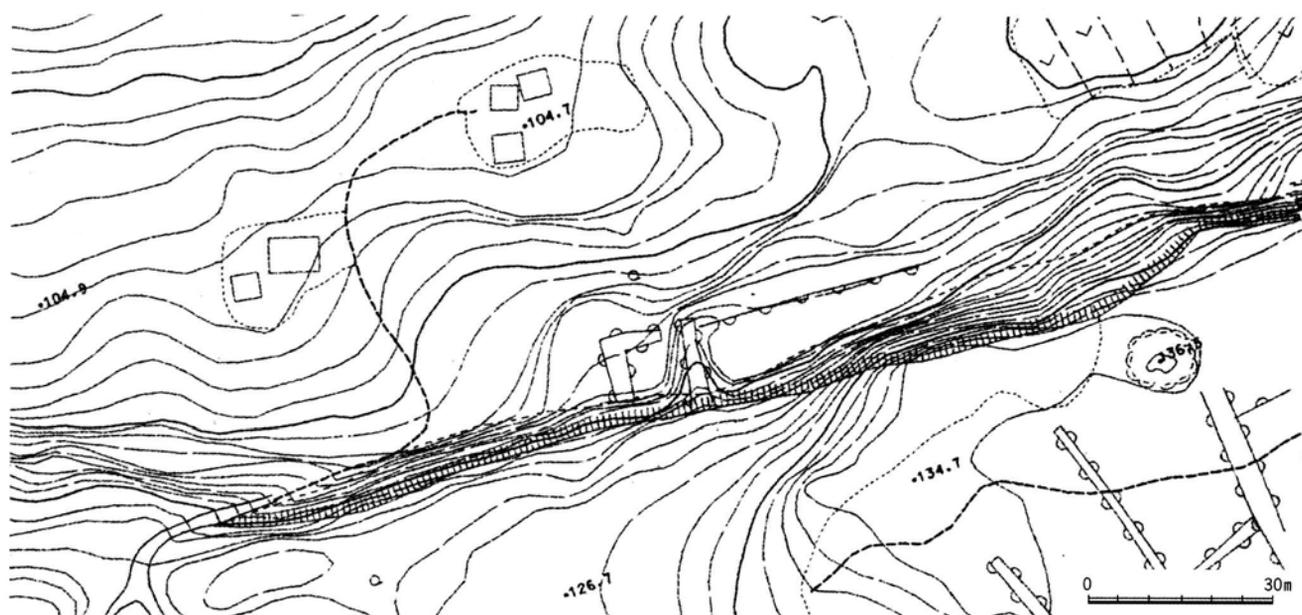
第4図 浦添ようどれ絵図



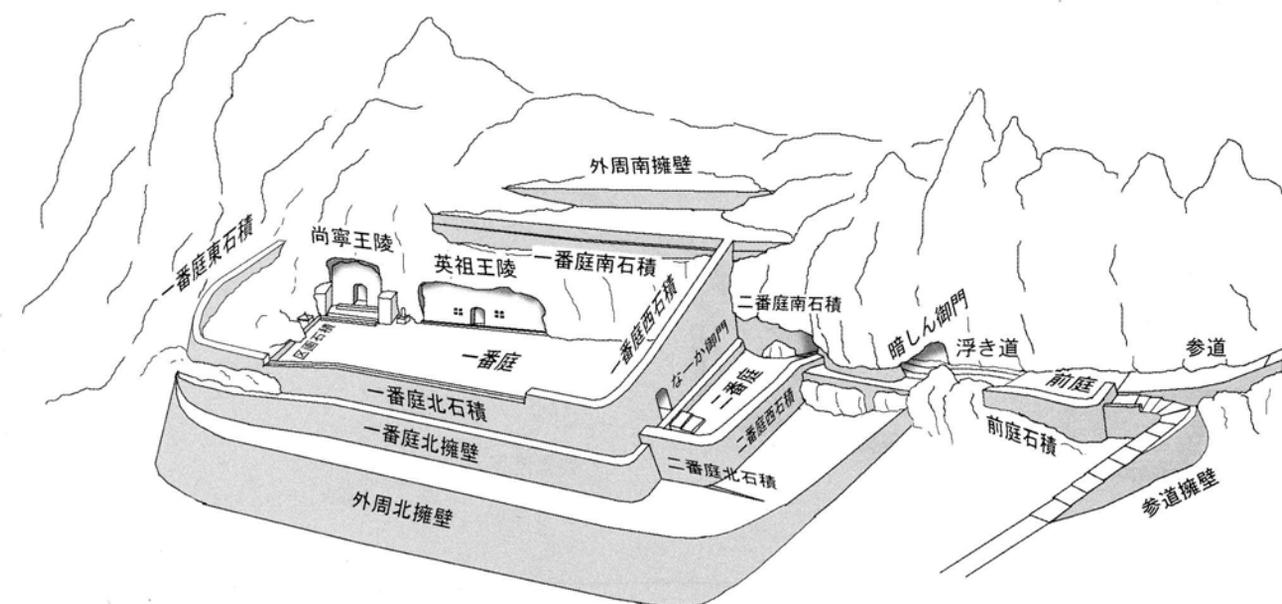
第5図 琉球建築図 (昭和9~10年頃)



第6図 米軍撮影航空写真の浦添ようどれと御墓番の建物



第7図 米軍撮影航空写真から作成した地形図



第8図 浦添ようどれのイメージ図と各部の名称

れている。

米軍撮影航空写真と地形図——米軍が沖縄戦前後に撮影した航空写真フィルムで米国立公文書館に保管されている。浦添ようどれが写された写真が3点確認されている。浦添ようどれの二番庭、一番庭、な一か御門などが確認できる。浦添市教育委員会では1945年4月2日の航空写真で1/1000の浦添ようどれを含む浦添グスク一带の地形図を作成した。第7図はその一部である。

聞き取り情報——戦前まで、浦添ようどれのすぐ下には、ようどれ御墓番の比嘉家の屋敷があった。浦添市教育委員会では、平成7年度の浦添城跡整備基本計画策定に際し、御墓番御子孫の比嘉正二さんと正育さんから、戦前の浦添ようどれの聞き取り調査を行い、『浦添城跡整備基本計画』(3)に収録した。古写真や図面ではわからない情報が得られた。

2、浦添ようどれ石積みの構造と名称

以上の資料から復元すると、戦前の浦添ようどれは、次のような構造だったと考えられる。浦添グスクの丘陵から、崖面にそって急傾斜の石畳階段の参道を下りて踊り場に出る。踊り場の前には門構えの形をした石牆がある。石牆の内側は前庭になっていて、ここから、崖面と巨岩に挟まれた狭い通路を進む。通路には浮き道が設けられており、奥は「**暗しん御門**」と呼ばれるトンネルになっている。暗しん御門の中に階段があり、これを登ると「**二番庭**」の広場に出る。二番庭から石畳階段を上がって「**な一か御門**」(アーチ門)をくぐると「**一番庭**」の墓庭に至る。一番庭は、**英祖王陵**と**尚寧王陵**がある広場で、高い石牆(一番庭石積)で囲まれている。この石牆は外側から擁壁(一番庭擁壁)で支えられ、さらに一番庭擁壁の外側に外周擁壁がめぐらされている。

以上の浦添ようどれ各部の細部を、発掘遺構、戦前の図面・写真・聞き取り資料から再構成すると、次のようになっていたと考えられる。

参道

「ユードゥリヒラ」または「ユードゥリヌヒラ」(ようどれの坂)と呼ばれる石畳階段である。崖上のユードゥリヒラのチヂ(頂)から崖に沿って南東方向に下る急傾斜の石畳階段と、前庭に接する踊り場、そして踊り場から北西方向へ下って御墓番屋敷に至る石畳階段から成る。

聞き取り調査によると、この踊り場はもとは一段低く、ここから石畳道を登って前庭に入ったが、大正末～昭和初期頃に地上げして前庭と同一レベルにしたという。「浦添ようどれ絵図」には改修前の踊り場が描かれていて、一段低い踊り場から階段を登って前庭に入る構造になっている。改修後の踊り場付近の様子は、阪谷良之進写真(昭和6年)に写されている。「琉球建築図」(昭和9～10年)も改修後の図面である。

踊り場から上のユードゥリヌヒラは、1970年頃に現在の石貼りのセメント階段に改修された。階段の端に戦前の石畳階段が残存している。踊り場の石畳も部分的に残っている。踊り場から御墓番屋敷へ下りる階段の一部が残っている。階段の西側の擁壁も残っているが、相方積である。

前庭

参道の踊り場と暗しん御門の浮き道間の小広場で、北側に石牆を巡らす。聞き取りではこの石牆は「くの字に積まれ、クラシンウジョウの入り口付近の大岩まで延びていた」という。前庭入り口の幅は、「浦添ようどれ絵図」によると1間（約2.0m）、「琉球建築図」では約2.7mである。この入り口は、門の構えをなしていたという。

発掘では石牆の基礎が出土した。外側は雑石積みで、内側は一段だけが検出されたので積み方は不明。前庭の床面は、所々岩盤をはつって平坦に仕上げられている。それ以外の部分は聞き取りでは石灰岩石粉が敷かれていたらしい。

暗しん御門と浮き道

前庭と二番庭の間の通路で、崖面と巨岩に挟まれた幅約2mの狭い通路の中心を浮き道が通る。浮き道は、発掘で検出した遺構では、幅は0.9mで、両端を縁石で囲い、内側は石粉で固めていた。浮き道以外の部分も石灰岩石粉が敷かれている。浮き道は、暗しん御門に向かって低くなった後、階段に接続して二番庭に至る。

通路奥の暗しん御門は、長さ約10mのトンネルで、「トゥールウジョウ」（通る御門）とも呼ばれていた。暗しん御門のトンネルと通路は、沖繩戦で大きく損壊していたため、戦後、爆破されて埋められた。暗しん御門は、古写真からみると、岩の裂け目を利用してこれを削り整え、巨岩と天井岩との隙間は石積みで塞いだ人工的なトンネルだったと考えられる。天井部を支える石積みは布積みである。「琉球建築図」には、暗しん御門の天井部岩の軒端が点線で示されている。

暗しん御門出口には、二番庭に上る階段がある。発掘で出土した遺構は3段である。階段の両側の崖面や巨岩面には部分的に袖石積みが積まれ、二番庭石牆に接続している。石積みは、小さな石を使った目地の通る布積みである。

二番庭

暗しん御門と一番庭との間にある方形の広場で、一番庭のな一か御門への階段で一番庭に連絡する。南側は、ノッチ状になった崖の凹面を石積み（布積み）で覆い、西から北側は石牆で囲む。石牆の高さは聞き取りでは約2m。「浦添ようどれ絵図」によると、二番庭の広さは、東西3間5尺（7.6m）、南北6間（11.8m）、「琉球建築図」では、東西約8.5m、南北約11.8mである。

発掘では、二番庭石積の東石積と西石積みの基礎が出土した。いずれも小型の石を使った布積である。西石積は2列出土しているが、「浦添ようどれ絵図」や「琉球建築図」の二番庭の東西の広さ（7.6～8.5m）からすると、外（西）側石積が戦前の二番庭石積の基礎にあたると考えられる。

一番庭

一番庭は英祖王陵・尚寧王陵に面する墓庭で、東西に長い。四面を石積で囲んでいる。東・北・西側を高い石牆で囲み、南側崖上は擁壁構造になっている。一番庭西側は、崖面がノッチ状にえぐれているので、庭床面が広がっている。「浦添ようどれ絵図」では、西側の広がった部分が幅6間（11.8m）、奥の東側で4間（7.9m）。奥行きは判読できない。「琉球建築図」では、奥行き36m内外、西側幅12m内外、

東側奥の幅8.8m。

な一か御門がある西石積は、崖面に向かって急勾配で高くなって崖上に達して、英祖王陵崖上の南石積に接続する。西石積は、古写真では、下半部は比較的大型石を使った布積、上半部は小型石による相方積のように見える。西側石積の外側（二番庭側）には低い擁壁がめぐる。古写真では勾配は緩やかである。擁壁の天端の幅は「建築図」では約1.1m、高さは聞き取りで4尺（約1.2m）。擁壁の基礎の一部が出土したが、小さな石を使った目地の通る布積みであった。西石積は、基礎も含め遺構は全く残存していない。

西石積の北側寄りにな一か御門がある。「琉球建築図」ではな一か御門は、幅約1.9m、長さ約2.9m。古写真では、アーチ天井石は2枚組。な一か御門には、扉はなかったが扉を取りつけるための「溝」があったという。古写真では、アーチの下部両側に貫をはめ込む穴があるが、上部にはこれに対応する貫穴は確認できない。な一か御門の向きは、「浦添ようどれ絵図」は「向戌方」と記している。

英祖王陵崖上の南石積は、残存遺構をみると、二段構造である。小さな石を使った目地がよく通る布積みである。南石積は尚寧王陵の崖上には延びない。

北石積は、英祖王・尚寧王墓室正面向かいの中央部で6尺（1.8m）ほど低くなり（聞き取り）、武者走りと胸壁がつく二段構造になっていた。「琉球建築図」では、武者走りの天端は約1.2m、外側胸壁の天端は1.3m。聞き取りでは、武者走り天端までの高さは2mないしはそれ以上、武者走りの天端は3尺（0.9m）、胸壁部は、高さ1尺（0.3m）、天端は約0.3m。発掘では、北石積の基礎が出土したが、比較的大きな四角石を使った布積みである。ただし、戦前古写真から復元した一番庭北石積の基礎は出土北石積の外側に位置する。出土北石積を埋め殺すようにして戦前の北石積が築かれていたと思われる。

「浦添ようどれ絵図」から、一番庭北石積の外側に擁壁がめぐっていたことがわかる。聞き取り調査によると、北石積外面と擁壁外面との間（擁壁の天端）は3～4尺（1m前後）の平坦面で楽に歩けたという。この擁壁は一番庭石牆の西石積の外側までめぐって、二番庭側の擁壁につながっていたと考えられる。発掘で出土した基礎の石積みは布積みである。

尚寧王陵の端には、一番庭を横断する区画石積がある。この石積みまでは平坦な庭面で、石積みから東側は岩盤部分である。現在の区画石積は、戦後の修復によるもので、戦前の石積みがその下部に一部残っていた。区画石積の上に輝緑凝灰岩製の石棺の蓋をかぶせた惜字炉がある。「浦添ようどれ絵図」には、この惜字炉は描かれていない。

一番庭石牆の東石積は、古写真では崖面に向かって高くなっているが、勾配は緩やかで崖面の途中までの高さしかない。石積みは小さな石を使った布積みに見える。発掘では基礎が部分的に出土した。小さな四角石で、石積み幅は1.4m。石積みラインは湾曲しているが、「琉球建築図」とはずれがある。また、東石積の一部には布積みの袖石積が検出された。これは古写真に写されている。

英祖王陵・尚寧王陵

一番庭のほぼ中央崖面に英祖王陵がある。崖面を穿って大きな墓室を造り、表面を石積みで塞ぎ、これに漆喰化粧を施している。墓口はアーチ構造で、両側に田の字形の窓がある。墓室前面の基壇は低い二段構造

になっている。墓口の扉は、現在は琉球政府の修復で観音開きのセメント製扉になっているが、古写真をみると戦前は数枚の石板を立てこれを大きな香炉石で押さえる形であった。「浦添ようどれ絵図」では、墓室扉は把手付きの観音開きになっている。

沖縄戦直後の写真では、英祖王陵の墓室前面は大きく破壊され、かろうじて墓口のアーチと基壇の一部が残っている。現在、英祖王陵の西端には琉球政府時代の修復による半円筒形の石積みがあるが、これは戦前は存在しなかった。沖縄戦で英祖王陵墓室西端の崖面が崩落したために、これを石積みで補ったものと思われる。

墓口の向きは「浦添ようどれ絵図」は「向丑寅ノ間」（北東）と記している。現在の墓口の方角は、座標北から測ると北北東に近い。

尚寧王陵の墓室前面の石積は、沖縄戦で完全破壊された。現在の墓室前面は琉球政府時代の修復によるものである。ほぼ戦前の形に復元しているが、一部古写真と異なるところがある。尚寧王陵も、英祖王陵と同じく墓室前面を漆喰化粧している。墓口の基壇は3段である。墓口の両側には、漆喰化粧を施した四角い石積み（漆喰化粧）の高い袖石積みがあり、その上にそれぞれ輝緑凝灰岩製の獅子像が置かれていた。英祖王陵との間には、浦添ようどれの碑文がある。石灰岩の一個石の台座に輝緑凝灰岩製の碑身が建てられていたが、碑身は沖縄戦で破壊された。琉球政府の修復事業で、同じ台座の上に碑身が復元されているが、石碑の材質と形が戦前とは異なっている。

外周擁壁

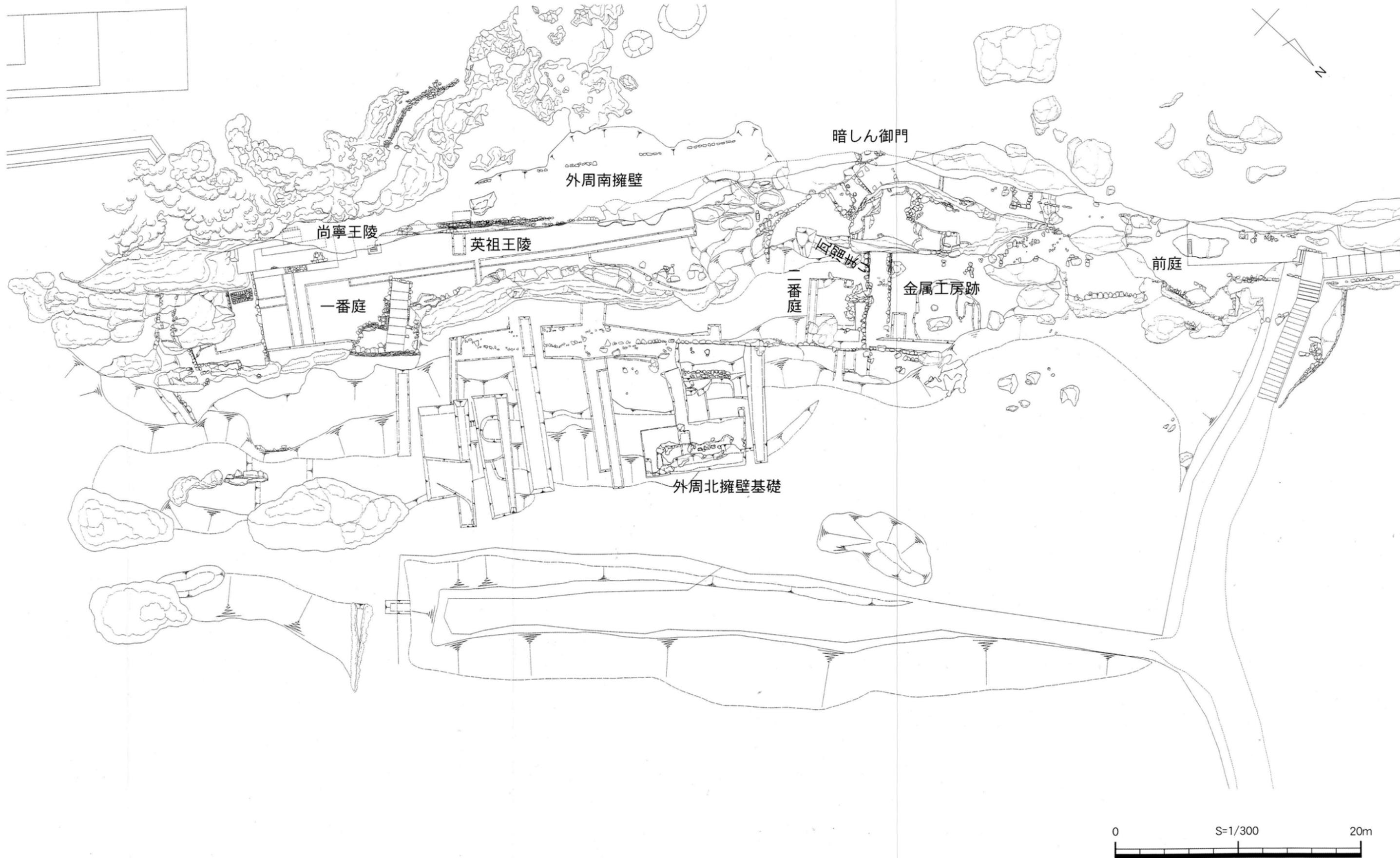
「浦添ようどれ絵図」には一番庭と二番庭を取り囲む外周擁壁が描かれている。聞き取り調査では、「外周石積があったという話は聞いたが、石積みは覚えていない」というから、昭和期には崩れていたものと思われる。部分的に残っていた外周擁壁は、比較的大型の石をつかった布積みである。

3、浦添ようどれの復元イメージ

発掘調査による出土遺構図を基礎に、戦前・琉球王国時代の平面図資料を参考にして作成した、昭和初期頃の浦添ようどれのイメージ図が、第8図である。これらの図は、参道と踊り場など未発掘地区は推定部分が大きく、また、石積みの高さなどの検討もまだ十分ではないが、戦前の浦添ようどれはほぼこのような形であったと考えられる。

註

- (1)琉球政府文化財保護委員会で文化財修復に携わった仲座久雄氏のコレクションで、野々村孝男氏が再発見した絵図写真。
- (2)『琉球建築』（田邊泰、座右宝刊行会、昭和47年）に掲載された「ようどれの墓室配置図」。
- (3)『浦添城跡整備基本計画』（浦添市教育委員会、1996年2月）



第9図 浦添ようどれ全体平面図

第IV章 発掘調査の成果（石積遺構）

発掘調査は、浦添ようどれ復元整備に先駆け、戦前まで存在した石積みの残存遺構を確認する目的で実施した。

調査の結果、去る沖縄戦や戦後の採石等で、すでに壊滅状態と思われていた石積遺構は、概ね良好な状態で出土した。そのほとんどは、表土（戦中以降の堆積層）を除去した段階で出土をみたが、本来土中に埋まっている部分などの基礎遺構が多かった。

こうした石積遺構のほかにも、金属工房跡や瓦溜まり（土坑）が出土するなど、調査前には予想していなかった成果もあった。

今報告では出土した石積遺構についてのみ概要を記し、出土遺物や、瓦溜まり、金属工房跡等の遺構については次回以降の報告とした。また、戦後琉球政府によって修復された尚寧・英祖両王陵をはじめ、新たに設置された石積み等（ようどれの碑前の階段や、英祖王陵西端の半円筒形石積み等）については、記述を見合わせることにした。

以下、石積遺構について各地区ごとに記す。

1. 一番庭及び外周南擁壁

尚寧王陵および英祖王陵の墓庭。北西－南東方向を長軸とする平面長方形で戦前までは陵墓を囲む石積みめぐらされていたが、沖縄戦で大部分が崩壊した。墓庭そのものも攪乱を受け、とくに墓庭北半部の造成部分は大きく崩れ、現在は岩盤むき出しの崖となっている。

発掘調査では、東石積、北石積及び北擁壁、西石積擁壁、南石積が出土した。ほとんどが石積みの基礎部分で、しかも断続的な出土であったが、一番庭を構成する石積みは大方出土し、石積みのライン（一番庭の範囲等）を確認することができた。ただし、な一か御門（アーチ門）のあった西石積の基礎は出土しなかった。

各石積みの状況についてみると、東石積は断続的に1～3段出土した。内外面とも残存しているため、石積みの厚さを確認することができた。

北石積については、根石や基礎など本来は土中に埋まっている部分の出土であったが、基礎部分が出土した箇所（北石積2）では断ち割りをを行い、根拵えや基礎工法を知ることができた。

英祖王陵上に積まれた南石積は、岩盤ごと大きく崩壊した部分もあるが、本来積まれていたと考えられる範囲の約2割弱が残存していた。そのうちの幅約5mにわたって天端まで残っており、石積みの高さ、技法などを知る上で他の遺構に比較して情報量は多かった。この南石積のさらに南側上部にも、これに平行する石積遺構（外周南擁壁）が新たに確認され、英祖王陵上の石積みが二段構造であることも判明した。

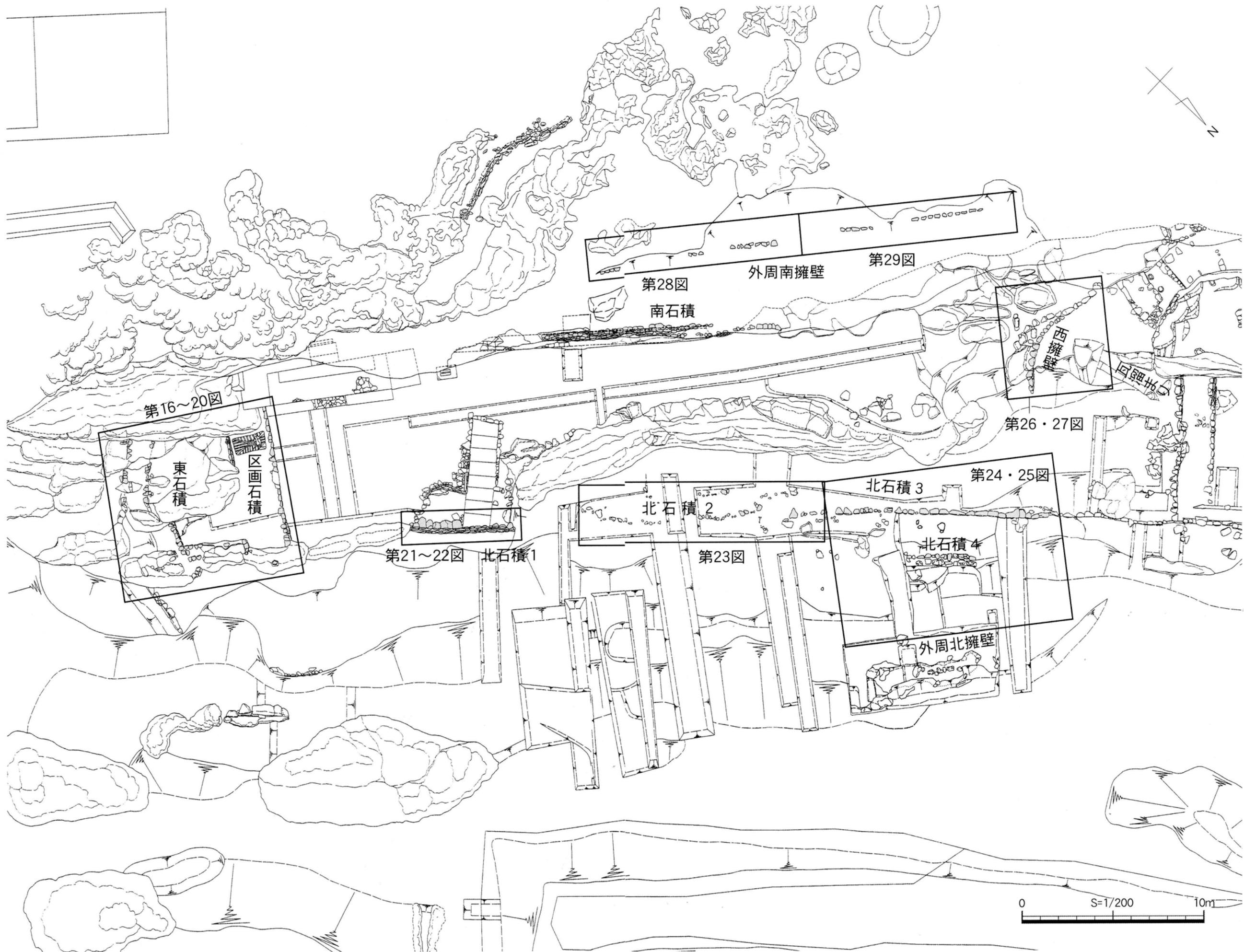
出土した各石積み遺構について表－1・2にまとめた。なお、北石積は、便宜上、1～3に分割して記述した。

表-1 遺構観察表 (一番庭)

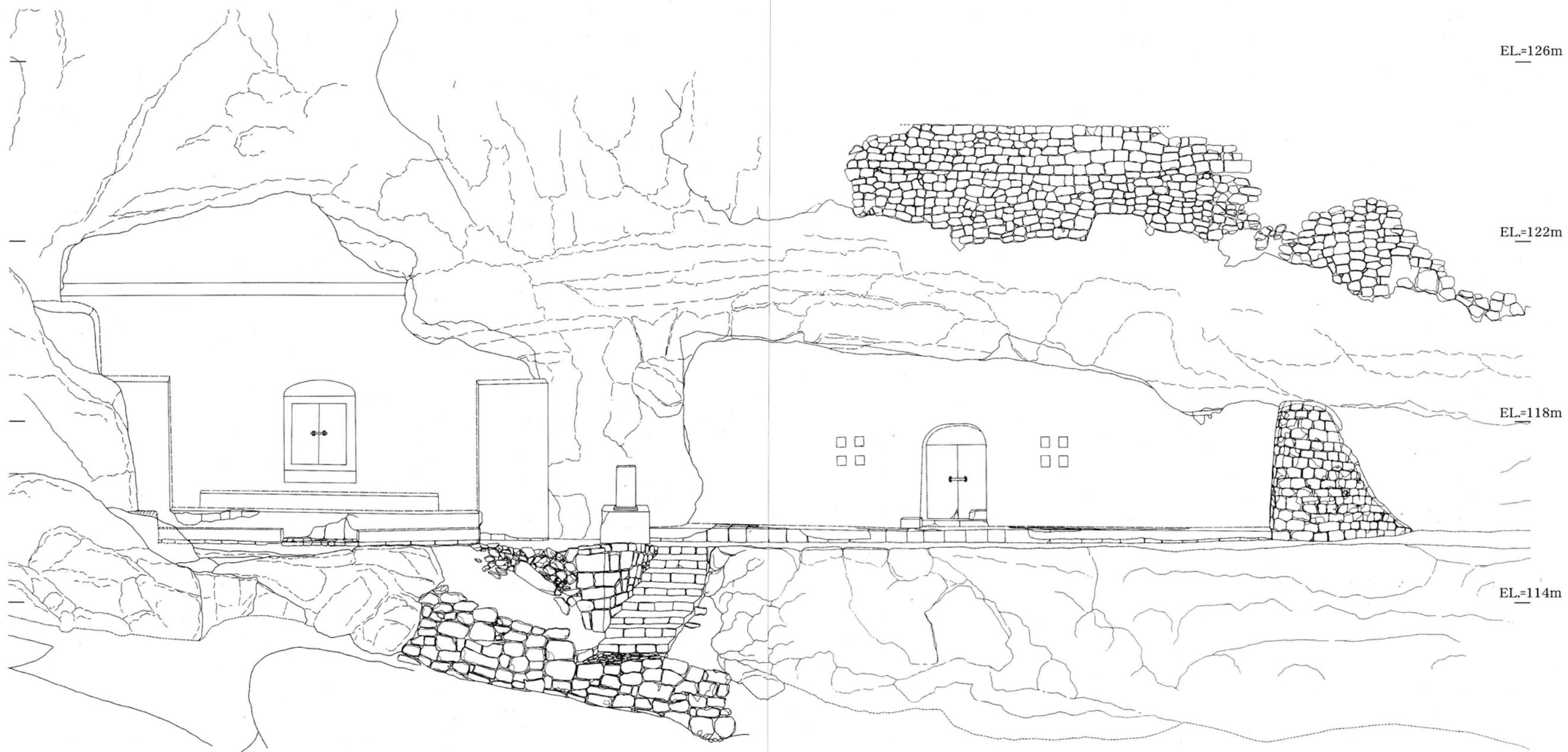
遺構名称	挿図番号 写真番号	技法	構造 (擁壁) (石牆) (その他)	①残存長 ②厚さ(幅) ③残存高(最大) ④勾配 ⑤軸方向	石のサイズ ①たて ②よこ ③控え	特徴・残存状況等 (性格・形状・工法・根拵え・裏込め等)
						他遺構との関係・その他
一番庭東石積	平面図 第16図1 立面図 第18図2・3 断面図 第18図1 図版5	切石積み (布積み)	石牆	①6.9m ②1.4m ③65cm ④内面 ほぼ垂直 外面 81° ⑤南西-北東 (平面観はわずかに曲線)	①12cm~25cm (平均 18cm) ②13cm~38cm (平均 25cm) ③18cm~33cm (平均 22cm)	一番庭東端の石積み。平面観はわずかに曲線を描く。南側は断層の垂直な岩盤にすりつけている。北半部はほとんど欠失しているが、南半部は内外面とも1~3段残る。 石積みの基礎となっている岩盤は南側から北側へ階段状に下っている。切石は基本的に削平した岩盤の上にのせているが、岩盤の窪んだ部分には混礫土を充填して切石を据えている。裏込めは10~20cm礫。
一番庭袖石積	平面図 第16図1 立面図 第19図1・3・4 断面図 第19図2・5 図版6	切石積み (布積み)	袖石	①全長5m ②60cm ③70cm ④東石積側はほぼ垂直。 北石積側西端の曲面石積みは82° ⑤東石積側 N21° E 北石積側 N53° W	①11cm~30cm (平均 17cm) ②14cm~40cm (平均 24cm) ③13cm~26cm (平均 22cm)	一番庭石積と北石積の内側コーナー部に犬走り状にとりつく石積み。コーナー部補強の役割か。東石積側から北石積側へ内角約106°で連結し平面観は「く」字状。本来の高さは不明。切石は主に長方形だが、正方形に近いものも散見される。 東側の袖石は、傾いたものが多く乱雑。積み直されたのだろう。本来は布積みと考えられる。混礫土で整地した上に積み上げている。3段残存。 北側は、岩盤を垂直に削り、面をつくり出している。岩盤上も削平し石積みされる(1個残存)。コーナー部付近は岩盤上を混礫土で整え、その上に石積みを行っている。西端は西向きの石積みで曲面に仕上げている。4段まで確認。 一番庭東石積及び一番庭北石積に対しそれぞれ平行関係。
一番庭区画石積	平面図 第16図1 立面図 第17図 断面図 第16図2・3・4 図版4-下	切石積み (布積み)	擁壁	①7.3m ②- ③50cm ④ほぼ垂直 ⑤N36° E	①10cm~32cm (平均 22cm) ②11cm~48cm (平均 30cm) ③17cm~37cm (平均 23cm)	墓庭と一番庭東部とを区画する石積み。2~3段で構成されている。北端は斜めに傾いた岩盤に、南端は尚寧王陵の袖石にすりつけている。 根石の確認できた部分では、削平した岩盤に積み上げているが、他は未確認。戦後の修復工事で積み直され、目地や岩盤との隙間などにセメントが詰められている。 石積み中央のセメント部分は、戦前までは東側からの岩盤が墓庭まではみ出していた(古写真より)。
一番庭北石積1	平面図 第21図1 立面図 第21図2 断面図 第22図1・2 図版7	切石積み (布積み)	擁壁 + 石牆	①6.9m ②- ③1.6m ④断面A86° 断面B89° ⑤N50° W	①16cm~48cm (平均 26cm) ②14cm~78cm (平均 41cm) ③-	一番庭北石積のうち、尚寧王陵前の崖下中腹で出土した石積みを①とした。本来は土中に埋まっているものである。 石積みは基本的に長方形の切石を横位に積み上げているが、五角形などもみられサイズも大小ある。また、小型の長方形切石を縦位に使用した箇所もみられる。4~7段残る。 最下部が確認できた部分に限ってみると、石積みは岩盤上に積み上げられている。石積みの東端はハグ-ハグした岩盤の側面にすりつけている。同岩盤の上面は平坦に削られており、東側への延長ラインは岩盤上を通過していたことが窺える。本遺構の延長線上約8m地点の岩盤上に切石1個が残る(平面図:第16図1の断面Jライン上、断面図:第20図3)。 調査時には、北擁壁の上部整地層と考えられる淡黄色の石灰岩粉砕土が、本石積みの中位まで被っていた。
一番庭北石積2	平面図 第23図1 断面図 第23図2 図版8-上 図版9-上・中	基礎遺構のみ出土	擁壁 + 石牆	①13.4m ②- ③- ④- ⑤N49° W	①- ②- ③-	英祖王陵前の崖下平坦部で出土した基礎遺構を②とした。 基礎造成は橙褐色砂質土を幅1.3~2.2m、深さ50cm前後で溝状に掘り込んだあと、その内部に20~30cmを主とした石灰岩礫を詰め込み、根拵えとしている。 東側の北石積①とは、遺構そのものの直接の繋がりは確認できなかったが、延長線上では矛盾しない。西側は北石積③に連続している。

表-2 遺構観察表 (一番庭)

遺構名称	挿図番号 写真番号	技法	構造 (擁壁) (石牆)	①残存長 ②厚さ(幅) ③残存高(最大) ④勾配 ⑤軸方向	石のサイズ ①たて ②よこ ③控え	特徴・残存状況等 (性格・形状・工法・根拵え・裏込め等)				
						他遺構との関係・その他				
一番庭北石積	平面図 第24図	切石積み (布積み)	擁壁 + 石牆	①12.5m ②- ③1.5m ④88° ⑤N45° W	①14cm~48cm (平均 29cm) ②14cm~70cm (平均 45cm) ③20cm~40cm (平均 30cm)	英祖王陵前の崖下で出土した基礎遺構(北石積②)の西側に 続く石積みを③とした。西側は二番庭北石積に連続する。 本来土中に埋まっている石積みである。一番庭西擁壁との一番 庭の西側コーナーは調査グリットのOライン上あたりと推察さ れる。 石積みは長方形の切石を横位に積み上げる方法で2~5段残 っている。裏込めは20cm前後の石灰岩礫を含む淡黄色の石灰 岩粉砕土。 下部構造が確認できた箇所に限ってみると、まず大型の粗割 石を拵え、5~10cm大の礫でその上面を整えて、切石積みを行 っている。				
	立面図 第25図1					粗加工の基 礎根石	擁壁	①3.3m ②2.2m(一番庭北 石積面までの距 離) ③40cm ④- ⑤N44° W	①12cm~42cm (平均 25cm) ②15cm~66cm (平均 36cm) ③-	一番庭北石積を外側(北側)から支える擁壁。基礎部分がわ ずかに残存している。混礫砂質土を溝状に掘り込み、内部に粗 加工の切石を並べている。1~2段残存。根固めとみられる自然 石がこれと平行に残る。 一番庭北石積みとの間が裏込め部分に相当し、10~30cmの 礫を含む黄茶褐色の混礫土が詰められている。
	断面図 第25図2・3									一番庭北石積から北へ約2.2mの間隔をおいて平行に走る。
一番庭西擁壁	平面図 第26図1	切石積み (布積み)	擁壁	①5.0m ②- ③80cm ④80° ⑤N44° E	①12cm~34cm (平均 24cm) ②20cm~50cm (平均 34cm) ③24cm~38cm (平均 33cm)	一番庭西石積の西面(二番庭の東面)に取り付く基壇状擁壁。 一部石積み下部から基礎造成まで確認できた。 上面から見ると、遺構の南側はゆるやかな曲線を描き、途中か ら北側へ直線的に延びる。 石積みは長方形の切石を横位に積み上げる手法。人頭大の礫 を詰めて根拵えとし、その上に切石を積み上げている。最下段 の切石は大型。2~4段残存するが、北端部は縦目地が開き、 崩れかかっている。				
	立面図 第27図1					西側で出土した瓦溜まりを人頭大礫で埋立て造成し、これを根 拵えとして石積みを構築している。 北側崩壊部からの推定延長線は北石積とほぼ直交する。 南端起点の切石上に、二番庭南石積が重なっている。				
一番庭南石積	平面図 第26図2・3・4	切石積み (布積み)	擁壁	①15.2m ②3~4m(外周 南擁壁まで の距離) ③2.6m ④上段:75° 下段:85° ⑤N47° W	①8cm~52cm (平均 18cm) ②12cm~64cm (平均 28cm) ③-	英祖王陵上に構築されている擁壁。残存長のうち5.5mは天 端まで残っている。 削平した岩盤を石積みの基礎とし、岩盤の縁に沿って直線的 に積まれている。石積みは長方形の切石を横位に積む方法。縦 目地のおった箇所が随所にみられる。石積みはほぼ中央部の 横目地で上下2段に分かれ、上段はわずかに南側へ面をずらし て積み上げている。上段には大型切石も散見される。裏込めは 10~20cmサイズの石灰岩礫。				
	断面図 第27図2・3					本遺構から南側へ3~4mの位置に外周南擁壁があり、本 遺構と概ね平行関係にある。				
外周南擁壁	図版8 図版9-下	切石積み (布積み)	擁壁	①21m ②- ③70cm ④- ⑤N54° W	①12cm~36cm (平均 23cm) ②18cm~49cm (平均 33cm) ③19cm~40cm (平均 27cm)	一番庭南石積(英祖王陵直上の石積み)から南側へ3~4m に位置する擁壁。東西方向に1~2段断続的に残っている。最 下段のレベルは西端から東側へほぼ水平に移行するが、途中か ら次第に高くなり、両端の比高は160cm前後となっている。 西端部で見ると最下部の切石は、水平に整地された淡黄色の 石粉層上面に据えている。石積みの高さを背後断面の裏込め層 (5~20cm大の礫層)から推察すると、少なくとも1.5m以 上あったと考えられる。				
	図版10					一番庭南石積とは概ね平行関係にあるが、西へ向かうほど次 第にその間隔が開いている。 本石積みの積み上げ面(淡黄色石粉層の上面)は、一番庭南 石積の天端とほぼ同レベルであることから、石粉層は南石積の 上面整地層と考えられる。				



第10図 一番庭遺構位置図



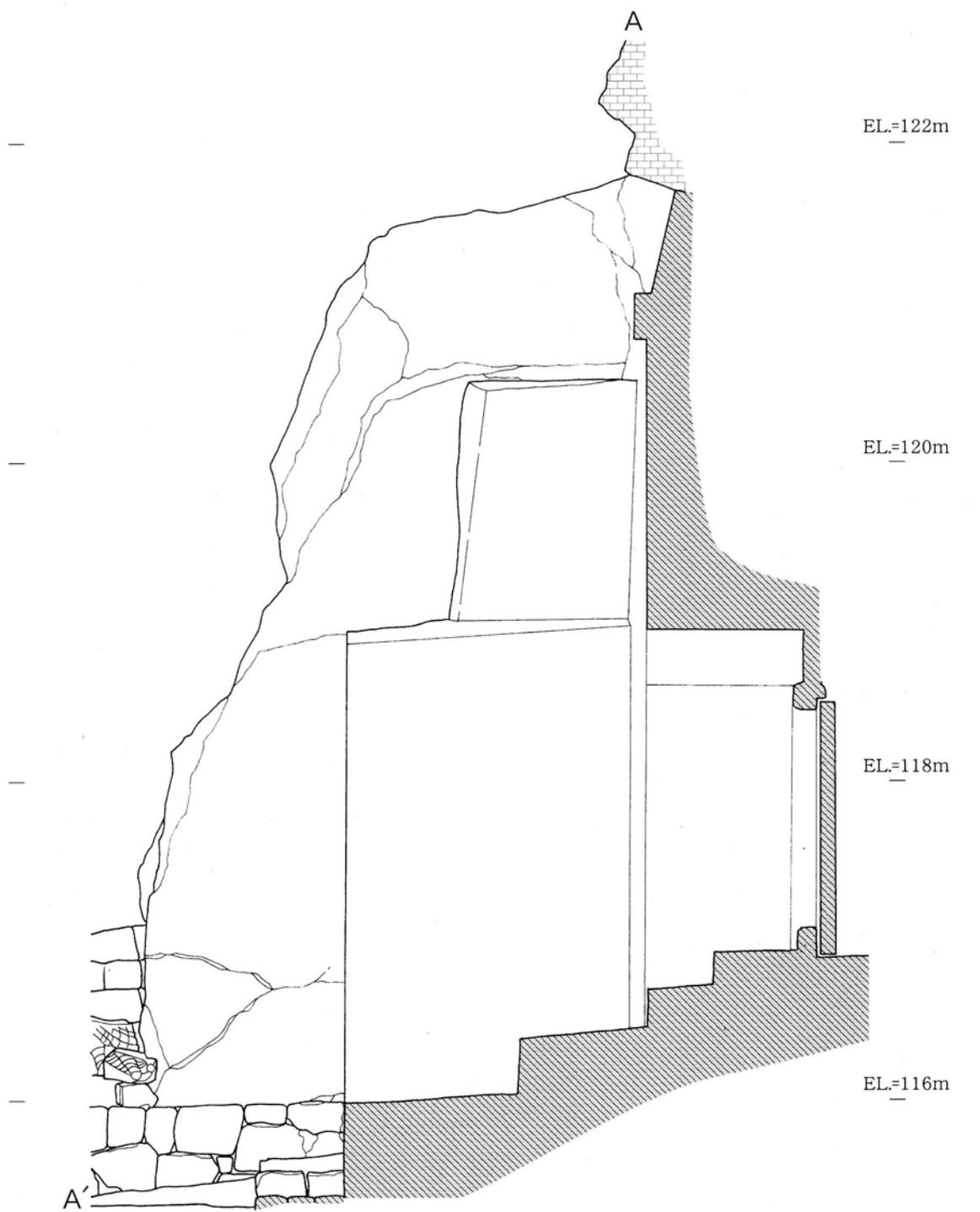
第11図 尚寧王陵及び英祖王陵立面図



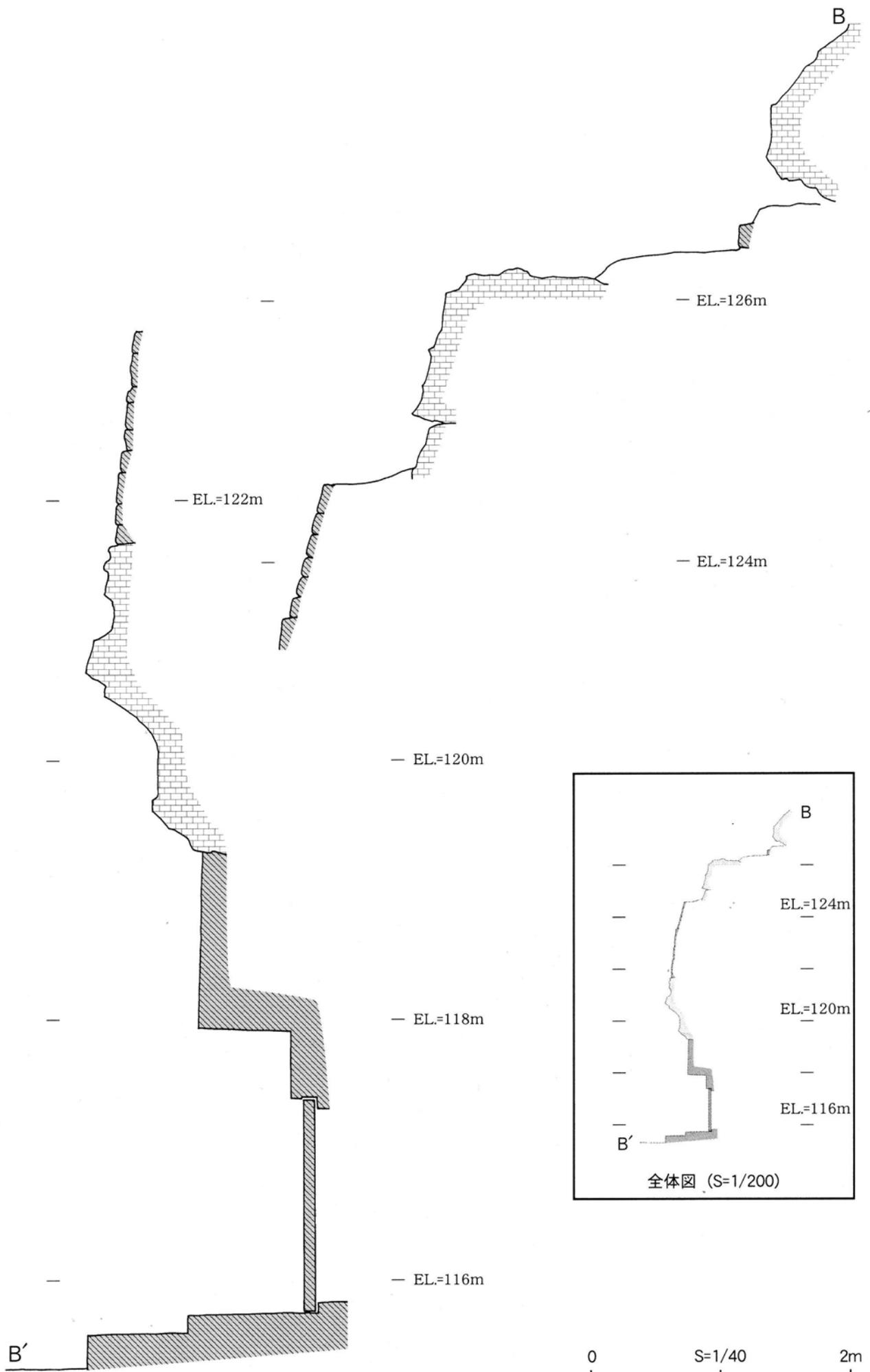
第12図 尚寧王陵立面図



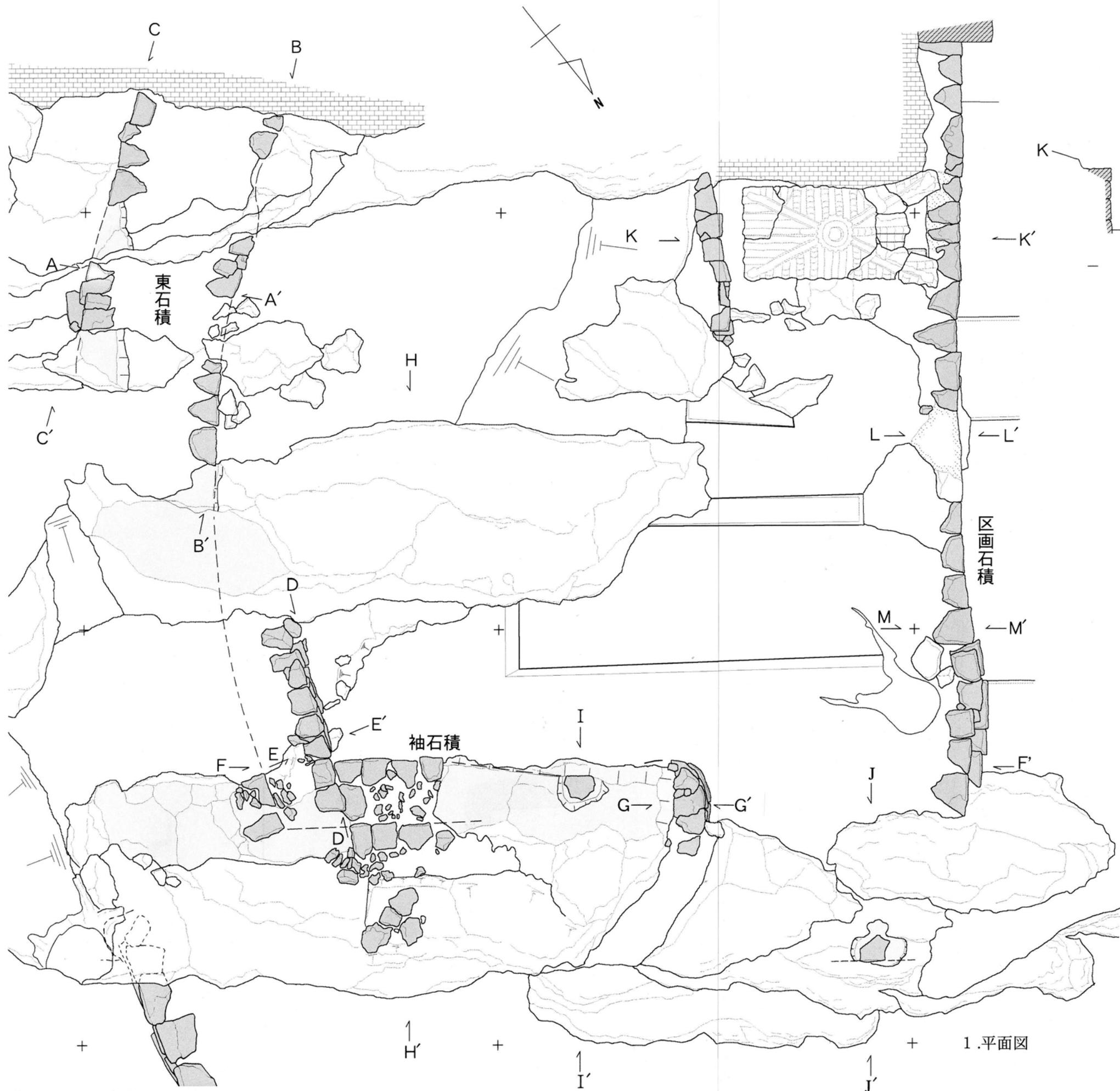
第13図 英祖王陵(一番庭南石積)立面図



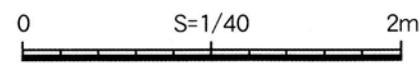
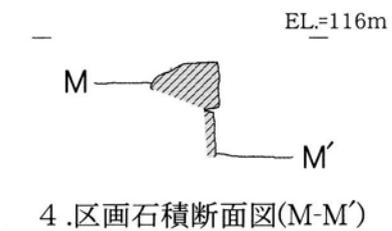
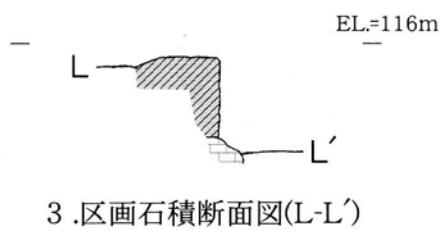
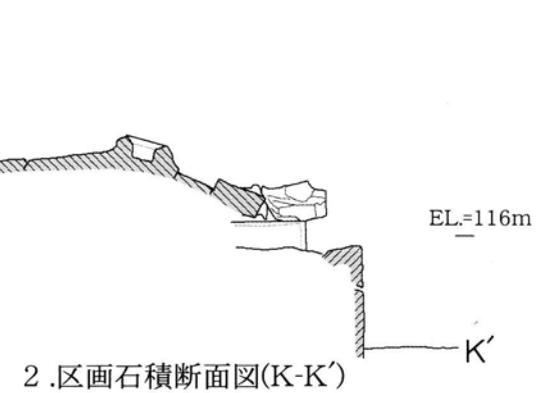
第14图 尚寧王陵断面图

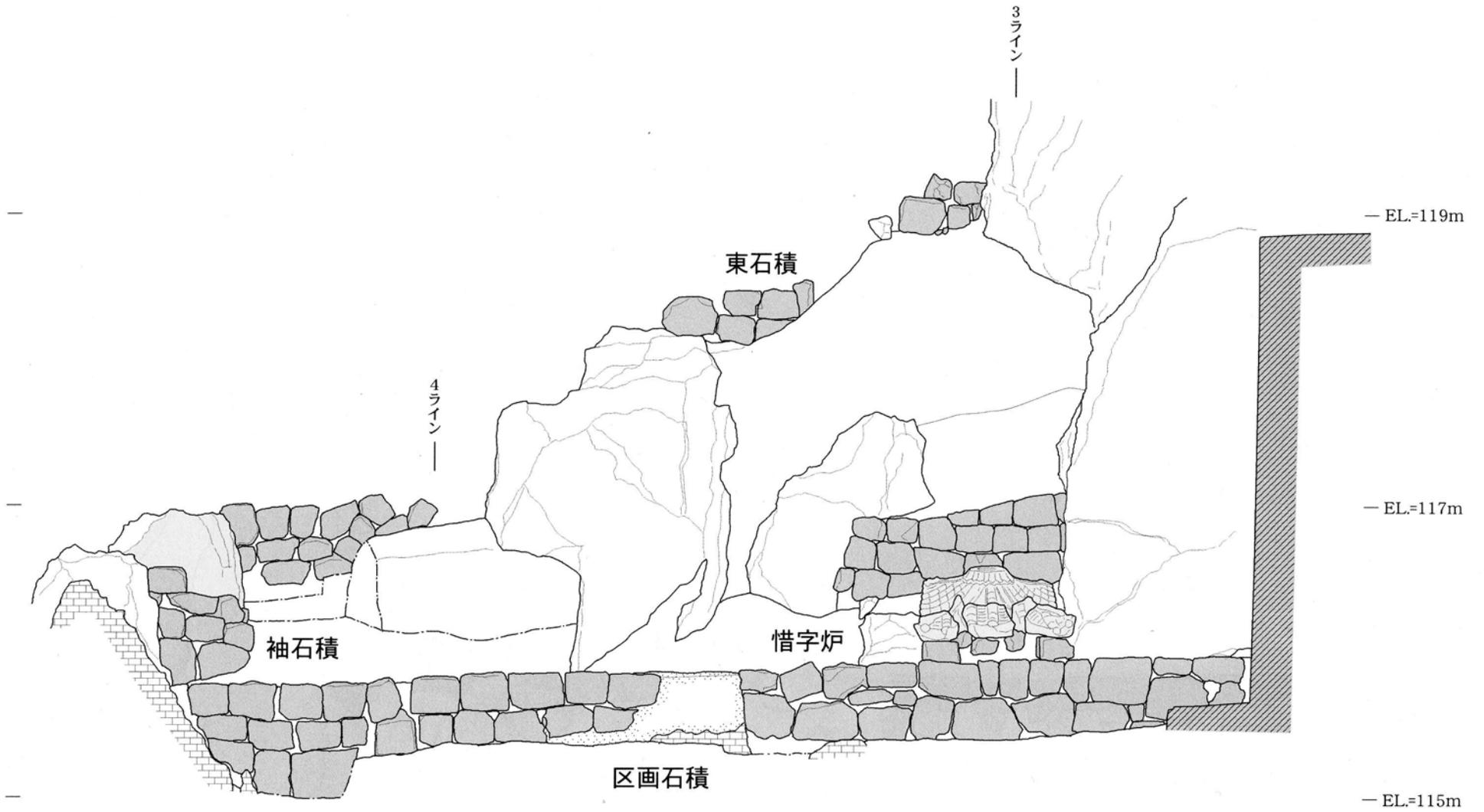


第15图 英祖王陵断面图

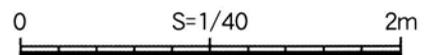
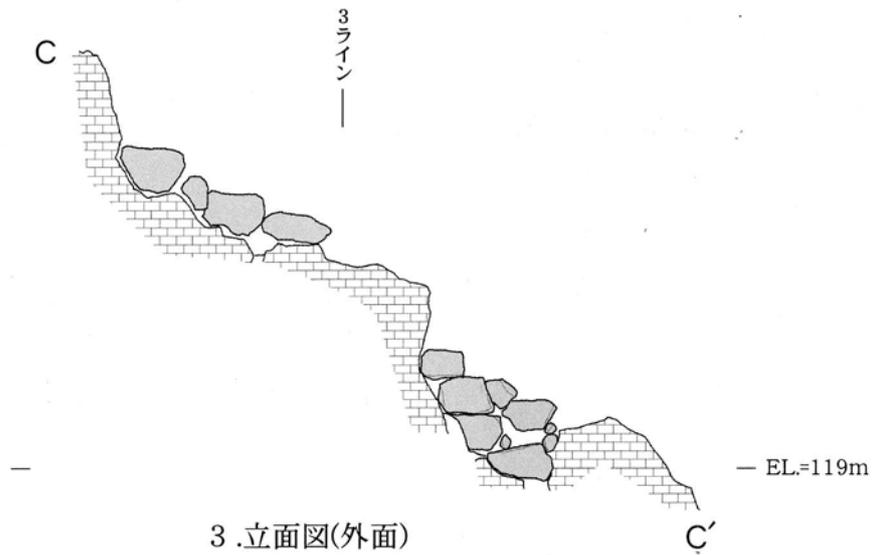
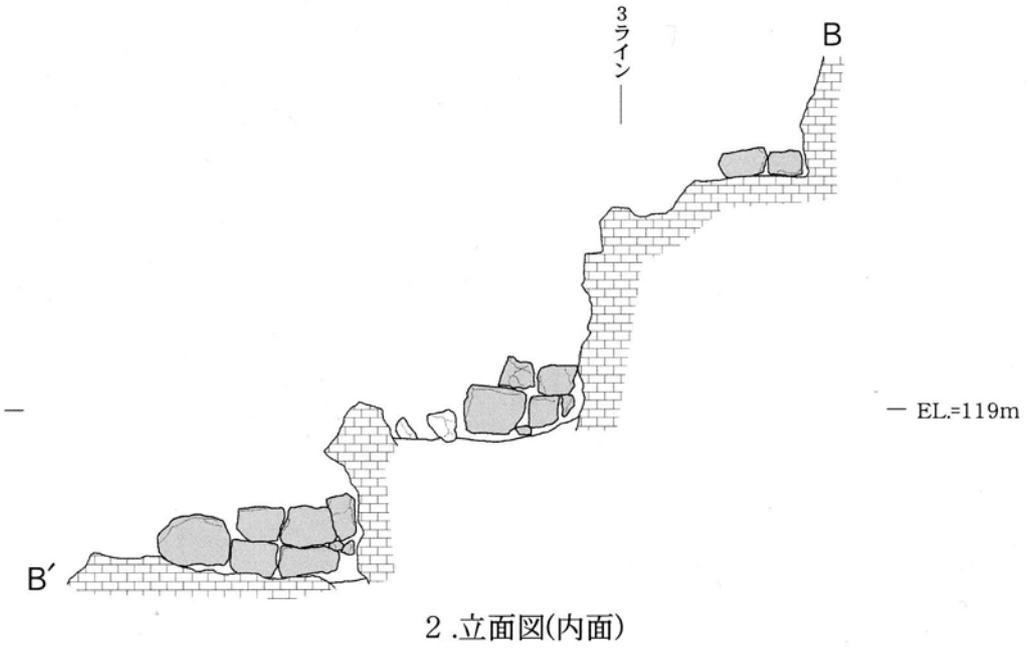
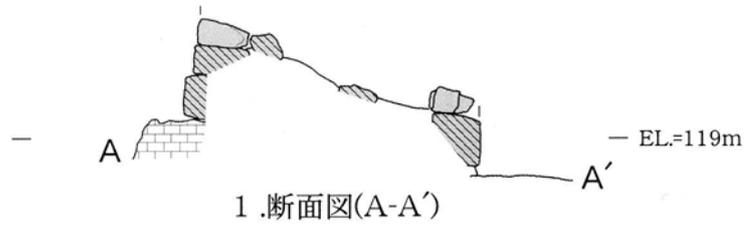


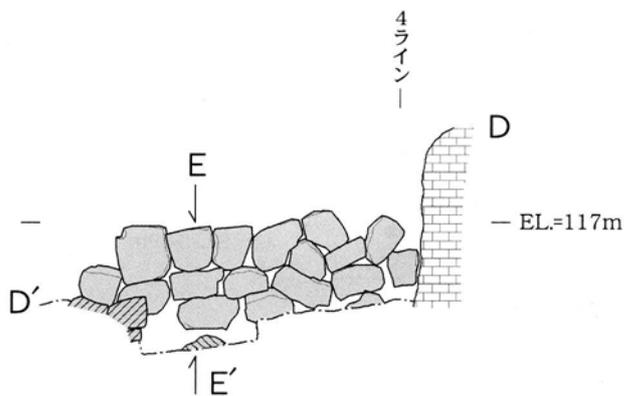
第16図 一番庭東部平面図



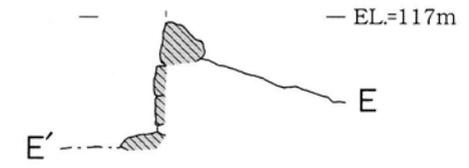


第17図 一番庭東部立面図

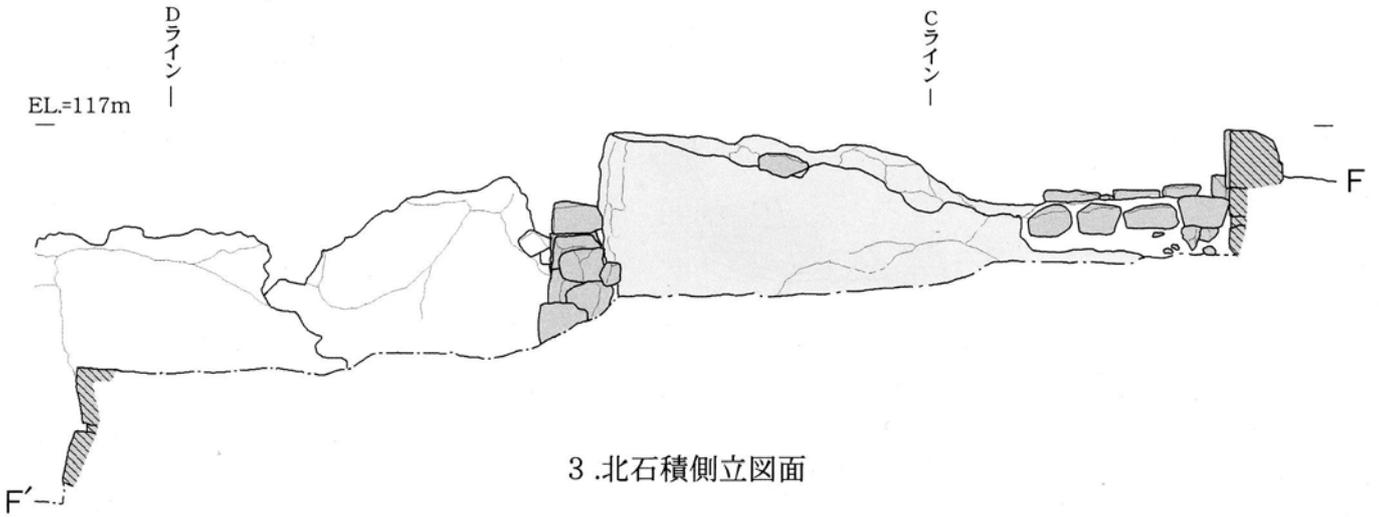




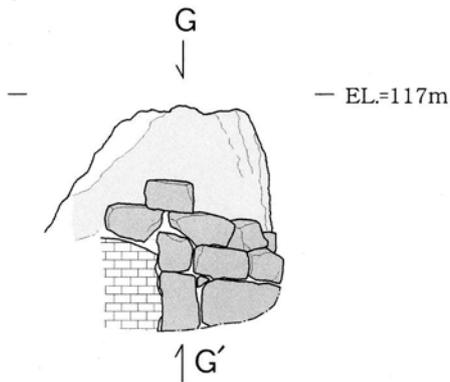
1. 東石積側立面図



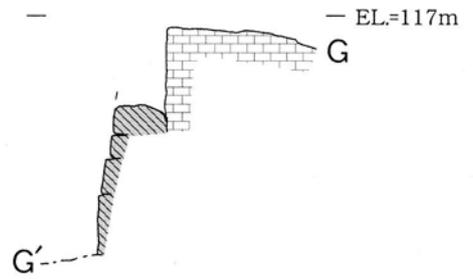
2. 東石積側断面図(E-E')



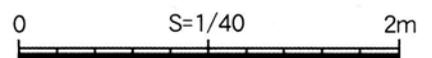
3. 北石積側立面図

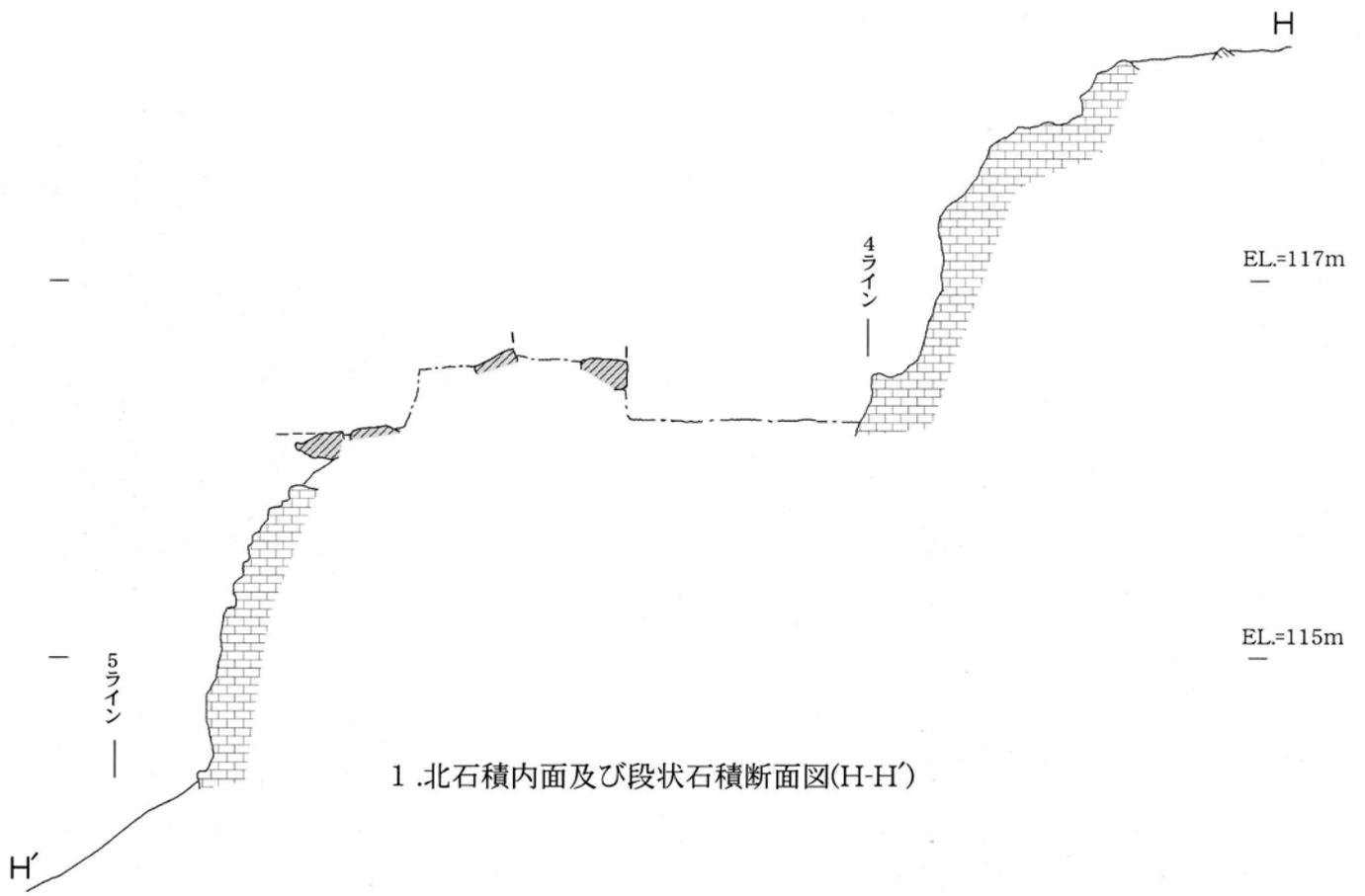


4. 西端(曲面)部立面図

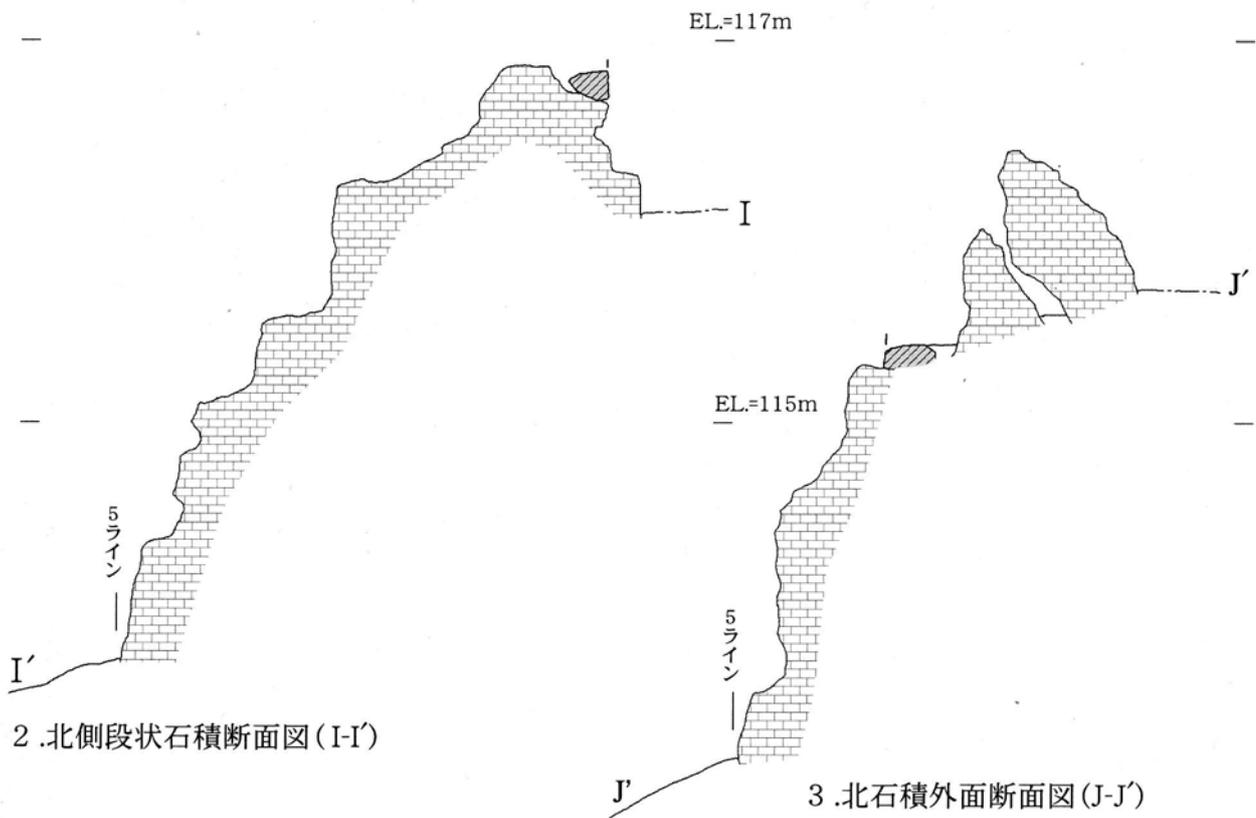


5. 西端(曲面)部断面図(G-G')



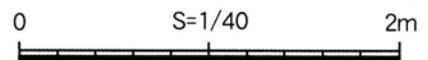


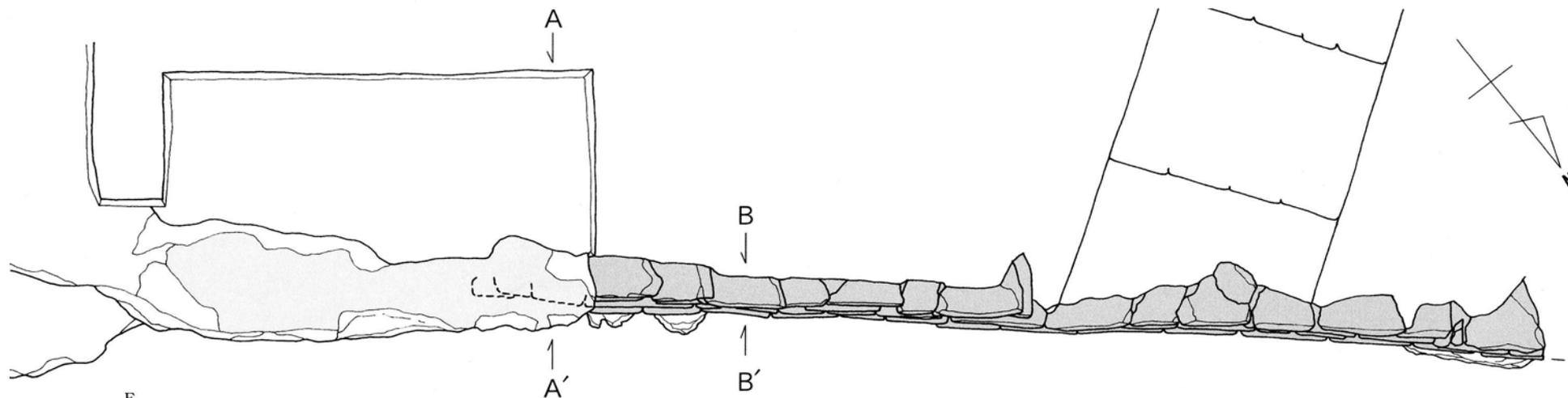
1 .北石積内面及び段状石積断面図(H-H')



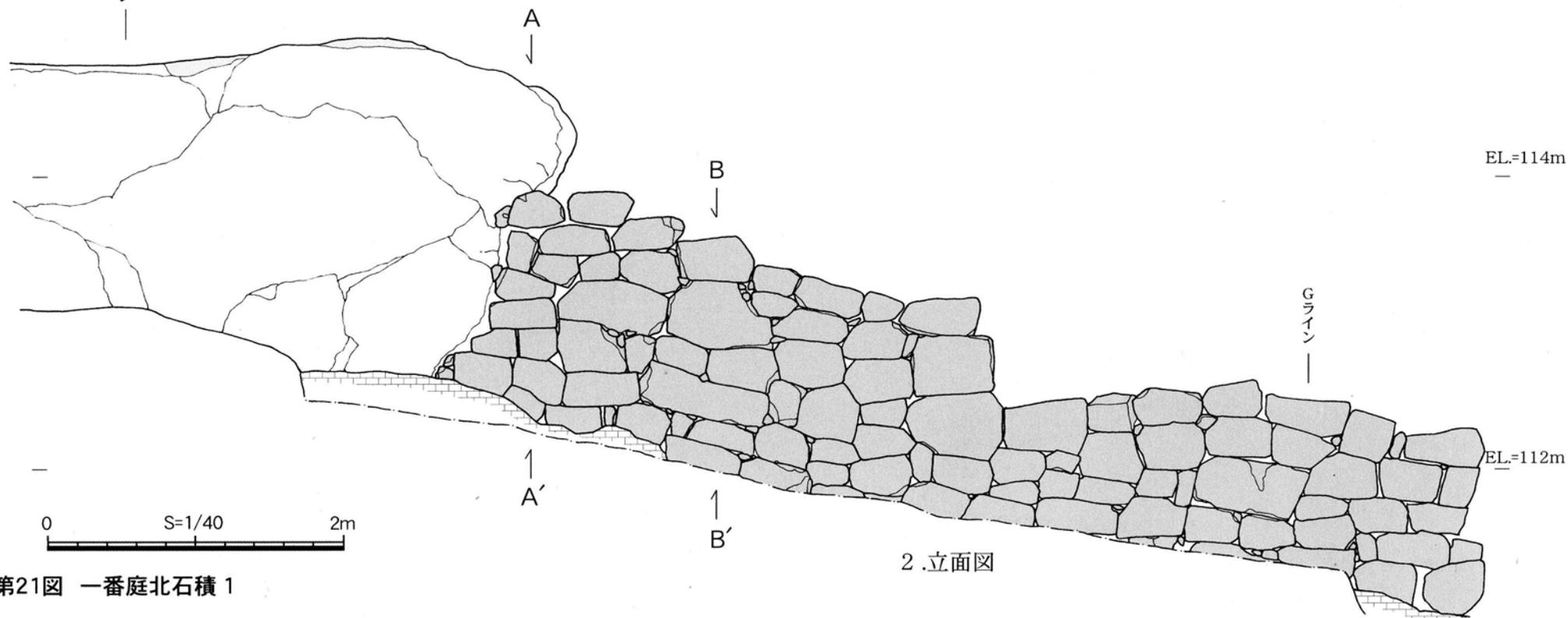
2 .北側段状石積断面図(I-I')

3 .北石積外面断面図(J-J')



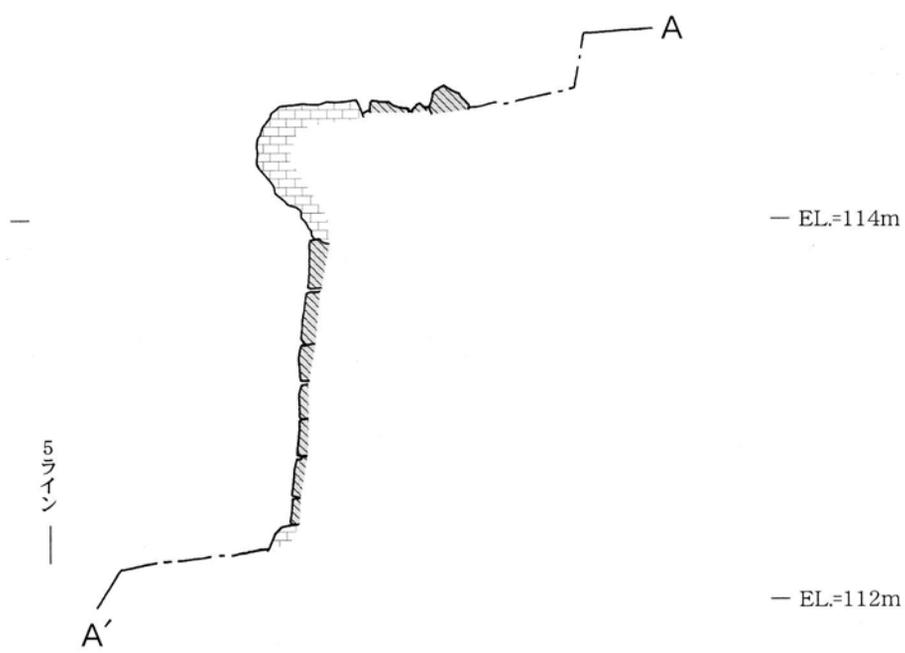


1. 平面図

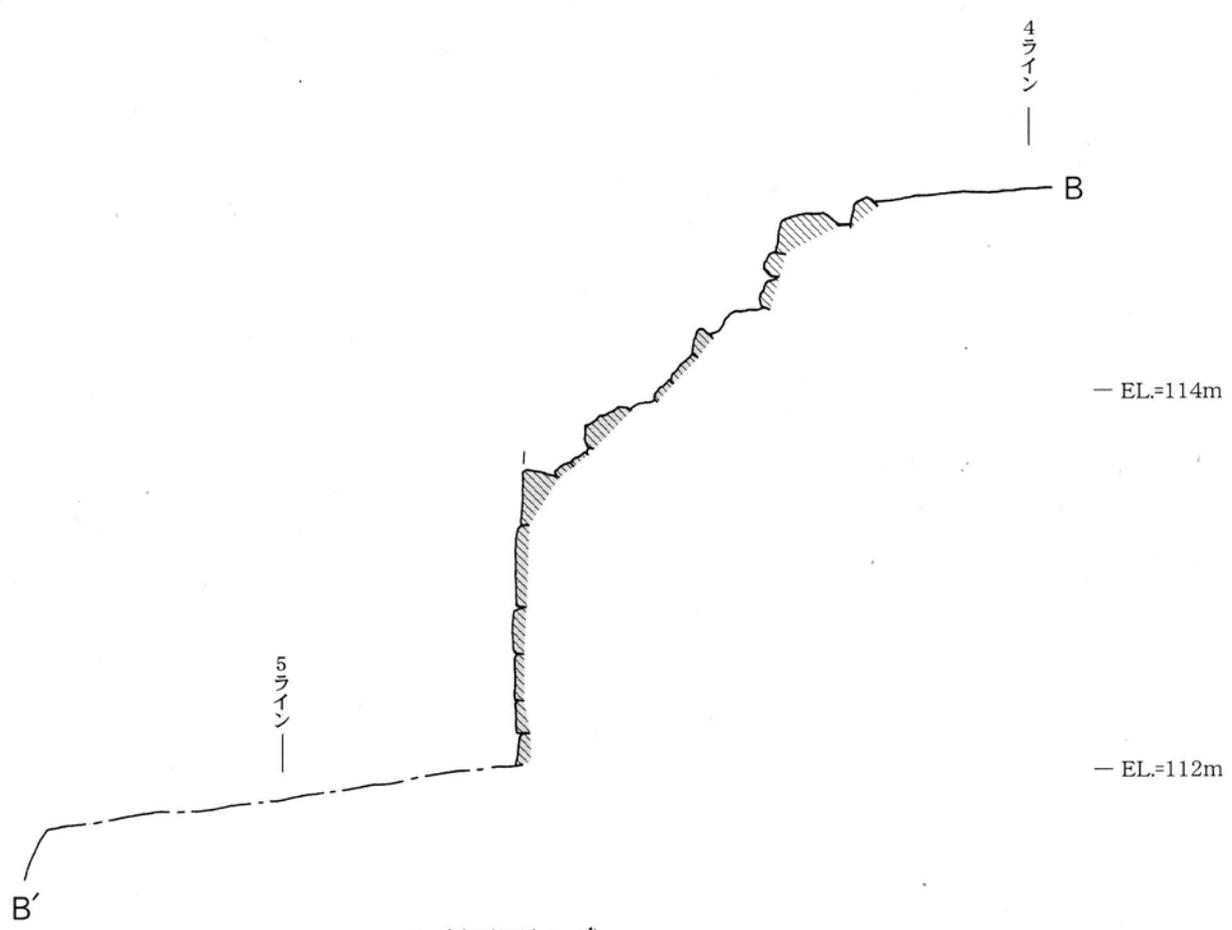


2. 立面図

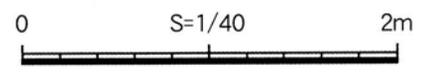
第21図 一番庭北石積 1

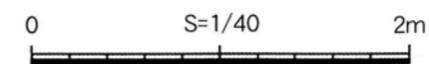
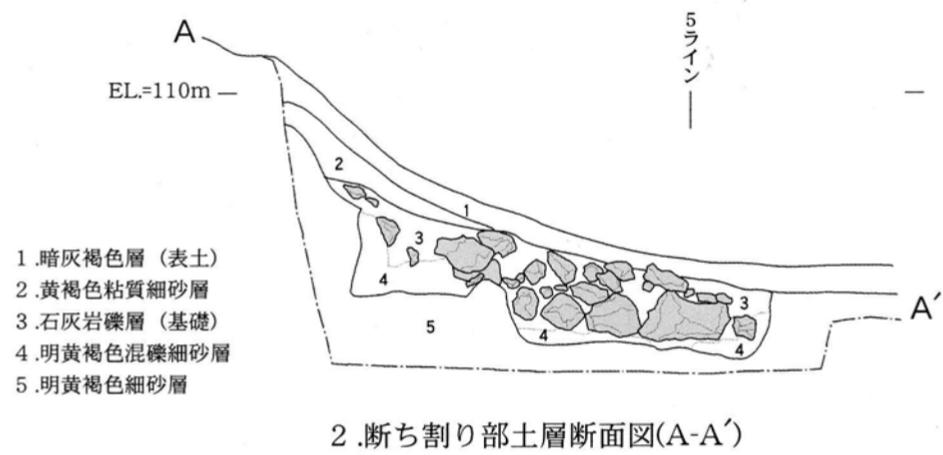
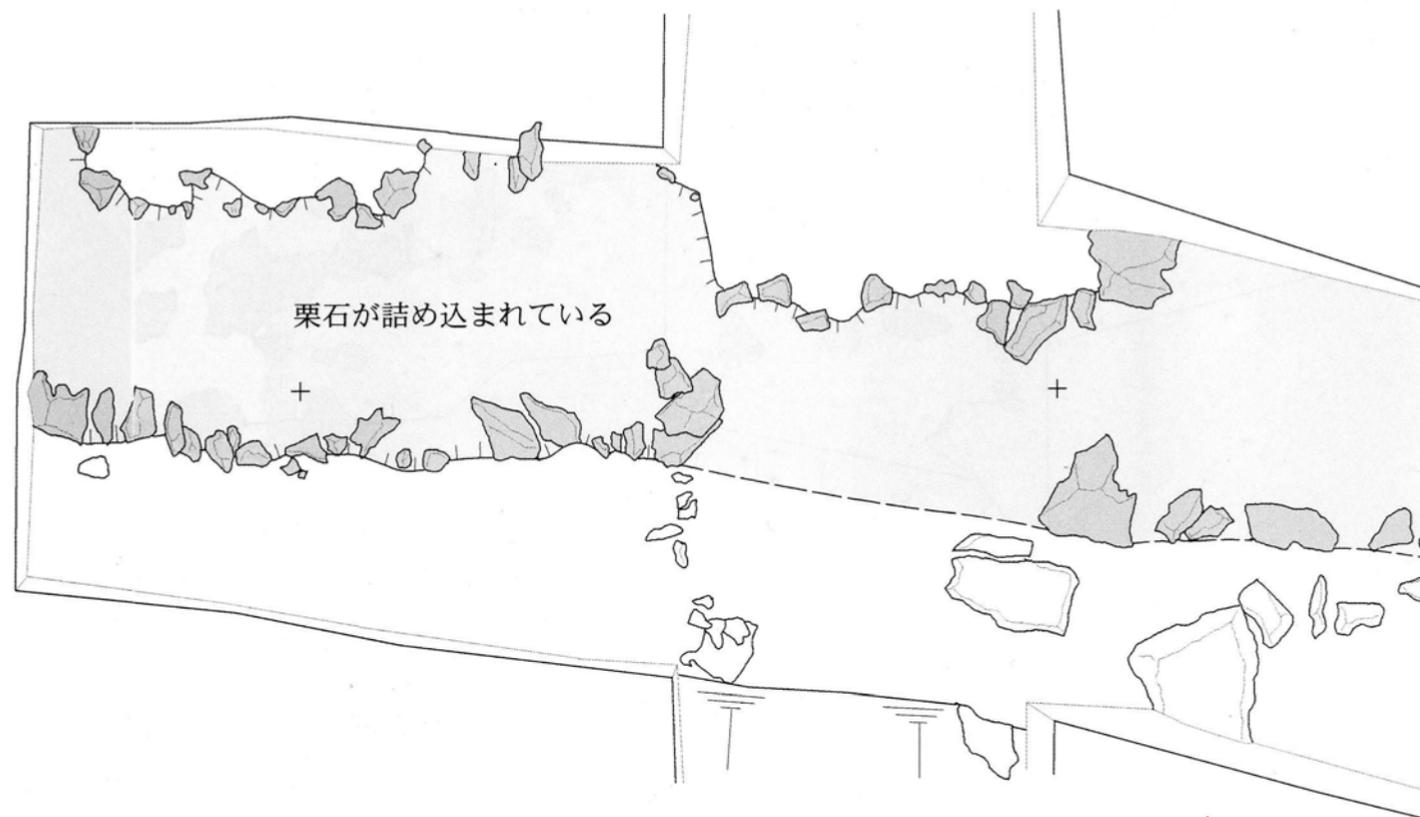
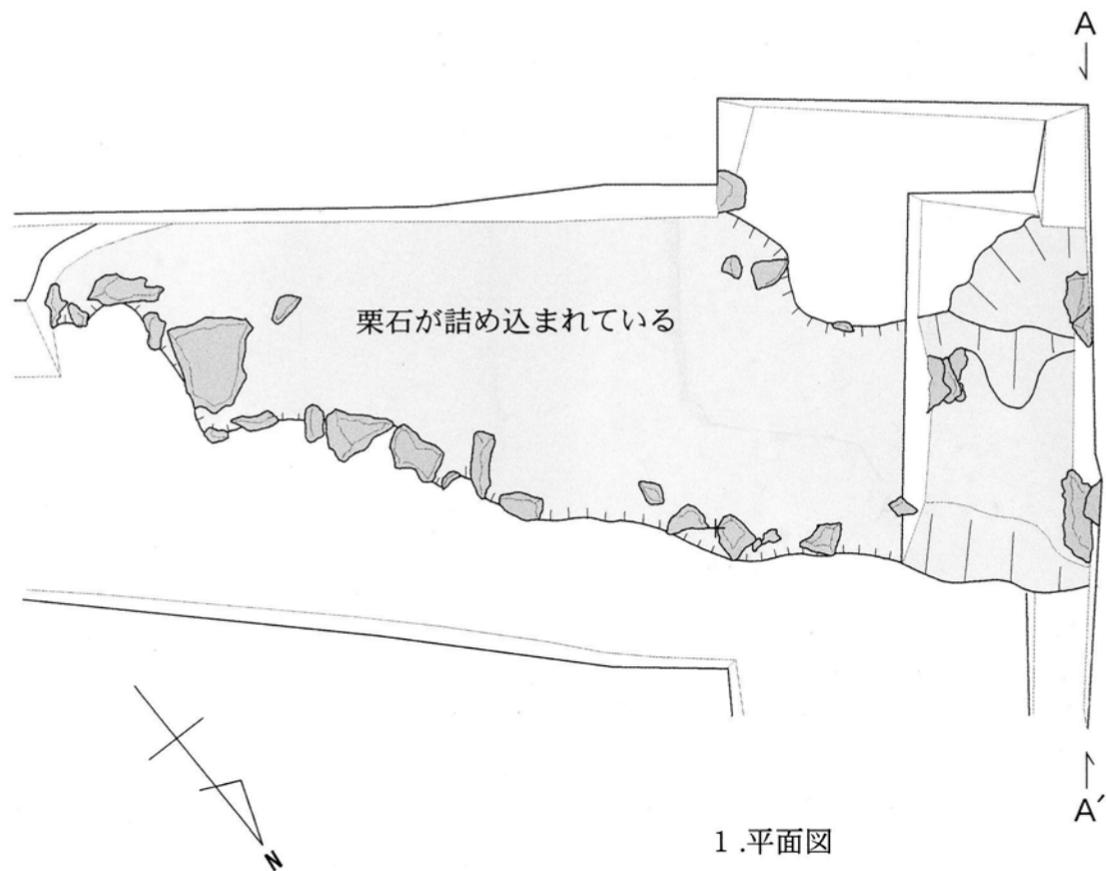


1.断面図 (A-A')



2.断面図(B-B')

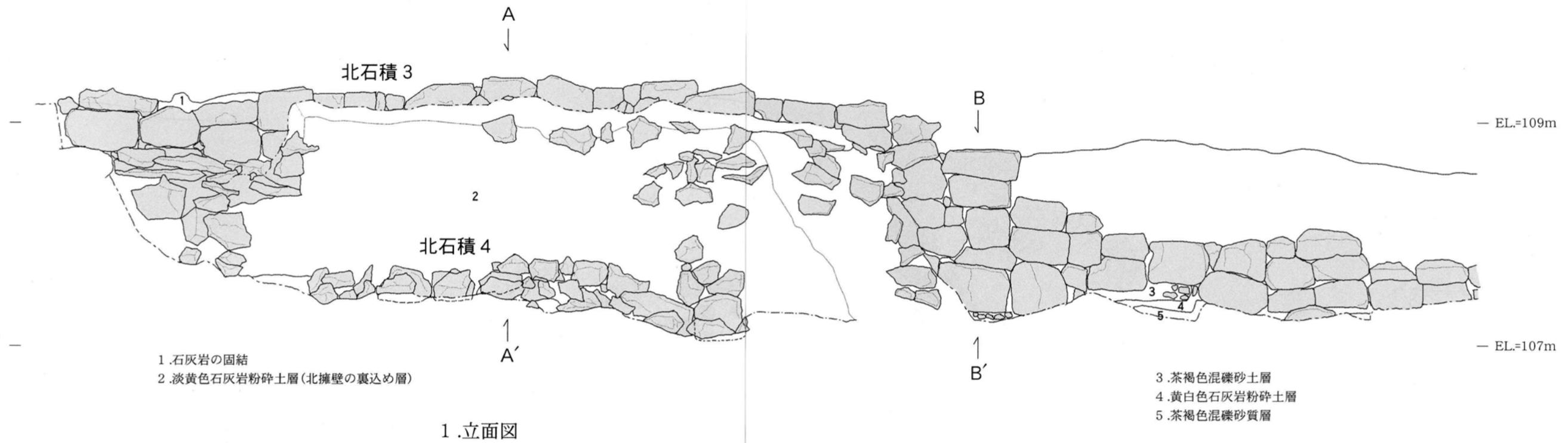




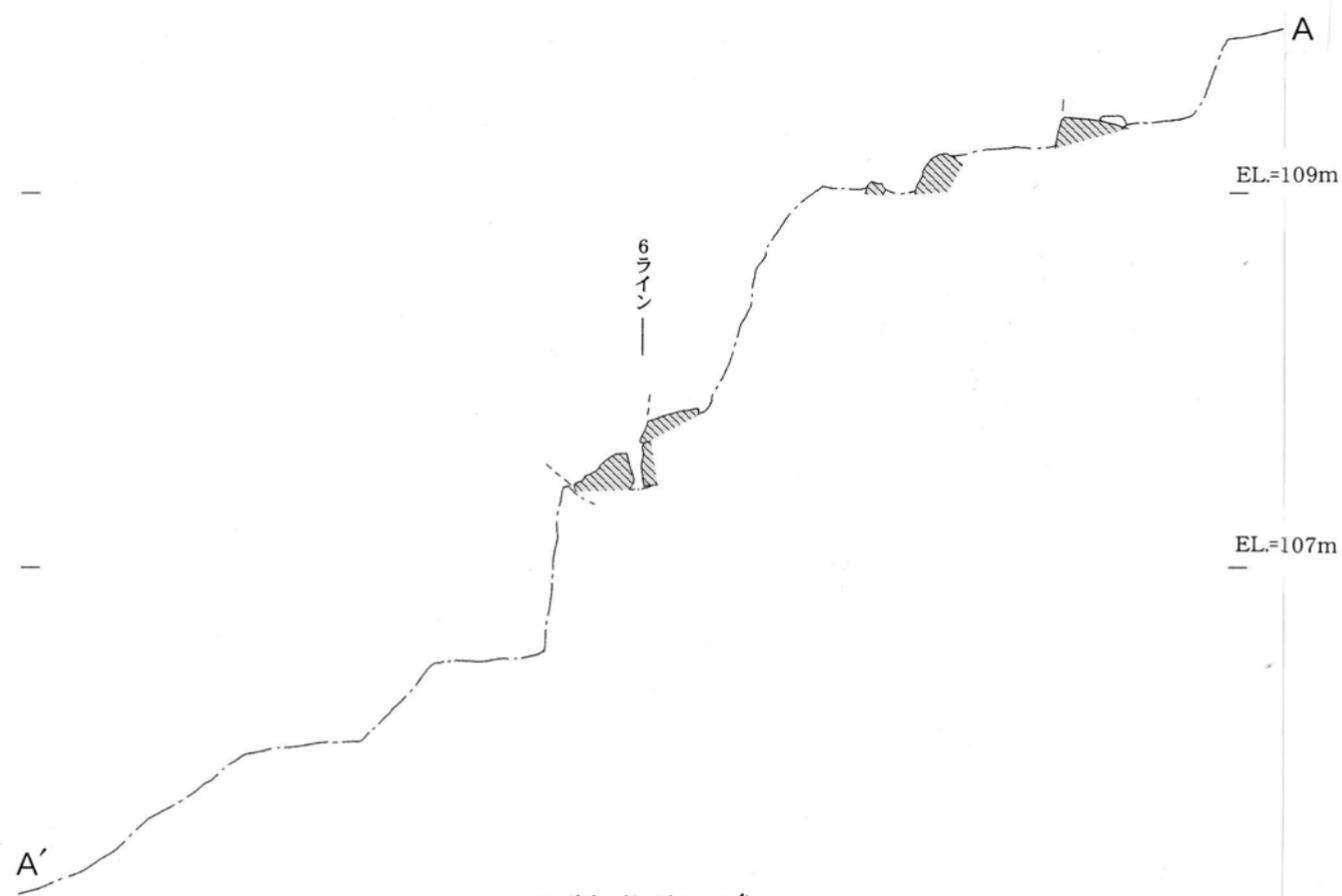
第23図 一番庭北石積2 (根拵え)



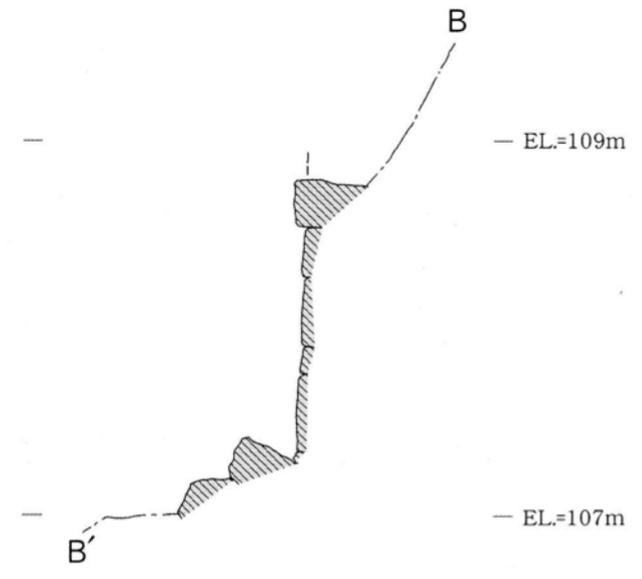
第24図 一番庭北石積 3 及び北擁壁平面図



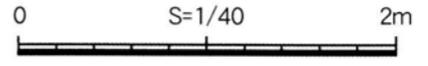
1. 立面図



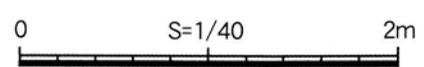
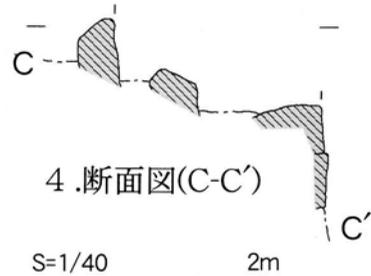
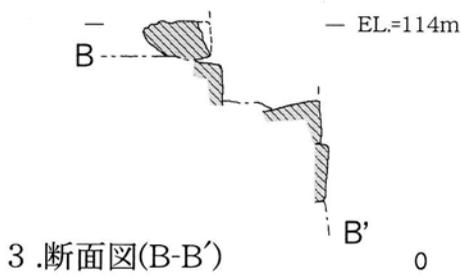
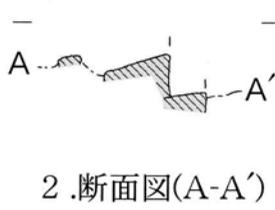
2. 断面図(A-A')



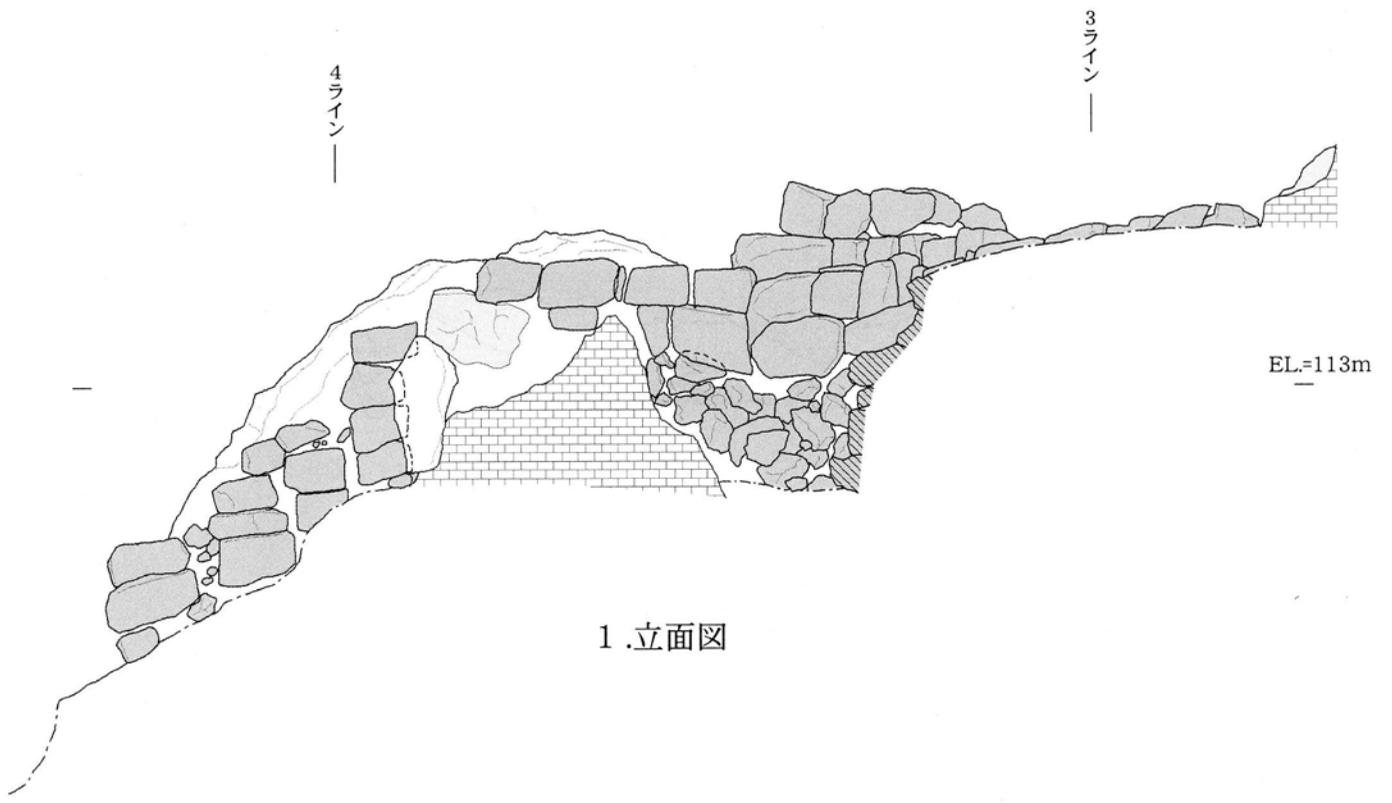
3. 断面図(B-B')



第25図 一番庭北石積3及び4



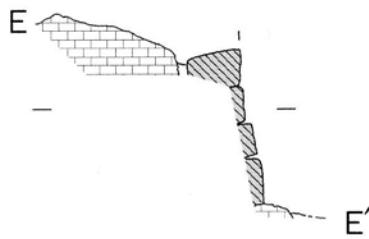
第26図 一番庭西擁壁



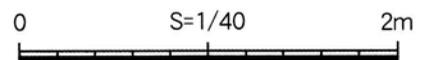
1. 立面図



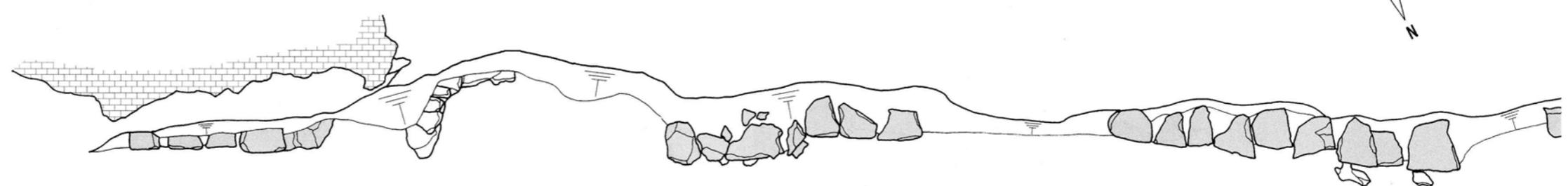
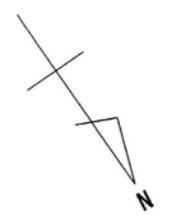
2. 断面図(D-D')



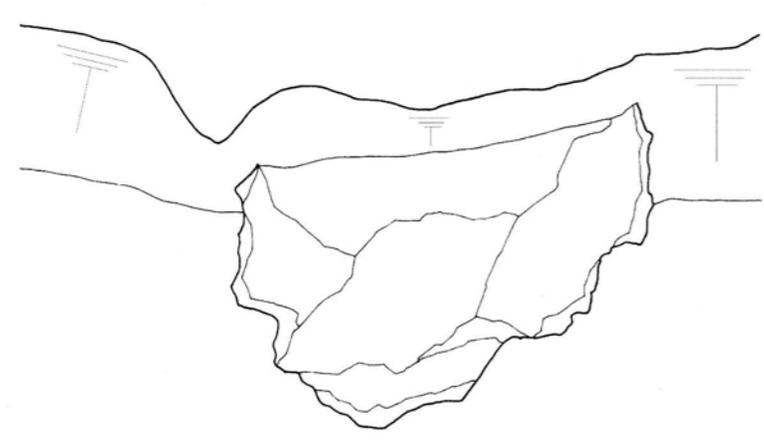
3. 断面図(E-E')



第27図 一番庭西擁壁



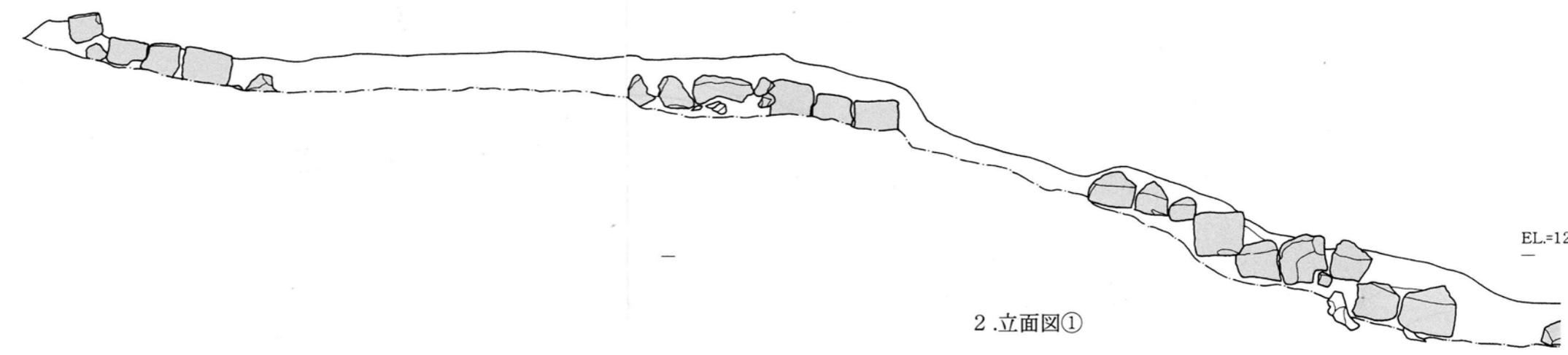
1. 平面図①



南石積

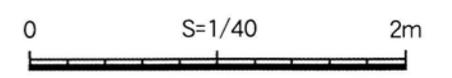
EL.=127m —

EL.=127m —

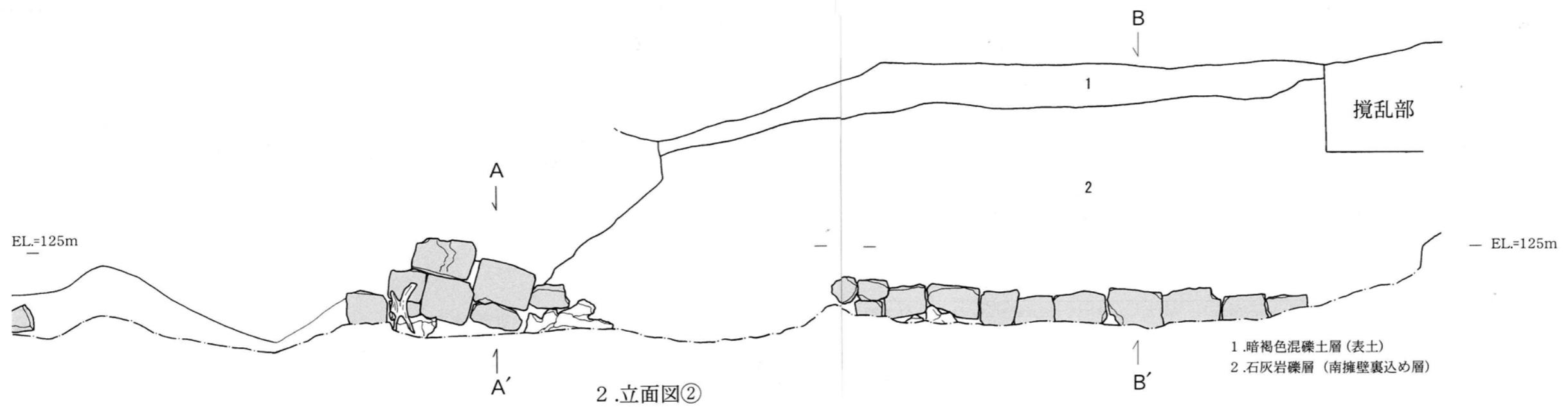
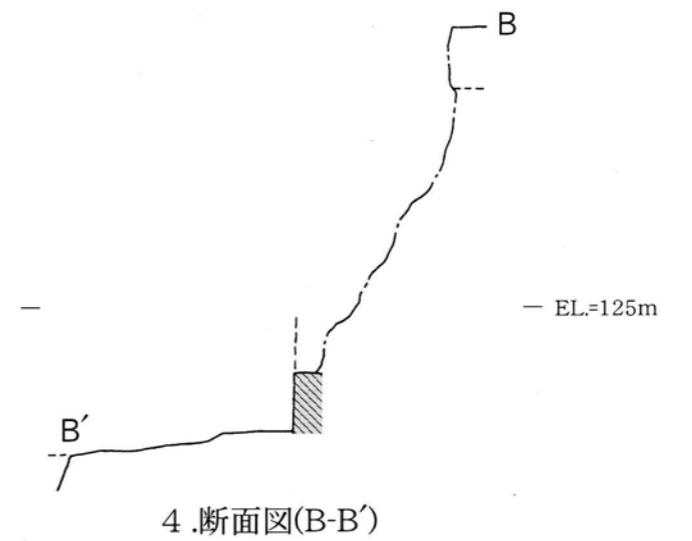
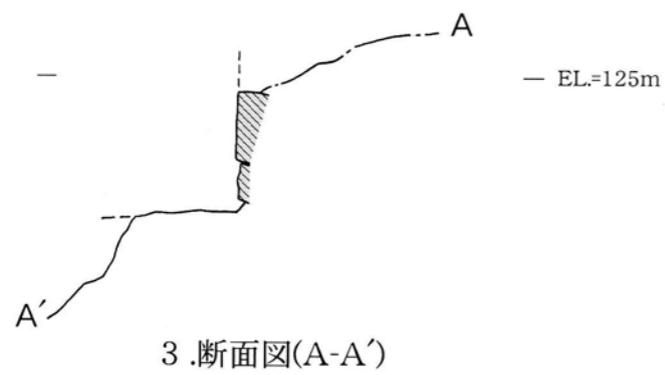
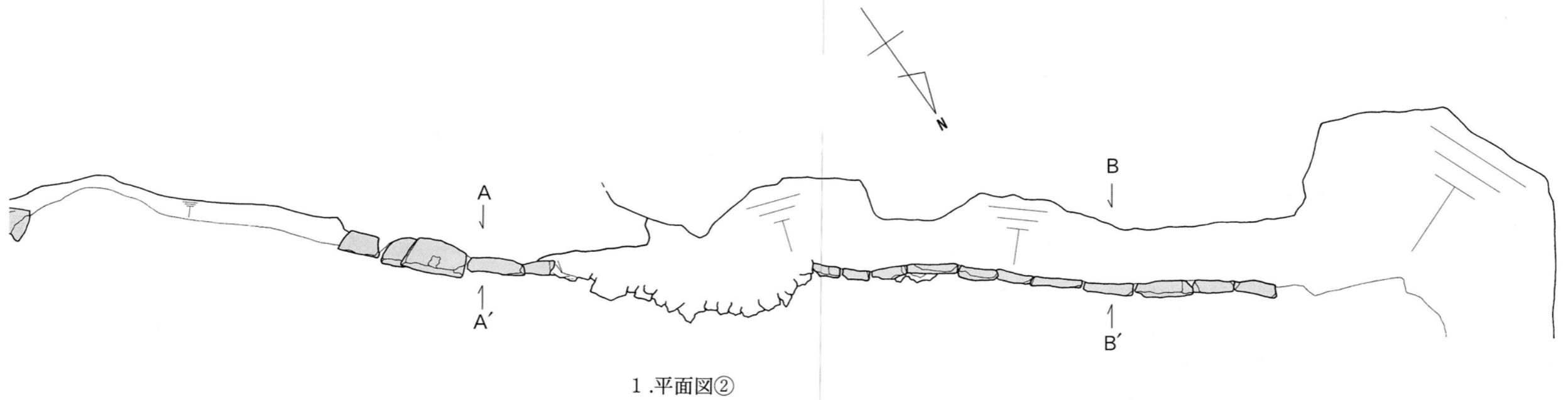


EL.=125m —

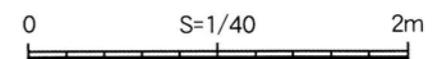
2. 立面図①



第28図 外周南擁壁 (図面 1)



- 1. 暗褐色泥礫土層 (表土)
- 2. 石灰岩礫層 (南擁壁裏込め層)



第29図 外周南擁壁 (図面 2)

2. 二番庭

一番庭の手前（西側）に位置する平面方形の空間で、一番庭とは石積みで区画されていた。かつては石段を上り、な一か御門と呼ばれるアーチ門をくぐって一番庭へ行き来した。

二番庭も一番庭と同様、地形ごと大きく改変しているが、北石積、西石積、南石積、階段が比較的良く残っていた。

北石積は一番庭北石積3から連続する石積みで、基礎部分が出土した。

西石積は南北方向に2列平行して出土しており、北石積とはほぼ直角の関係にある。2列のうち内側（東側）の石積を西石積A、外側（西側）を西石積Bと仮称した。

二番庭では石積遺構のほかに、二番庭造成土の下層から瓦溜まりと金属工房跡が出土した。つまり、二番庭造成以前の浦添ようどれには瓦溜まりと金属工房跡が存在したが、これを埋めて二番庭を造成していることが判明した。また、前記北石積の一部は金属工房に由来する炭層や混炭の砂質土層に埋まっていたことから、北石積は金属工房以前にはすでに構築されていたことも明らかとなった。

出土した石積遺構について表-3・4にまとめたが、二番庭階段については記述項目の都合上、別表にした（表-5）。

表-3 遺構観察表（二番庭）

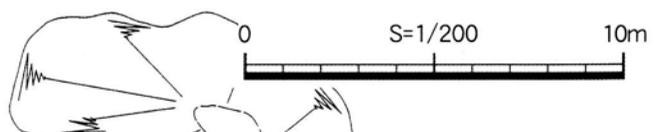
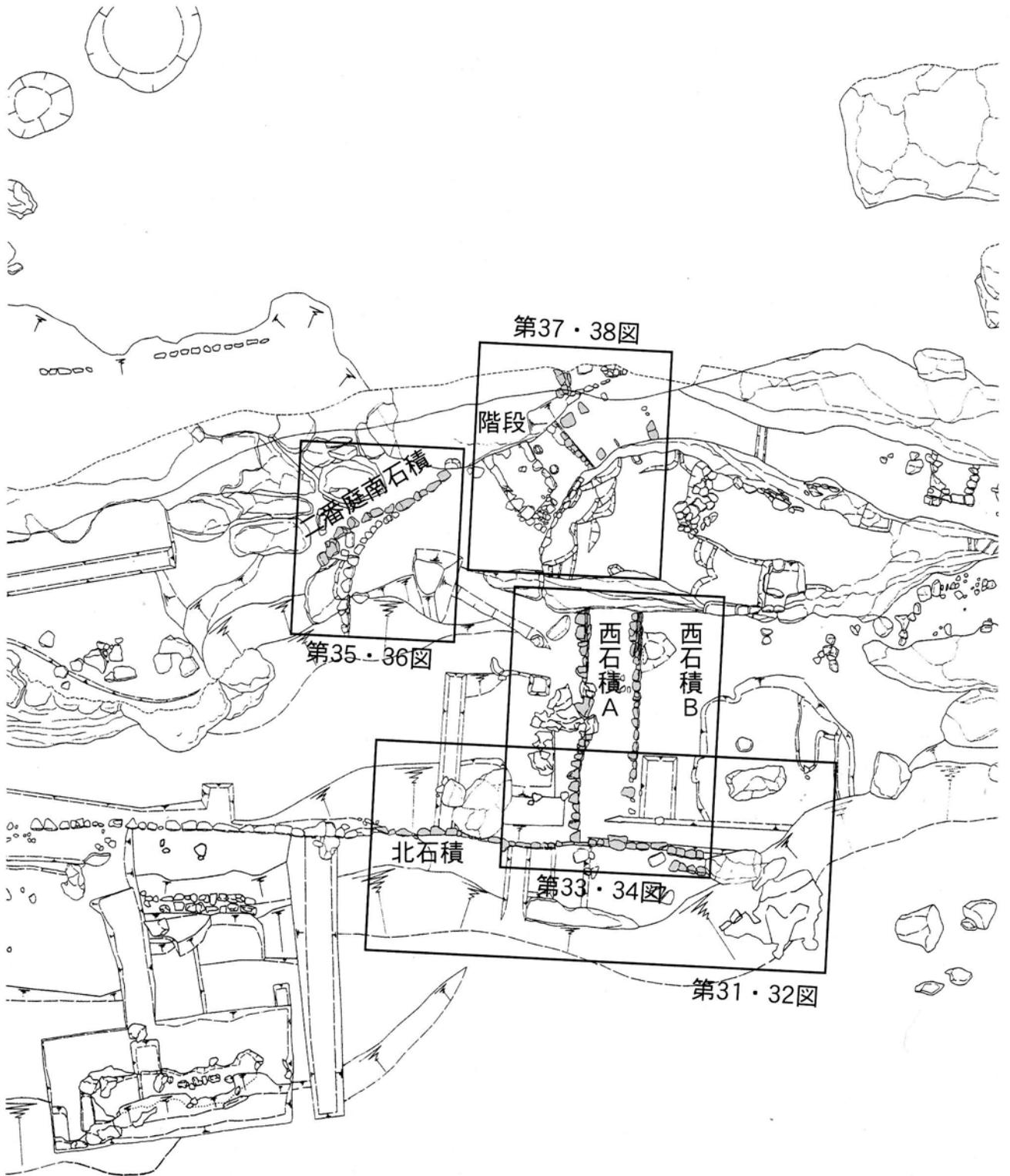
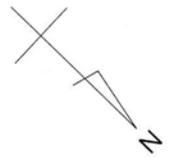
遺構名称	挿図番号 写真番号	技法	構造 (擁壁) (石牆) (その他)	①残存長 ②厚さ(幅) ③残存高(最大) ④勾配 ⑤軸方向	石のサイズ ①たて ②よこ ③控え	特徴・残存状況等 (性格・形状・工法・根控え・裏込め等)
						他遺構との関係・その他
二番庭北石積	平面図 第31図	切石積み (布積み)	擁壁 + 石牆	①11.0m ②- ③90cm ④82° ⑤N38° W	①10cm~32cm (平均 20cm) ②22cm~60cm (平均 38cm) ③18cm~39cm (平均 27cm)	東側から延びてくる一番庭北石積3に連続する。本来は土中に埋まっている部分が出土。西端部については二番庭の範囲からはみ出しているが、一連の石積みであるためここに含めた。 石積みは基本的に長方形の切石を横位に積み上げる方法で、2~4段確認できる。巨岩を面加工し石積みに合わせた箇所もある。この巨岩から西側は二番庭からはみ出した部分で、南北両側に別の切石の並びがあるが、性格等は不明。 裏込めは20cm前後の礫。最下部が確認できた箇所では、小礫混じりの砂質土上に積み上げている。
	立面図 第32図1・2 断面図 第32図3・4 図版14-上・中 巻頭カラー					二番庭西石積A・Bと直角の位置関係で、前者の北端の切石は本石積みの上に重なっている。 また本石積みは、鍛冶関連遺物を多く包含する炭層または混炭砂質土に埋まっていた(巻頭写真参照)。こうした堆積層は隣接する金属工房からの廃棄と考えられることから、北石積は金属工房と同時期に構築されたか、もしくはそれ以前から存在したことが推察された。 なお、同層からは鉄滓や銅粒、ふいごの羽口、取瓶(増場)などが金属工房跡の中心部よりも多量に出土している。
二番庭西石積A	平面図 第33図	切石積み (布積み)	擁壁	①7.8m ②- ③1.4m ④80° ⑤N50° E	①12cm~30cm (平均 21cm) ②20cm~55cm (平均 37cm) ③21cm~43cm (平均 31cm)	南北方向の石積みで、南端は岩盤にすり付けている。北側は、二番庭北石積上で途切れている。南側(岩盤側)ほど残り具合は良い(最高6段残存)。石積みは主に長方形の切石を横位に積み上げる手法。下端部が確認できた箇所では削平した岩盤に切石をのせている。裏込めは黄褐色の混小礫土が主体だが10cm前後の石灰岩礫も混在している。
	立面図 第34図1 断面図 第34図3 図版14-上・下 図版15-上					二番北石積と直角、西石積Bと平行の位置関係。

表-4 遺構観察表 (二番庭)

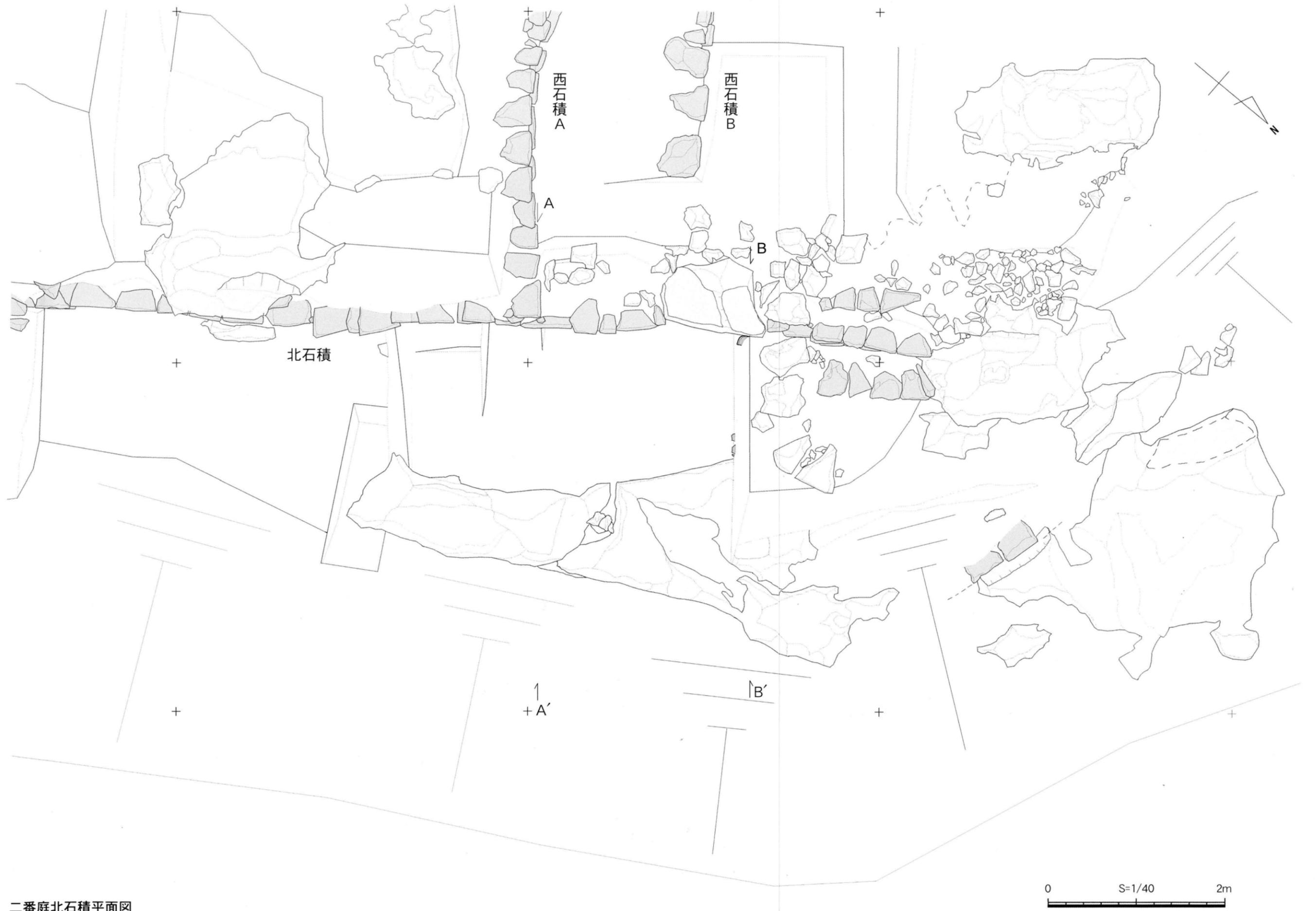
遺構名称	挿図番号 写真番号	技法	構造 (擁壁) (石牆)	①残存長 ②厚さ(幅) ③残存高(最大) ④勾配 ⑤軸方向	石のサイズ ①たて ②よこ ③控え	特徴・残存状況等 (性格・形状・工法・根拵え・裏込め等)
						他遺構との関係・その他
二番庭西石積B	平面図 第33図 立面図 第34図2 断面図 第34図3 図版14-上・下 図版15-上・中 巻頭カラー	切石積み (布積み)	擁壁 + 石牆	①6.4m ②1.7m ③1.2m ④81° ⑤N50° E	①12cm~31cm (平均 22cm) ②19cm~45cm (平均 32cm) ③16cm~36cm (平均 25cm)	二番庭西石積Aと同様、南北方向の石積みで、南端は岩盤にすり付けている。本石積みも南側(岩盤側)ほど残存状況が良い(最高6段)。北側は北石積の手前で途切れている。石積みは基本的に長方形の切石を使用しているが、西石積Aに比べ正方形に近いものも目立つ。北端部の石は他に比べ粗加工。最下端は茶褐色砂質土(造成土)を浅く掘り込んで切石を据えている。裏込めは西石積Aとの間に詰められ、10~20cmの石灰岩礫が使用されている。 西側で出土した金属工房跡の土坑を埋立てて、本石積みを構築している。埋土部分の沈下によって、その上位にあたる石積みは目地が傾いている。 二番庭西石積Aと1.7mの間隔で平行し、勾配もほぼ同じ。
	平面図 第35図1 第37図 立面図 第36図1 第38図1 断面図 第35図2・3・4 第36図2 第38図2 図版15-下 図版16-上	切石積み (布積み)	擁壁	①10.9m(根石 基礎の岩盤含む) ②- ③1.7m ④ほぼ垂直 ⑤N72° W	①16cm~36cm (平均 25cm) ②10cm~52cm (平均 34cm) ③20cm~46cm (平均 31cm)	石積みは暗しん御門の出口(二番庭登段の一段目)から二番庭へ向かい、一番庭西擁壁方向に延びる。暗しん御門出口付近は曲線的な石積みで、端部は岩盤にすり付けている。最高7段まで確認でき、本石積みの中では最も残りが良いが、3段目以上は積石のずれや傾きが見られる。崩壊部で裏込めをみると10~20cmの礫が確認できる。 二番庭階段の二段目から二番庭への約4.8mは、高さ80~90cmの岩盤だが、上面の加工状況からこれを基礎として石積みが行われていたことがわかる。 同岩盤から東側へは石積みが直線的に1~2段残る(約4.4m)。 一番庭西石擁壁の上位に積み上げられた箇所が確認できる。同地点で両石積みが分岐し、本石積みは東方向へ、一番庭西石擁壁は曲線を描きながら北東方向へ延びている。

表-5 遺構観察表 (二番庭階段)

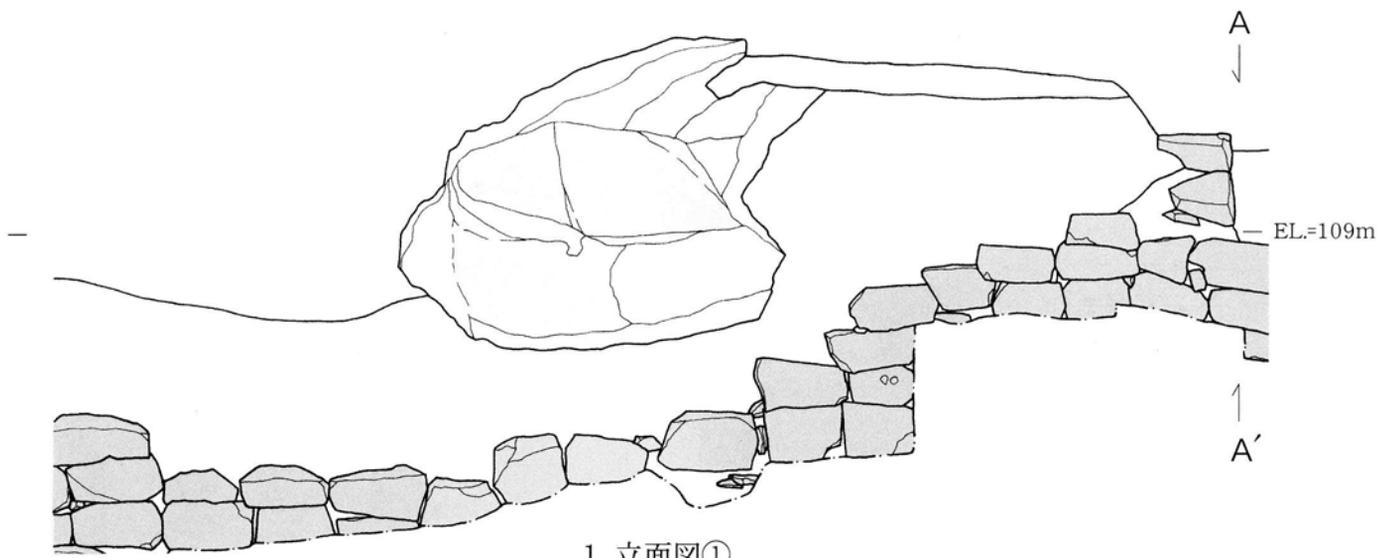
遺構名称	挿図番号 写真番号	①幅 ②高さ(最大) ③次段までの長さ	軸方向	石のサイズ ①高さ ②よこ	構造・形状・工法・機能・残存状況等
					他遺構との関係・その他
二番庭階段	平面図 第37図 立面図 第38図3・4・5 図版16-上	一段目 ①3.1m ②30cm ③1.3~1.8m 二段目 ①2.3m ②31cm ③1.1~1.2m 三段目 ①2.1m ②12cm ③-	一段目 N7° E 二段目 N5° E 三段目 N16° E	一段目 ①- ②10cm~52cm (平均 30cm) 二段目 ①24cm~26cm (平均 25cm) ②20cm~50cm (平均 33cm) 三段目 ①- ②14cm~30cm (平均 23cm)	暗しん御門出口から二番庭に至る登り階段。3段からなる。いずれも長方形の切石を並べて段を造りだしているが、去る沖繩戦中の攪乱で一段目と二段目は中央部分が欠落している。 三段目の切石は一・二段目に比べ小型。 未攪乱の部分を見ると、次の段までの間は、黄褐色の石灰岩粉砕土による仕上げで、緩やかな斜面になっている。固く締まりがある。 二番庭入口に構築されている戦中石積1と三段目の間を発掘した際、三段目の縁石を裏側(二番庭側)から観察したところ、切石を積み上げていることが判明した。3段まで確認。 二段目の南端は二番庭南石積み(曲面石積み)に、三段目の北端は暗しん御門北石積みにすり付けている。 一段目の南端部約1m(切石4個分)の上位には、戦中石積2が構築されていた。



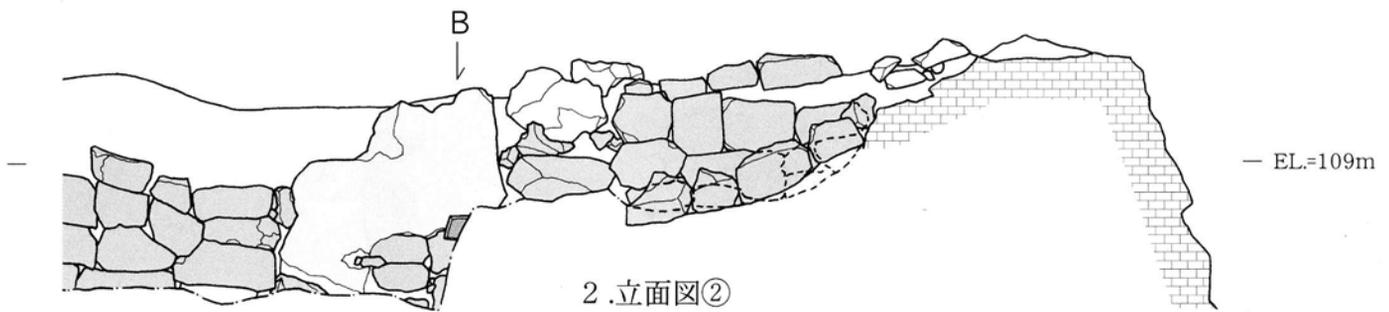
第30図 二番庭遺構位置図



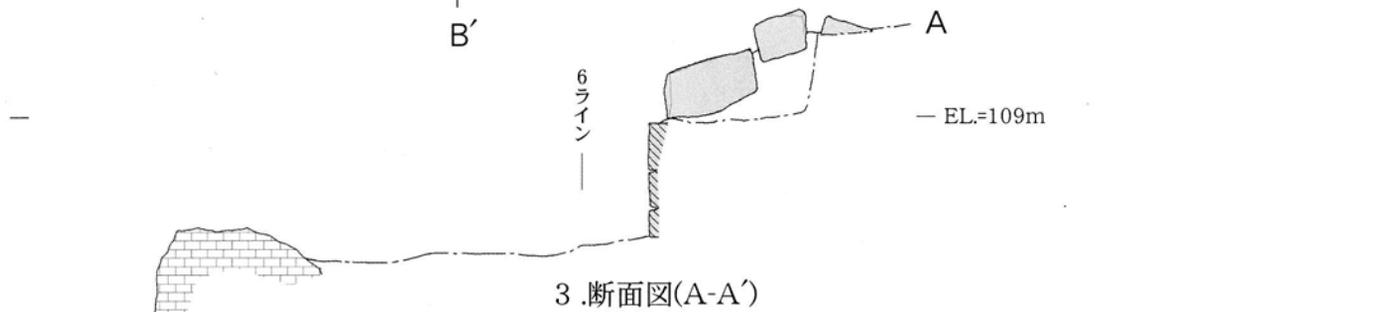
第31図 二番庭北石積平面図



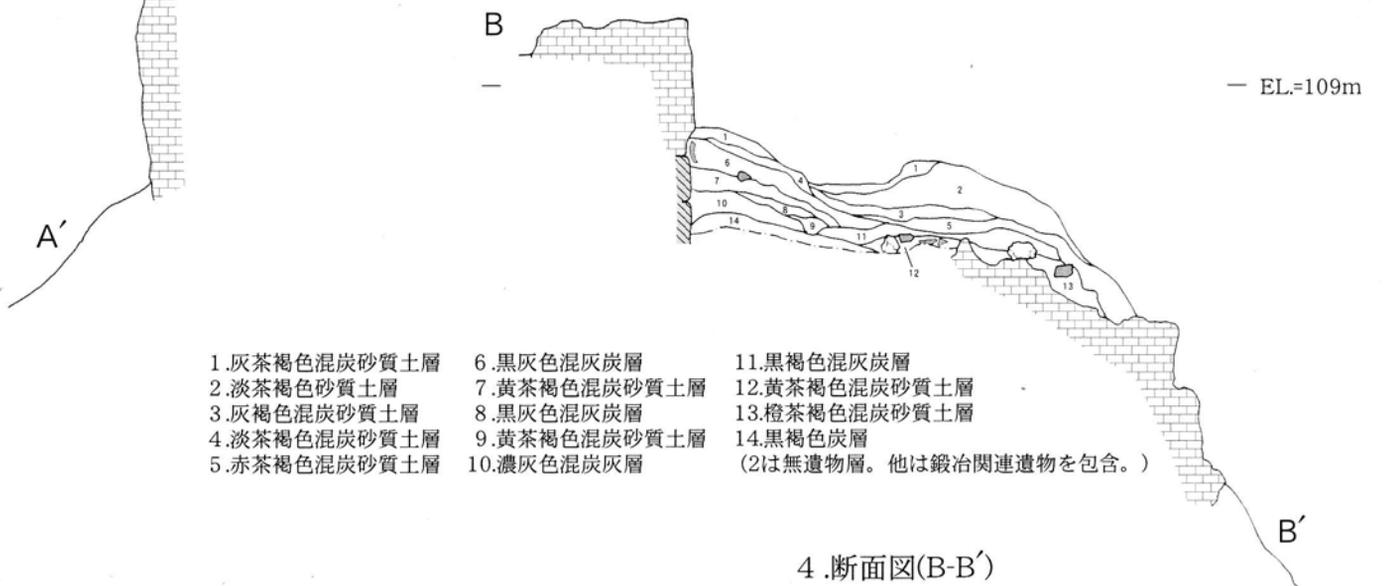
1. 立面図①



2. 立面図②



3. 断面図(A-A')



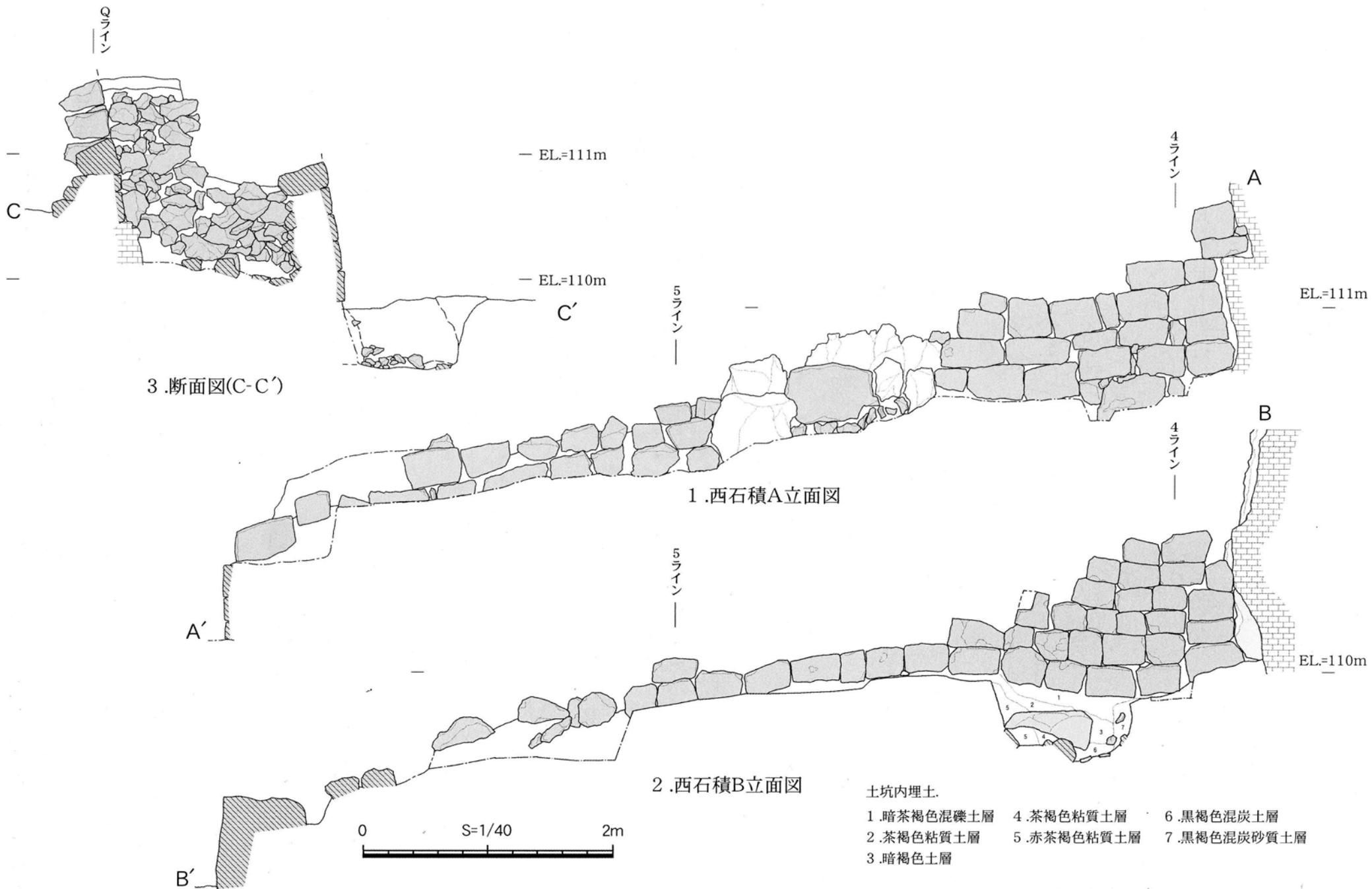
4. 断面図(B-B')

- | | | |
|---------------|---------------|-----------------------|
| 1. 灰茶褐色混炭砂質土層 | 6. 黒灰色混灰炭層 | 11. 黒褐色混灰炭層 |
| 2. 淡茶褐色砂質土層 | 7. 黄茶褐色混炭砂質土層 | 12. 黄茶褐色混炭砂質土層 |
| 3. 灰褐色混炭砂質土層 | 8. 黒灰色混灰炭層 | 13. 橙茶褐色混炭砂質土層 |
| 4. 淡茶褐色混炭砂質土層 | 9. 黄茶褐色混炭砂質土層 | 14. 黒褐色炭層 |
| 5. 赤茶褐色混炭砂質土層 | 10. 濃灰色混炭灰層 | (2は無遺物層。他は鍛冶関連遺物を包含。) |

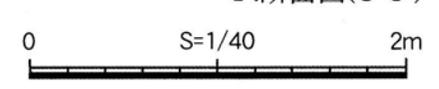
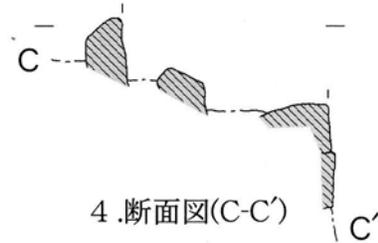
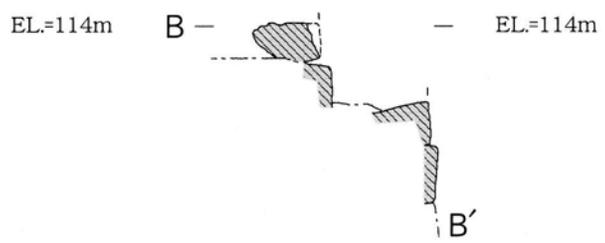
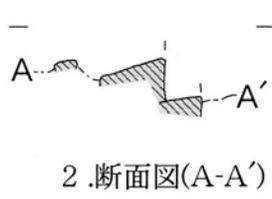
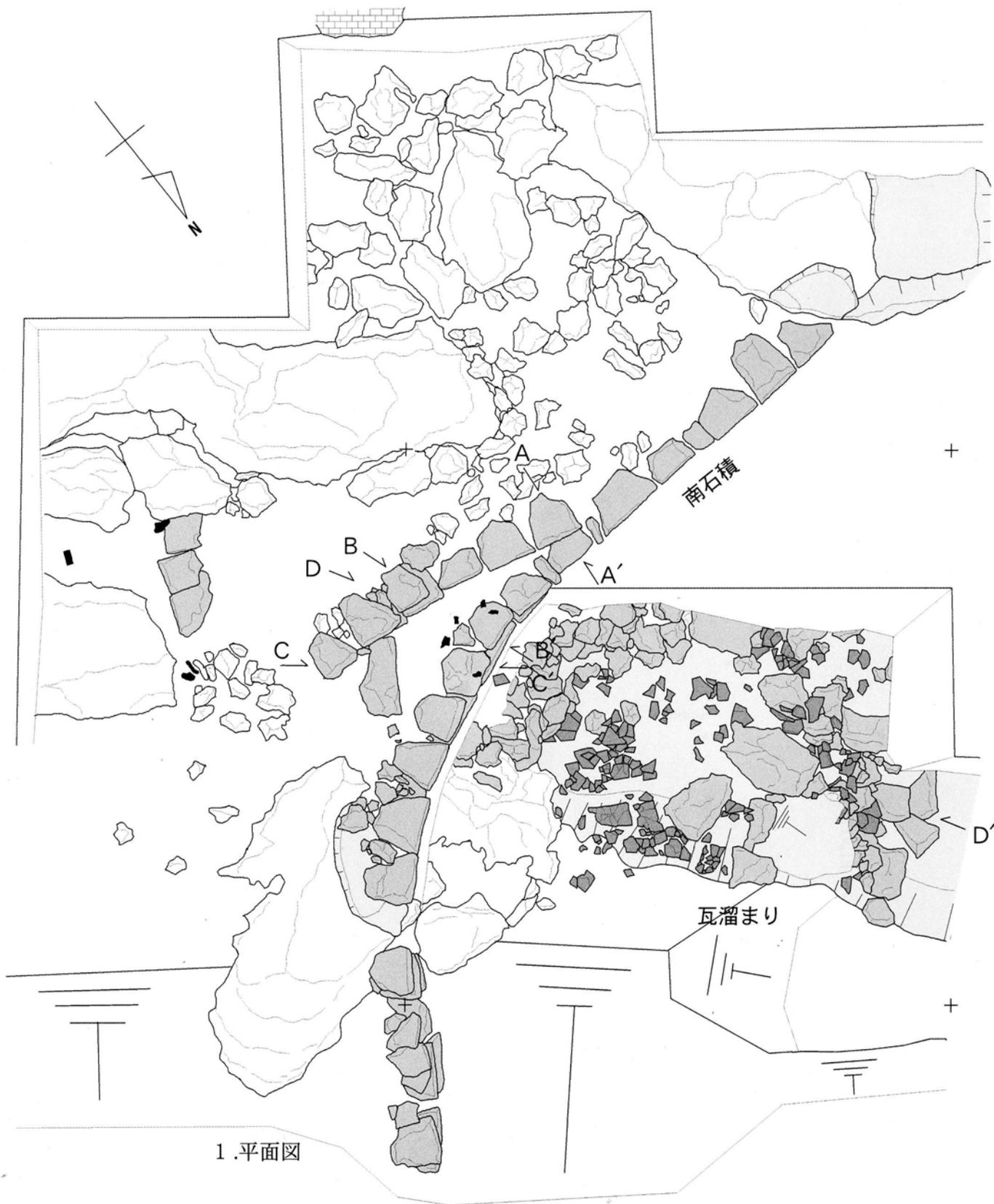
0 S=1/40 2m



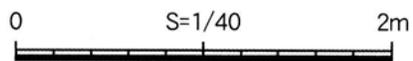
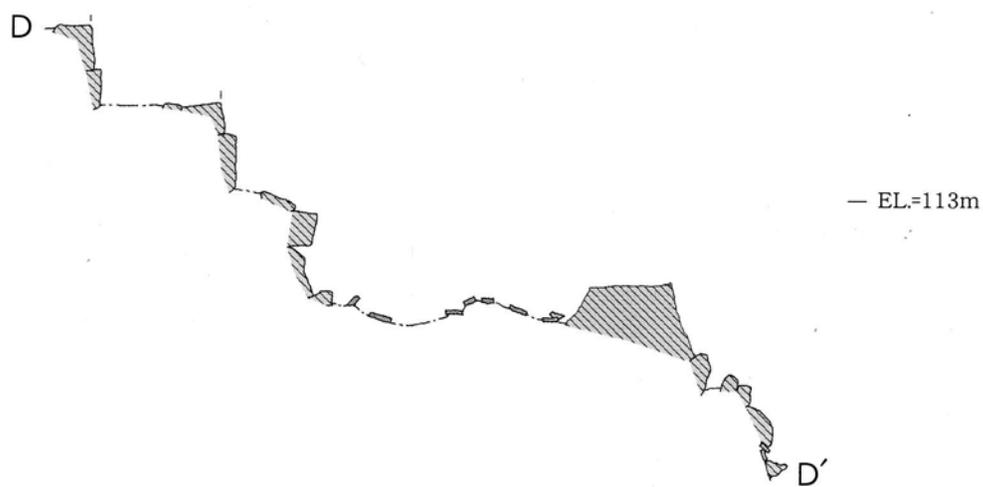
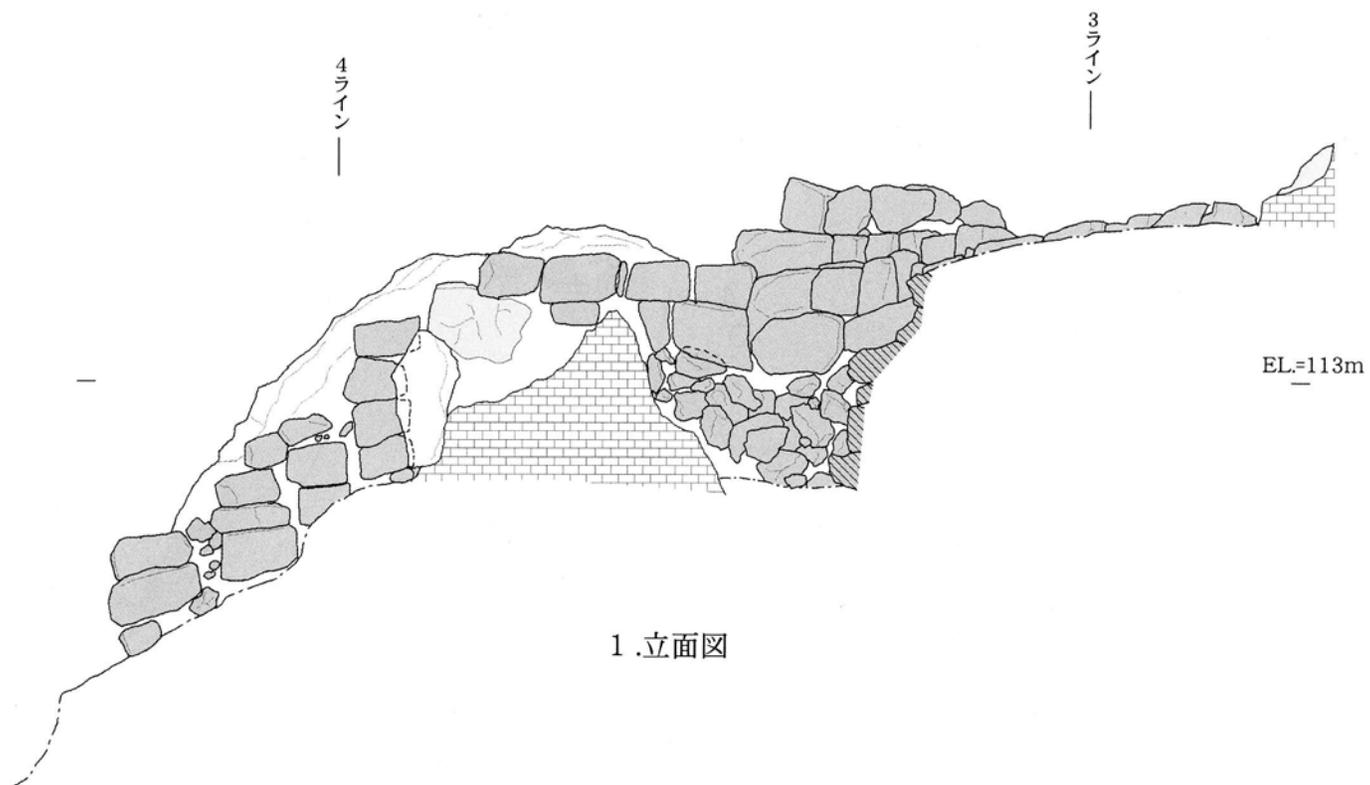
第33図 二番庭西石積A及びB平面図



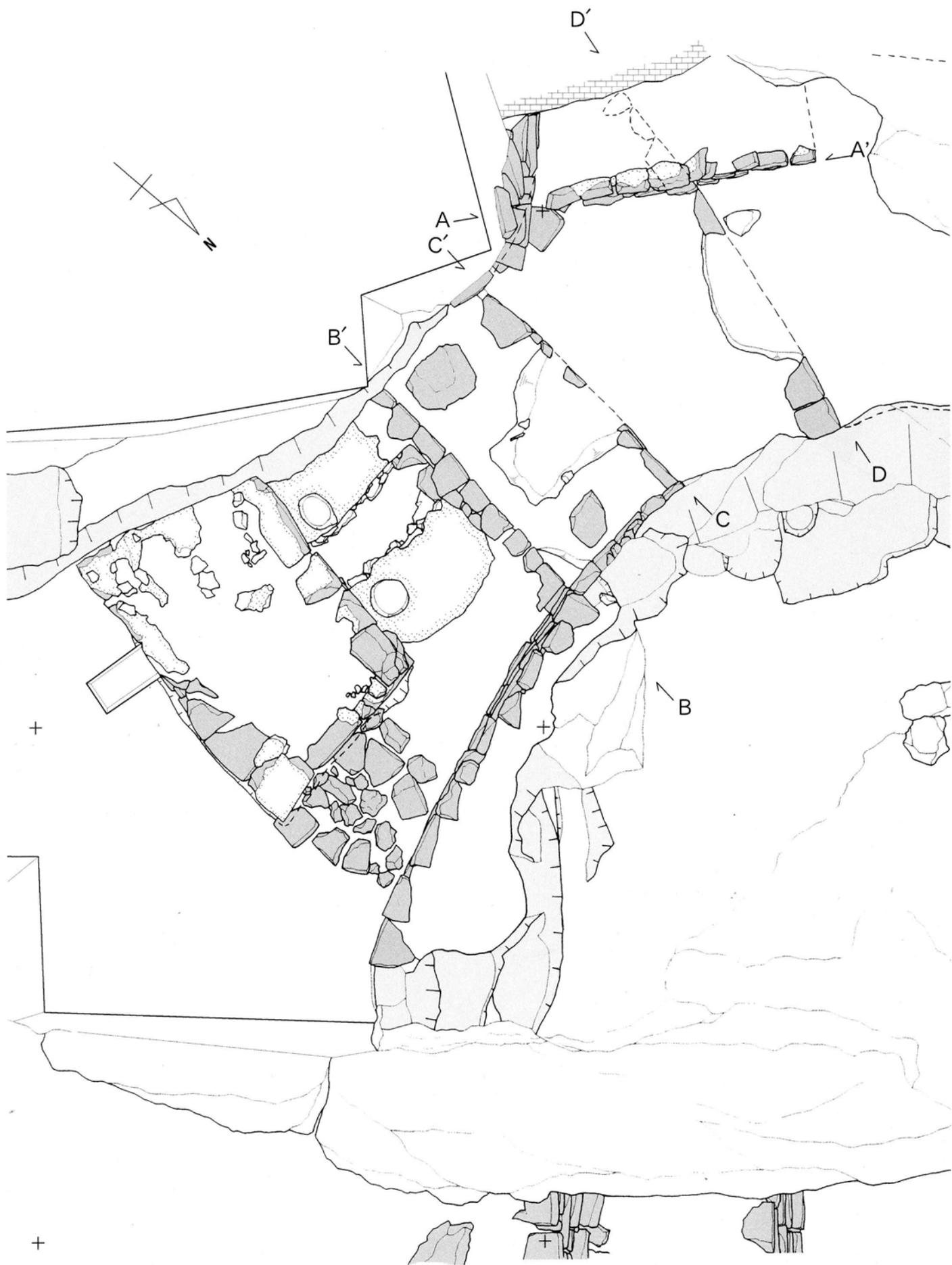
第34図 二番庭西石積



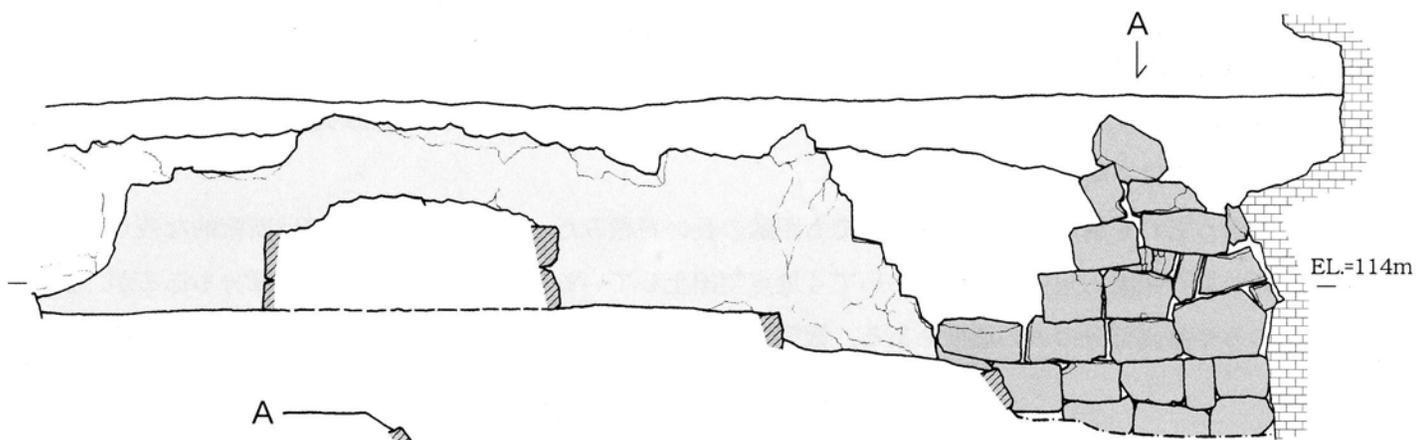
第35図 二番庭南石積 1



第36図 二番庭南石積 1

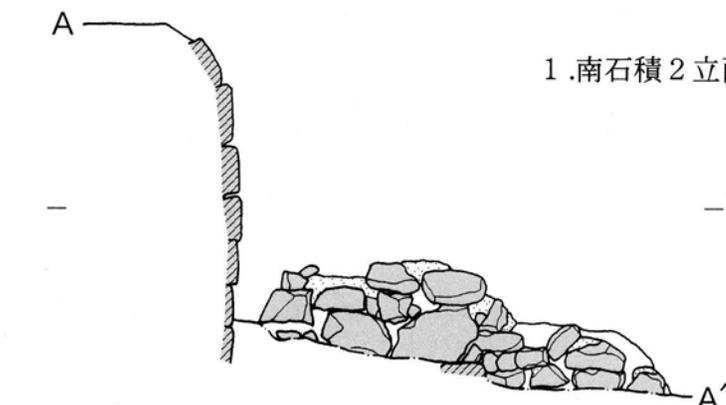


第37図 二番庭南石積2及び二番庭階段平面図



1.南石積 2 立面展開図

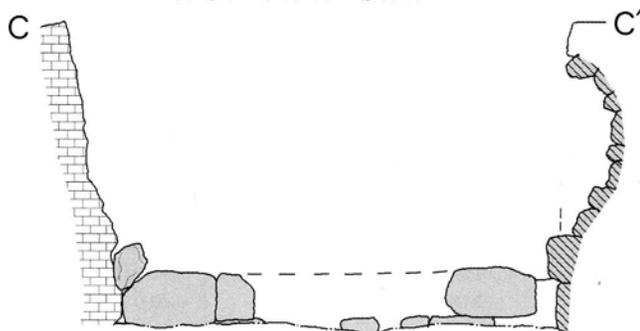
— EL.=114m



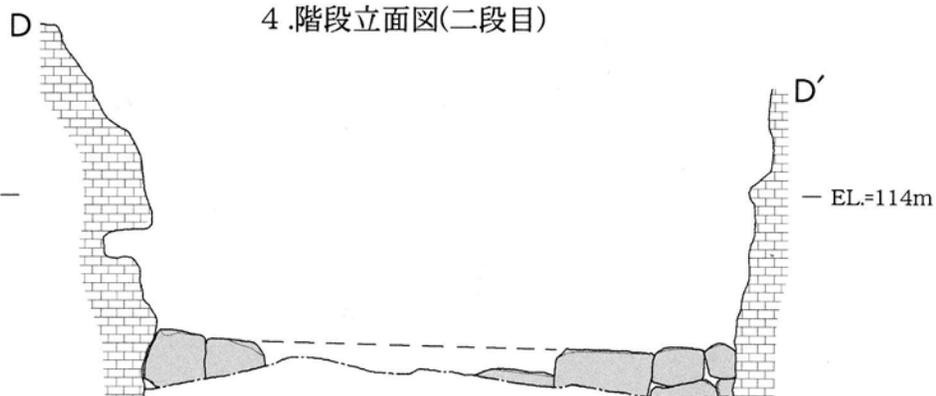
2.南石積 2 断面図(A-A')



3.階段立面図(三段目)



4.階段立面図(二段目)



5.階段立面図(一段目)

0 S=1/40 2m

第38図 二番庭南石積 2 及び二番庭階段立面図

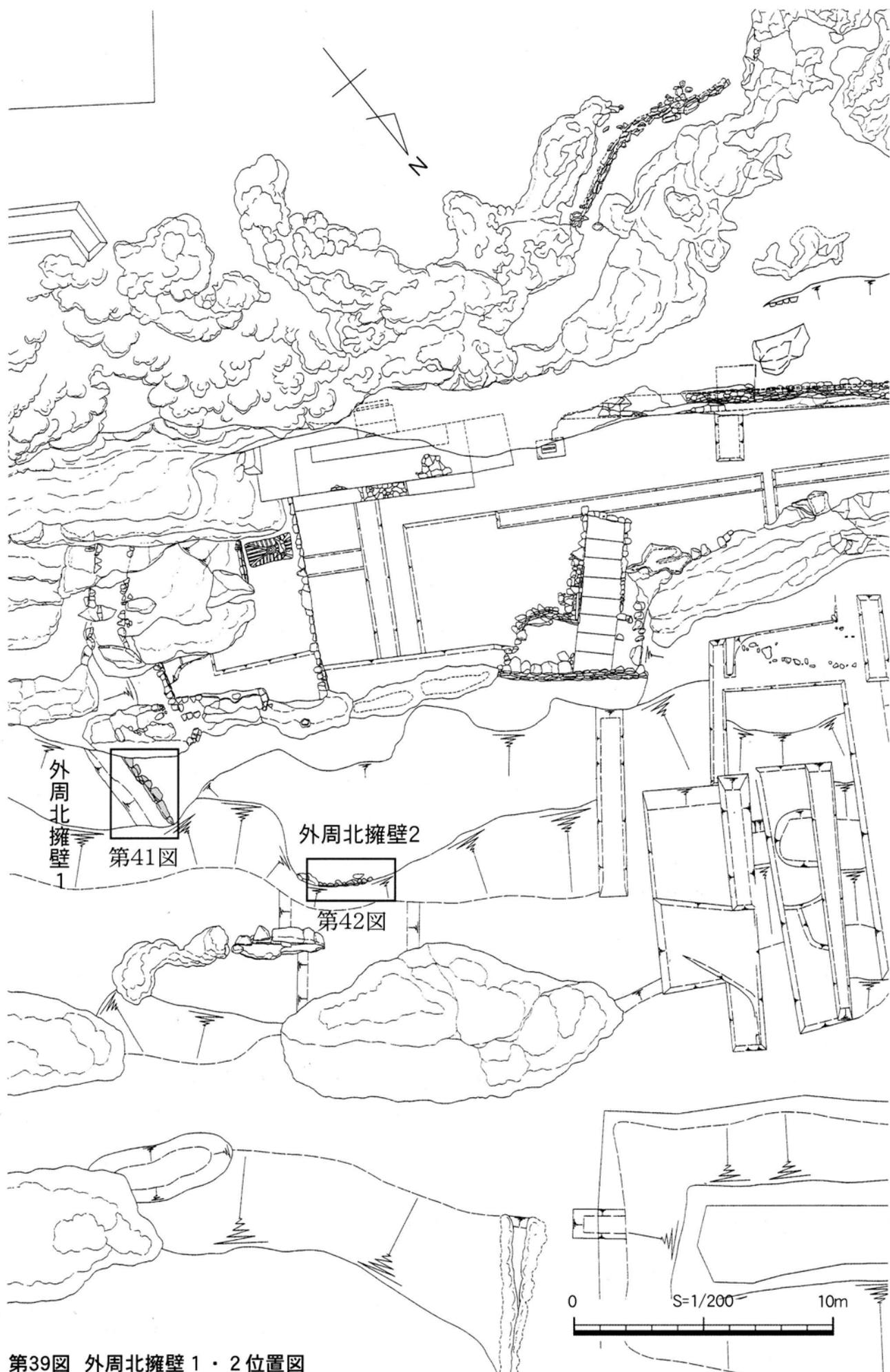
3. 外周北擁壁

一番庭及び二番庭の北側外周を取り巻く石積み。概ね東西方向にはしる。東側の起点は確認できたが、西側については不明。

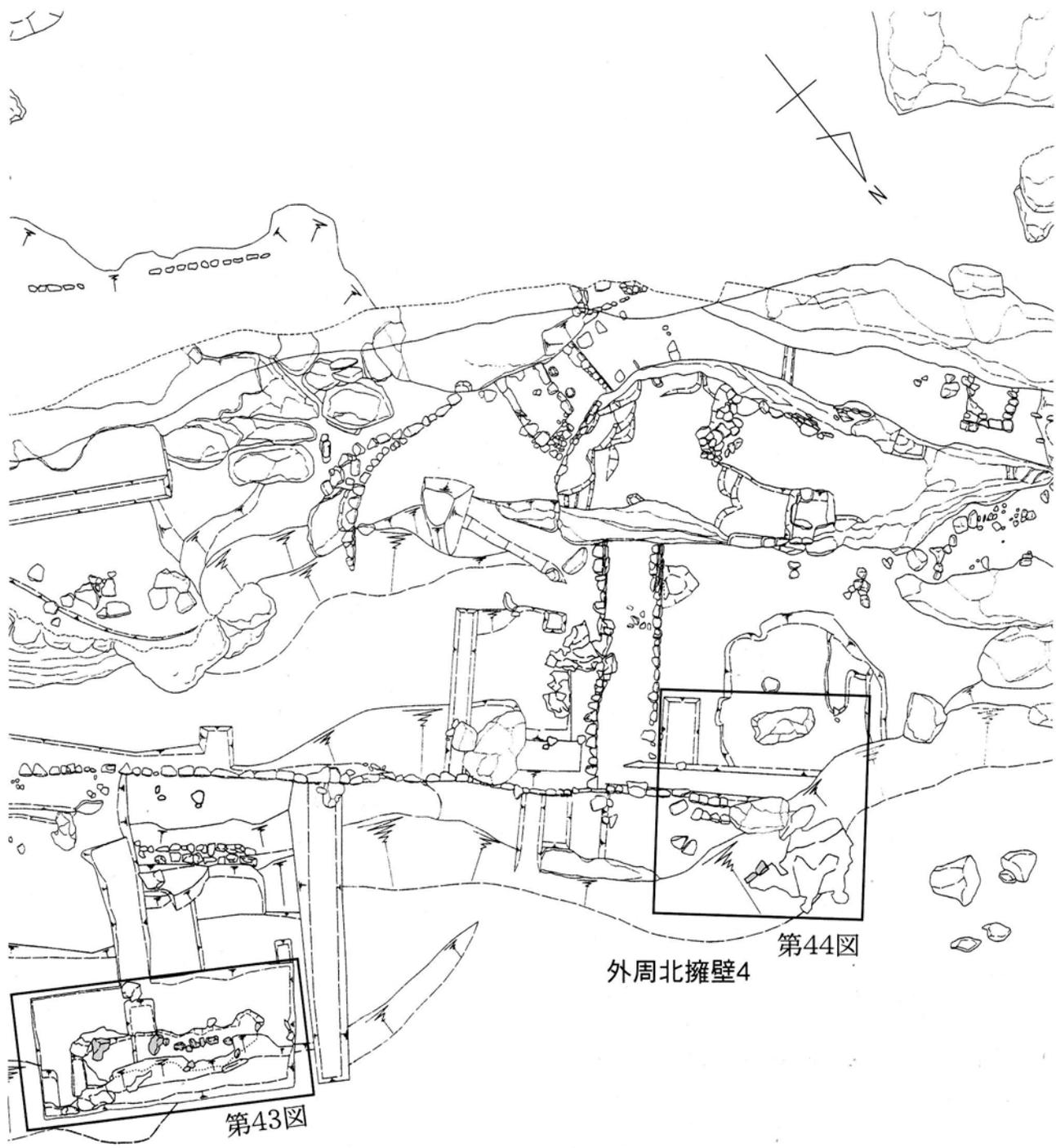
浦添ようどれを構成する石積みの中でも距離の長い石積みだったようだが、遺構は断続的な残り、それぞれ残存距離も短い。間隔をおいて4地点で出土している。石積みが残っている部分もあるが、裏込めのみや基礎部分のみの箇所もある。観察表では出土地点別に外周北擁壁1～4に分けて記すことにした。

表-6 遺構観察表 (外周北擁壁)

遺構名称	挿図番号 写真番号	技法	構造 (擁壁) (石牆)	①残存長 ②厚さ(幅) ③残存高(最大) ④勾配 ⑤軸方向	石のサイズ ①たて ②よこ ③控え	特徴・残存状況等 (性格・形状・工法・根拵え・裏込め等)
						他遺構との関係・その他
外周北擁壁1	平面図 第41図1 立面図 第41図2 断面図 第41図3 図版16-中	切石積み (布積み)	擁壁	①3.8m ②- ③1.1cm ④ほぼ垂直 ⑤N14° E	①22cm~46cm (平均 32cm) ②28cm~76cm (平均 48cm) ③30cm~44cm (平均 38cm)	外周北擁壁の東端部を①とした。 1~3段残る。石積み南端の起点から北方向に3mほど直線的に延び、そこから西側へ緩やかな曲線を描きコーナー部を造り出すようであるが、その先は地盤自体が大きく崩壊し、石積みもここで途切れている。崩壊の影響で残存部も全体的に北側へ傾き、目地も開いている。石積みの起点は張り出した岩盤下部にすり付けている。比較的大型の切石が使われている。
外周北擁壁2	平面図 第42図1 立面図 第42図2 断面図 第42図3 図版7-上 図版16-下	粗加工石積み (裏込めの露出)	擁壁	①2.9m ②- ③1cm ④85° ⑤N45° W	①16cm~40cm (平均 27cm) ②10cm~50cm (平均 31cm) ③-	外周北擁壁①から延びていた石積み切石が欠失し、裏込めが露出したものと考えられる。石は粗加工で野面に近い。 周辺は大きく崩壊しており、本遺構だけがかるうじて残っている。
外周北擁壁3	平面図 第43図1 断面図 第43図2 図版10-上 図版17-上・中	基礎のみ出土	擁壁	①6.4m ②1~1.3m (掘方の残存幅) ③70cm前後か (基礎の深さ) ④- ⑤N51° W	①- ②- ③-	外周北擁壁の基礎。東西方向に溝状の掘り込みを設け、内部に10~30cmを主とする石灰岩礫を詰めて根拵えを行っている。根詰め石には60~70cmの大型サイズも見受けられる。地滑りによって遺構の北半部は削られており、遺構の本来の幅は知り得なかった。 一番庭北擁壁から北へ約6mに位置し、ほぼ平行。
外周北擁壁4	平面図 第44図1 立面図 第44図2 断面図 第44図3 図版17-下	切石積み (布積みと思われる)	擁壁	①90cm ②- ③- ④- ⑤N75° W	①24cm ②32cm ③27cm	外周北擁壁の最下段の石と考えられる。切石2個1段だけが残存。削平した岩盤上に直接据えている。



第39図 外周北擁壁 1・2 位置図

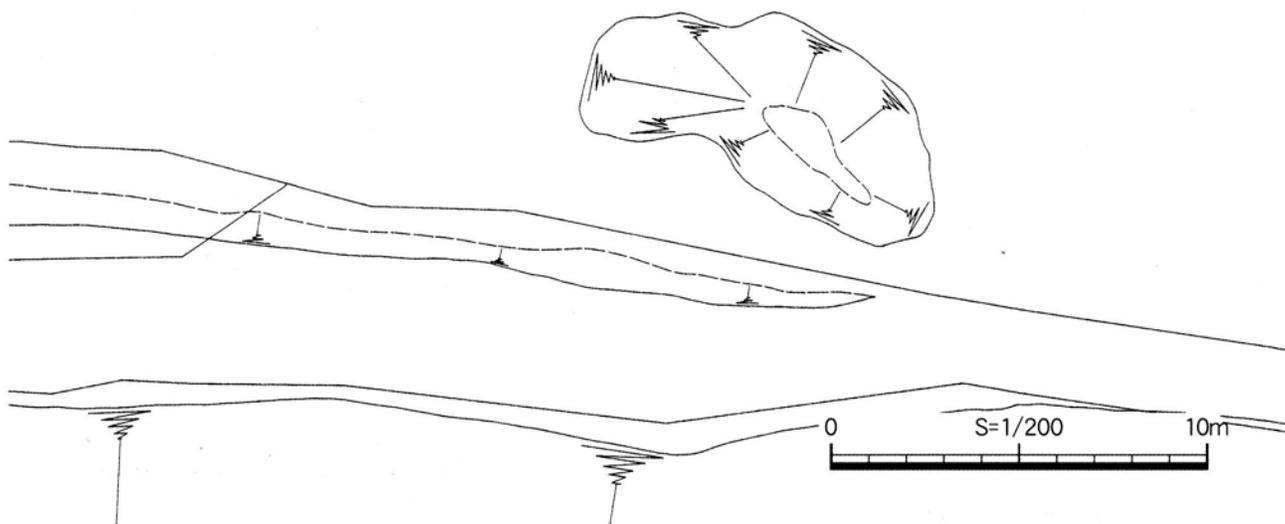


外周北擁壁3

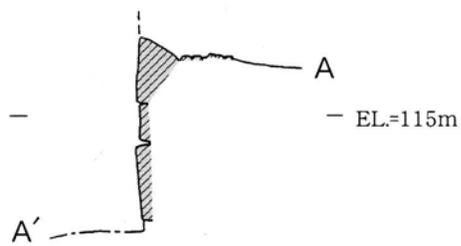
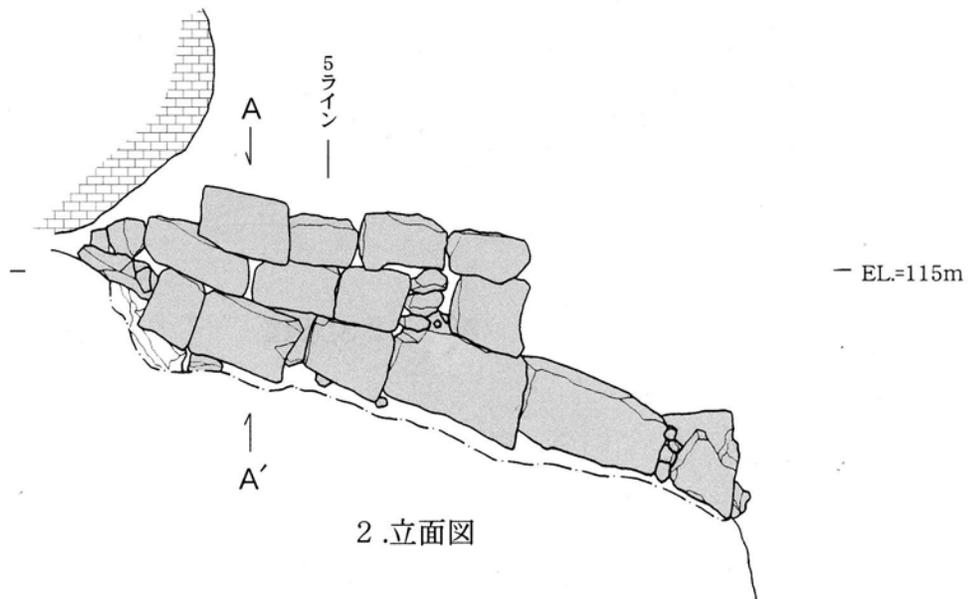
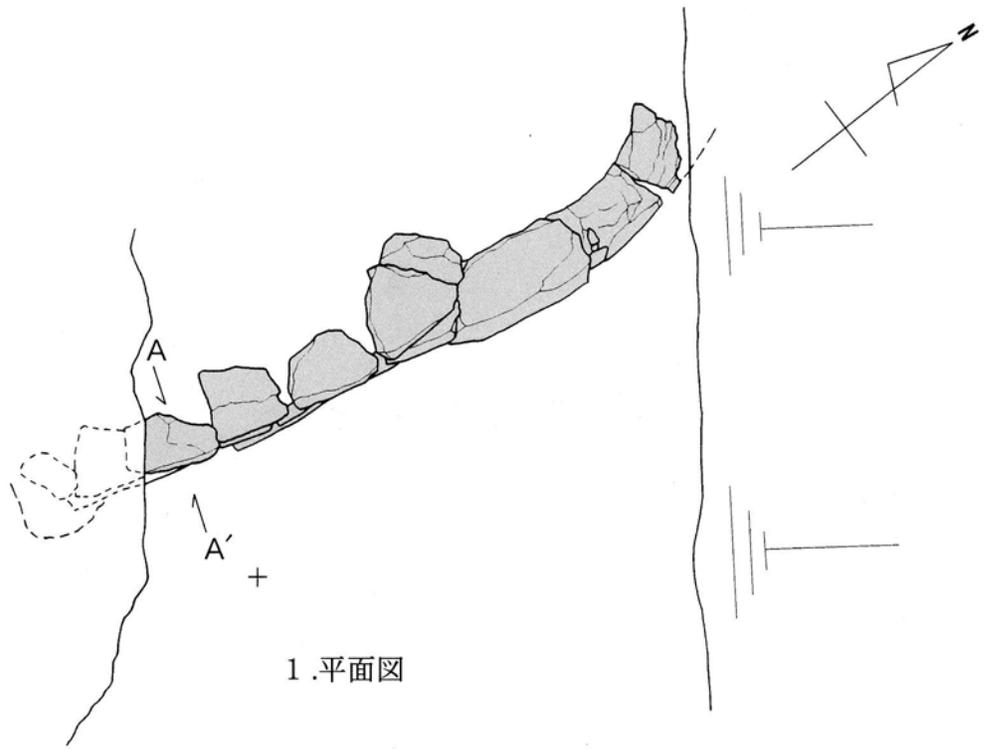
第43図

外周北擁壁4

第44図

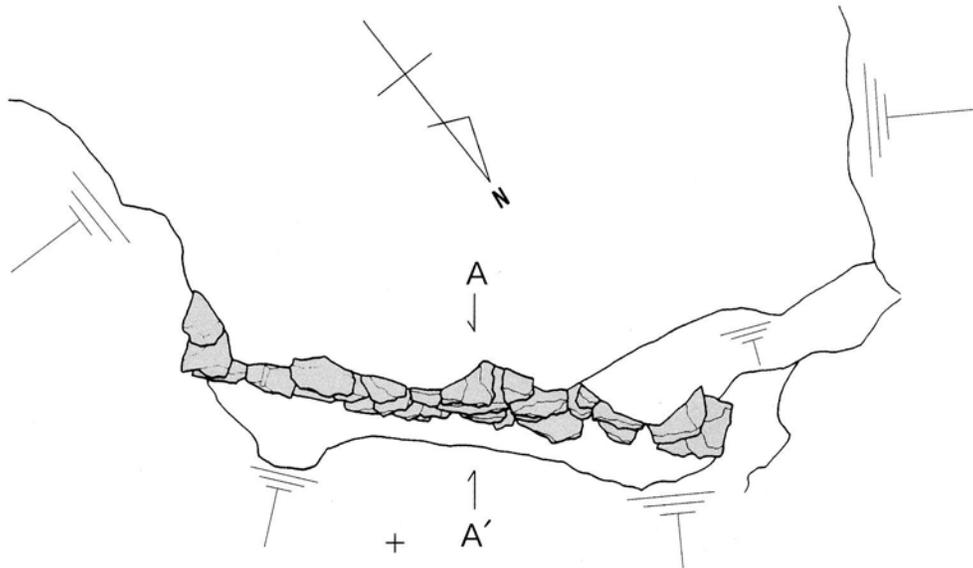


第40図 外周北擁壁 3・4 位置図

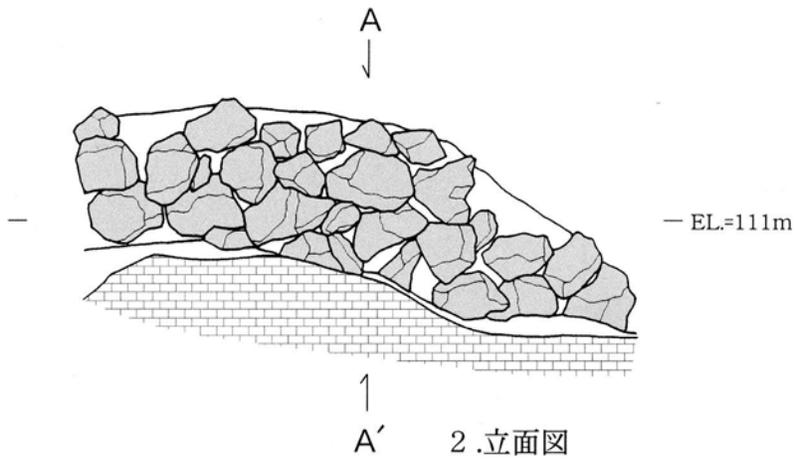


第41図 外周北擁壁1

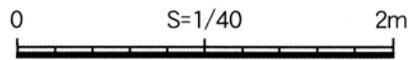
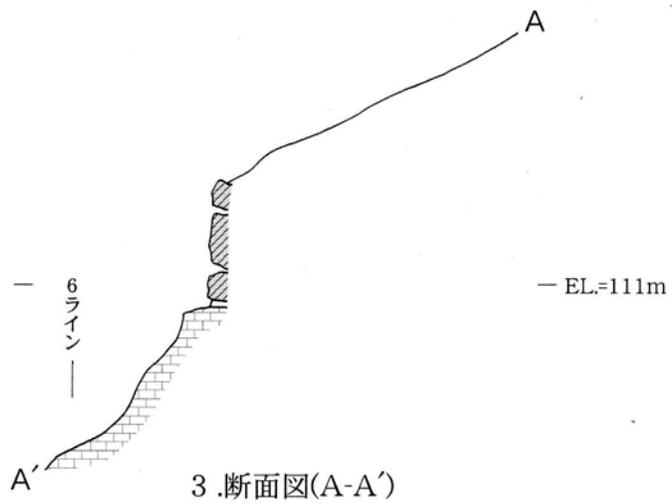
0 S=1/40 2m



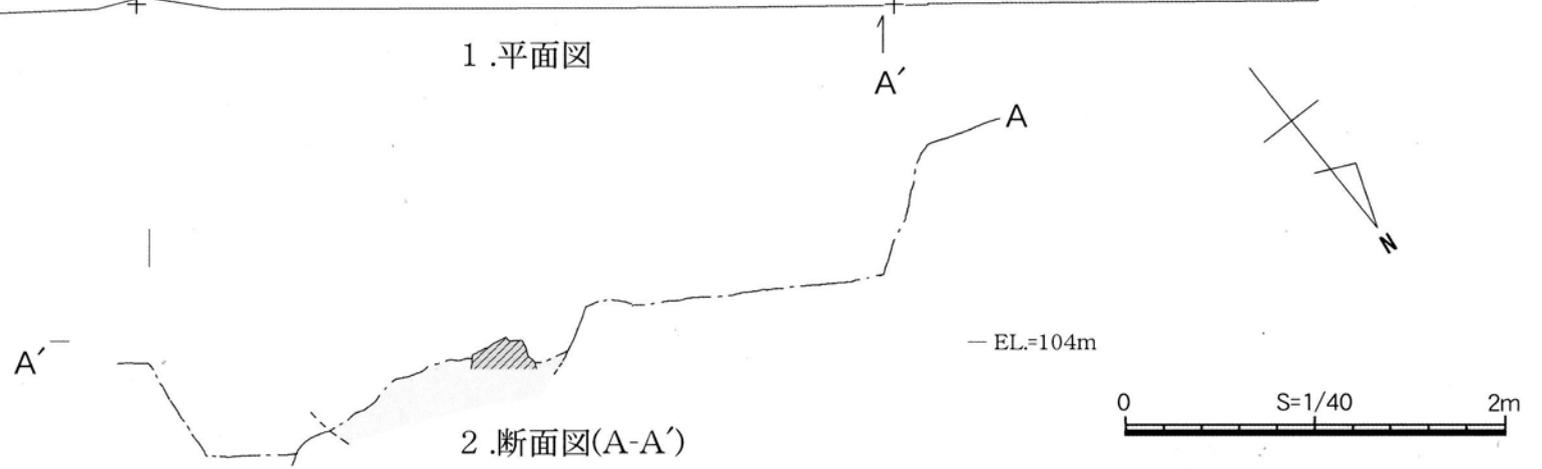
1. 平面図



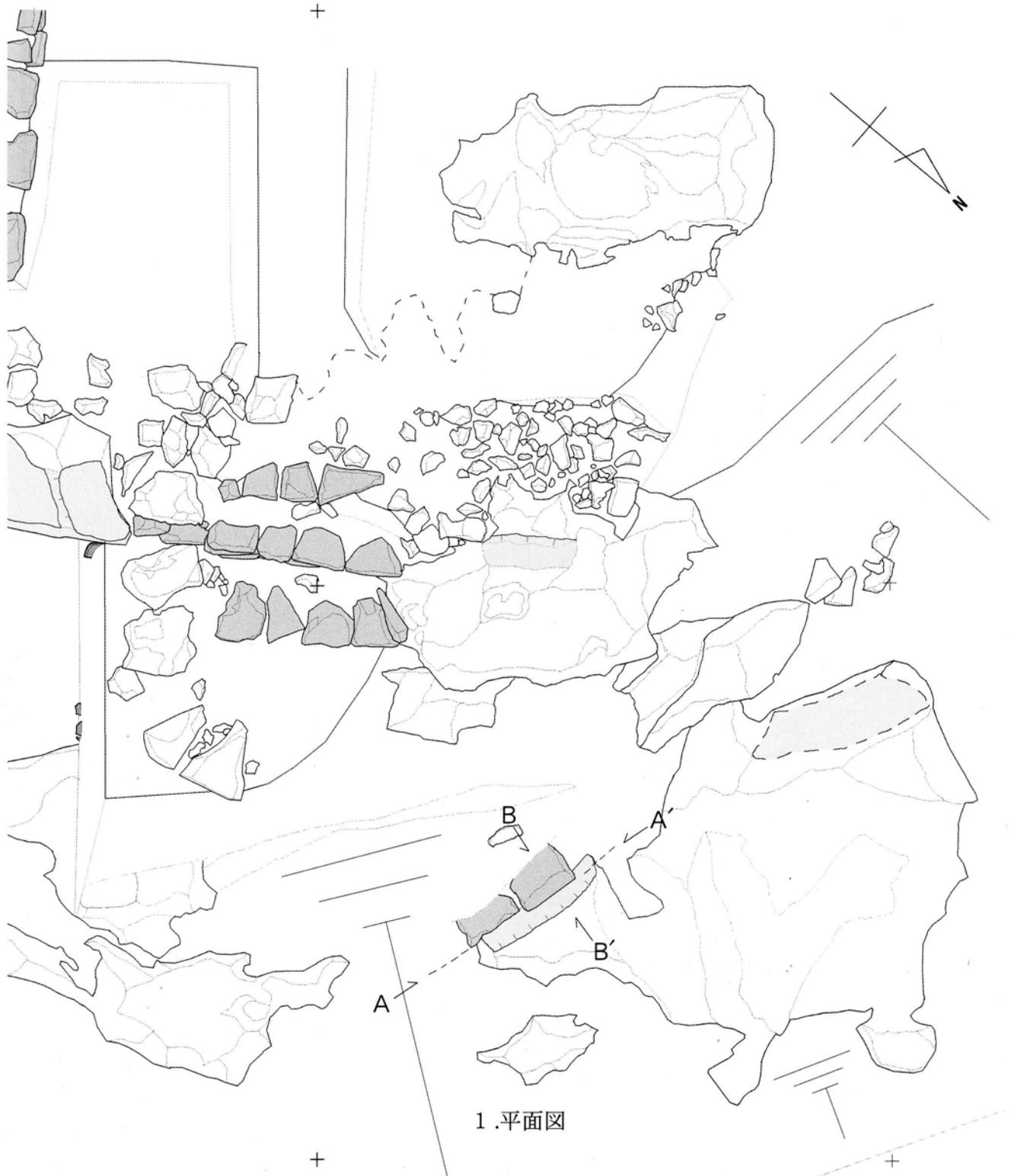
2. 立面図



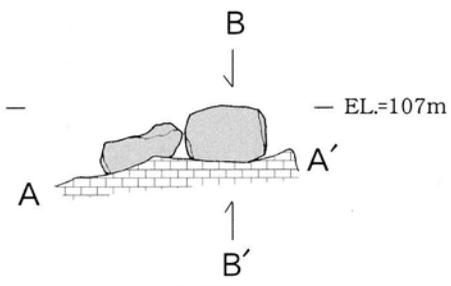
第42図 外周北擁壁 2



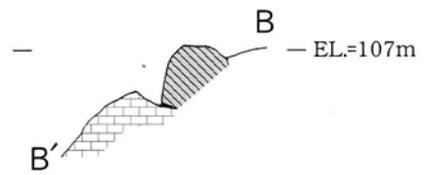
第43図 外周北擁壁 3



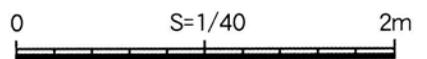
1. 平面図



2. 立面図



3. 断面図(B-B')



第44図 外周北擁壁 4

4. 暗しん御門と浮き道

前庭から二番庭に至る隧道のことを暗しん御門と呼んでいた。南側から張り出した岩盤（オーバーハング）を支えるように、北側の巨岩上から石積みが行われ、トンネル状になっていた。浮き道は前庭から暗しん御門にかけて敷設されていた。

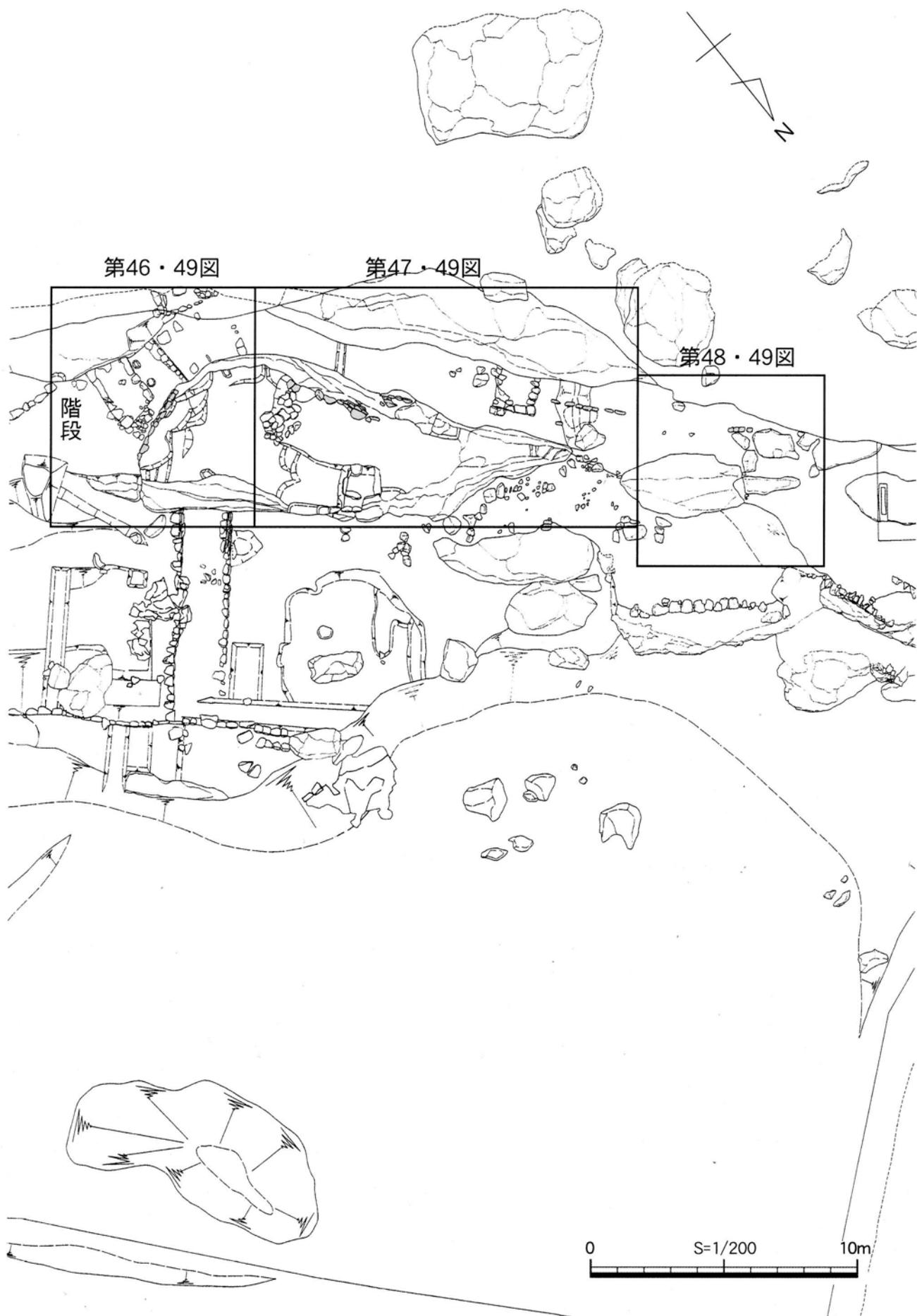
暗しん御門は沖縄戦によって全壊したかと思われていたが、戦後の琉球政府による造成土を取り除いた結果、暗しん御門を形づくっていた北側の巨岩や南側岩盤の下半部は良好に残っていた。また、発掘調査によって、暗しん御門は旧日本軍の陣地として使用されていたことなども判明した。

石積遺構は、暗しん御門の北側巨岩の中央部と、出口から二番庭にかけて残る。岩盤上の削平状況からすると、両者は一連の石積みと判断される。観察表では暗しん御門石積1・2として分けて記した。

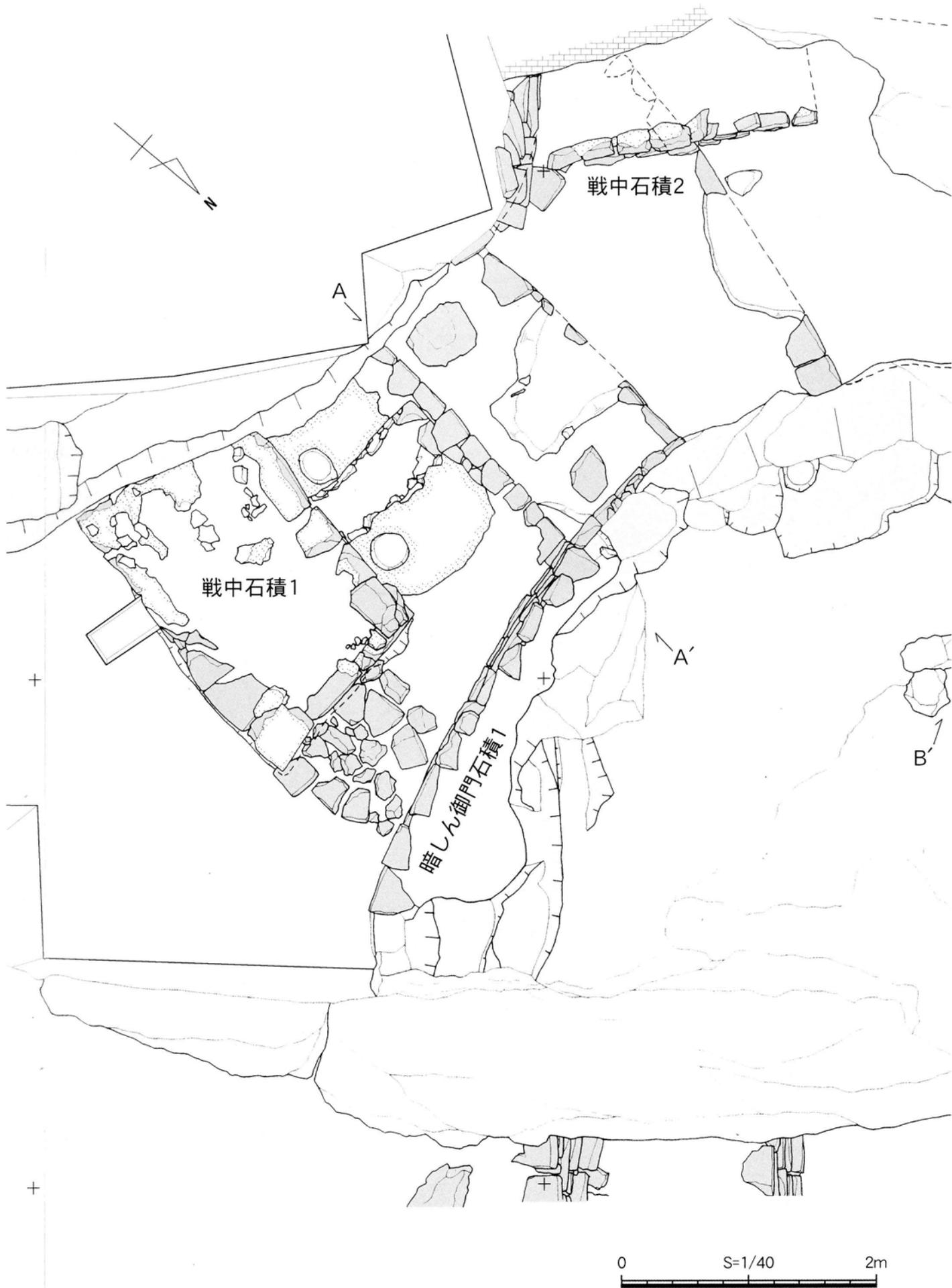
浮き道は、戦時中構築された石積みによって断ち切られているが、前庭側の起点から約8m断続的に残っている。

表-7 遺構観察表（暗しん御門と浮き道）

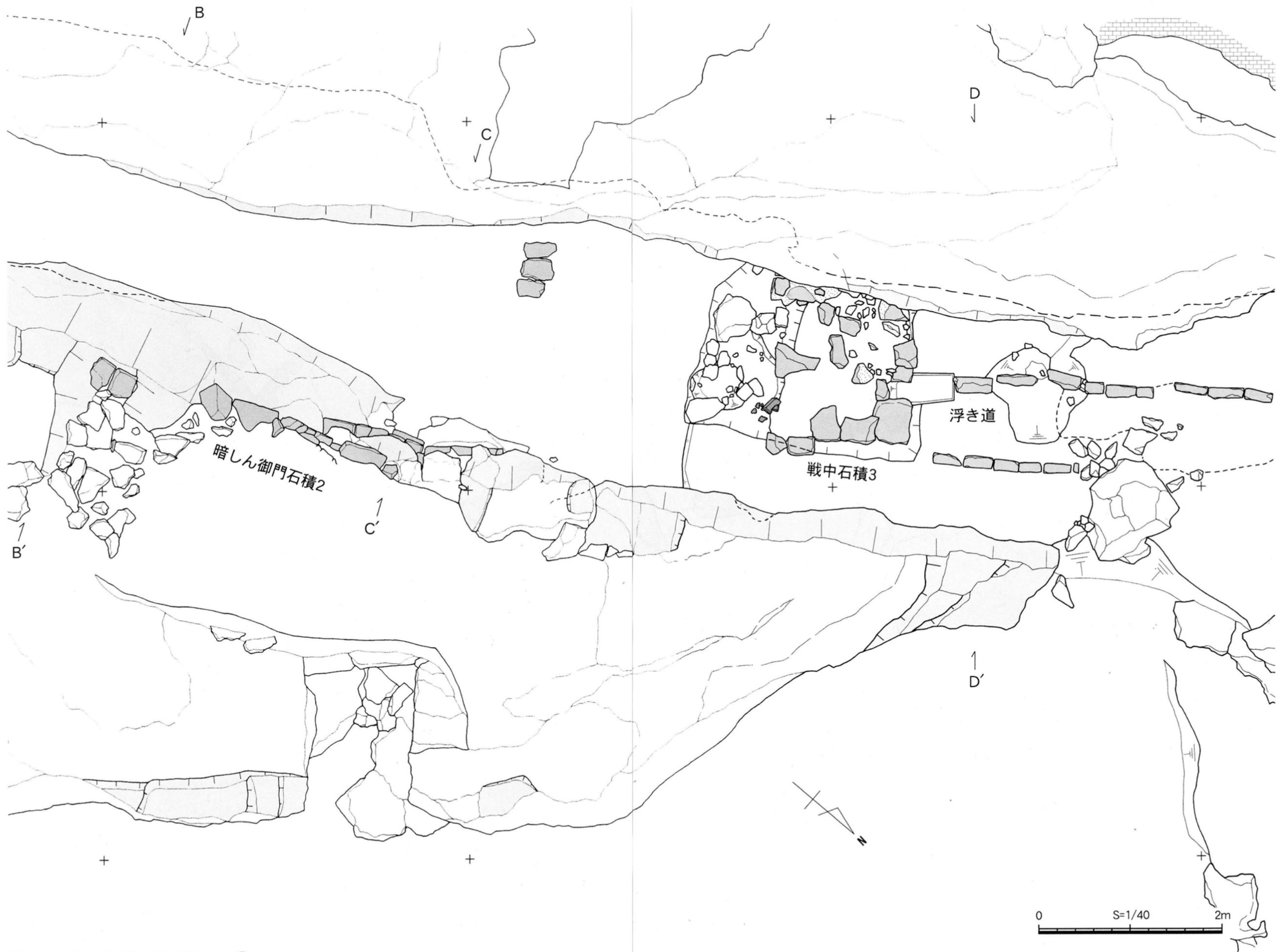
遺構名称	挿図番号 写真番号	技法	構造 (擁壁) (石牆)	①残存長 ②厚さ(幅) ③残存高(最大) ④勾配 ⑤軸方向	石のサイズ ①たて ②よこ ③控え	特徴・残存状況等 (性格・形状・工法・根拵え・裏込め等)
						他遺構との関係・その他
暗しん御門石積1	平面図 第46図	切石積み (布積み)	擁壁	①4.2m ②— ③72m ④84° ⑤N79° E	①10cm~25cm (平均 19cm) ②21cm~44cm (平均 28cm) ③—	二番庭階段の二段目から二番庭にかけて残存する石積み。暗しん御門の北側巨岩を取り巻くように積まれている。二番庭側の北先端は欠失。平面観はわずかに曲線部を有するもののほぼ直線的。 石積みは正方形に近い切石が比較的目立つ。裏込めには石灰岩の小礫を使用している。 巨岩上面が平坦に加工された箇所があり、岩盤上にも石積みが行われていたことが窺える。
	立面図 第49図1 断面図 第49図4 図版19-上					沖縄戦による火熱で煤けた部分や、赤く変色し、もろくなった箇所がみられる。二番庭の階段がすり付いている。
暗しん御門石積2	平面図 第47図	切石積み (布積み)	擁壁	①4.8m ②— ③1.3m ④79° ⑤N28° W	①13cm~35cm (平均 20cm) ②9cm~52cm (平均 24cm) ③29cm~31cm (平均 30cm)	暗しん御門北側巨岩のほぼ中央部に位置する。下部は巨岩のすき間に小型の切石をはめ込んでいる。巨岩上部は削平され、比較的大型の切石が据えられている。石積みは内側に傾き崩壊寸前のももみられ、状態はあまり良くない。巨岩上の削平状況からすると、石積みは東西方向に延びていたことが窺える。
	立面図 第49図2 断面図 第50図2 図版19-中					本遺構は暗しん御門北石積1と一連の石積み。
浮き道	平面図 第47図 第48図	—	—	①緑石の残存 南緑石約8m 北緑石約1.5km ②98cm ③— ④— ⑤N36° W	前庭側 ①12cm~18cm (平均 15cm) ②17cm~27cm (平均 21cm) 暗しん御門側 ①10cm~14cm (平均 12cm) ②19cm~43cm (平均 31cm)	前庭から暗しん御門を通り、二番庭階段まで敷設された道。発掘調査では前庭側の起点から暗しん御門の手前まで断続的に出土した。暗しん御門内部は戦時中取り外されたもよう。 浮き道は切石を2列平行に並べ緑石とし、内部に黄褐色の石灰岩粉砕土を充填している。緑石は長方形を基本としているが、起点側(前庭側)については正方形に近く、加工も若干粗雑。起点の緑石は床面として削平された岩盤にすり付いている。浮き道の高さ(外側との比高)は10cm前後。
	断面図 第50図3 図版18-左下 図版19-下					浮き道は戦中に構築された石積み(戦中石積3)によって断ち切られ、暗しん御門内部には残存しない。



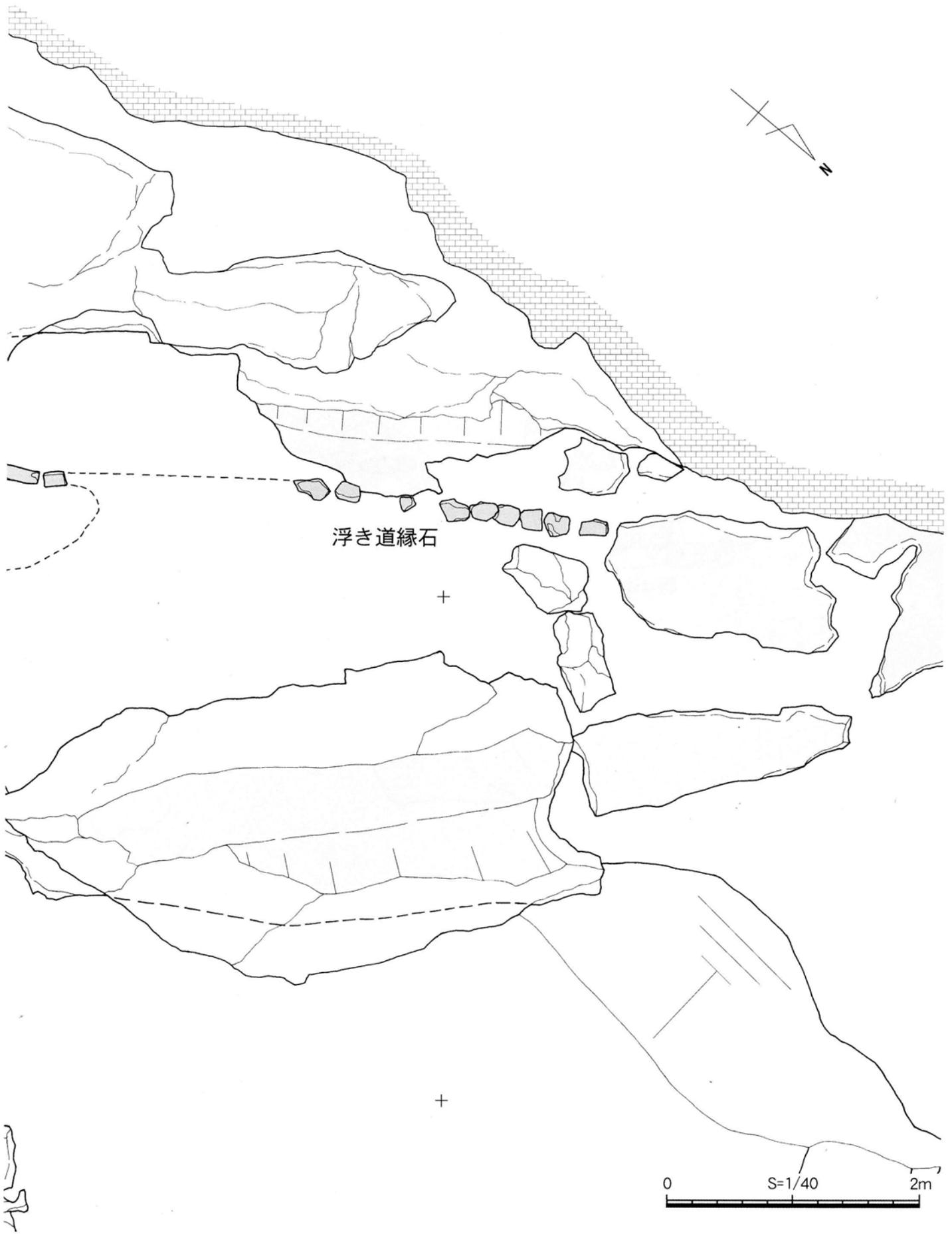
第45図 暗しん御門と浮き道位置図



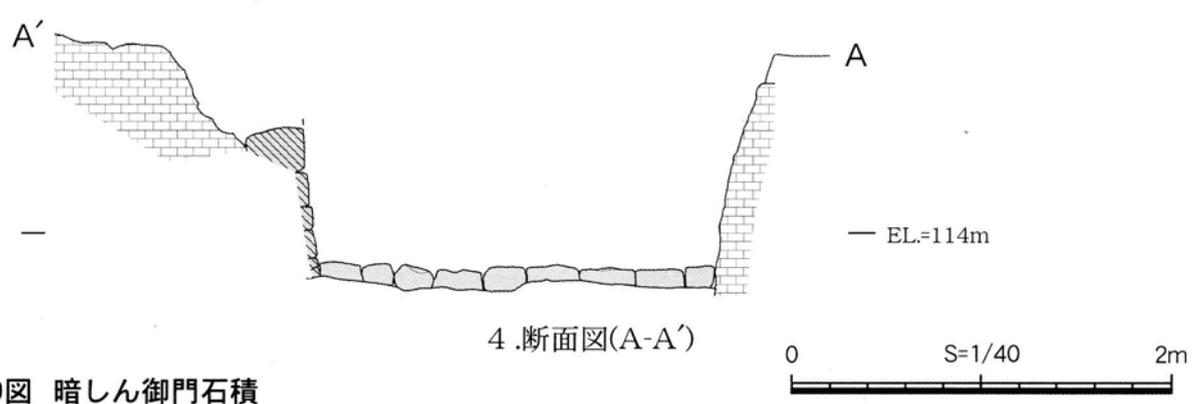
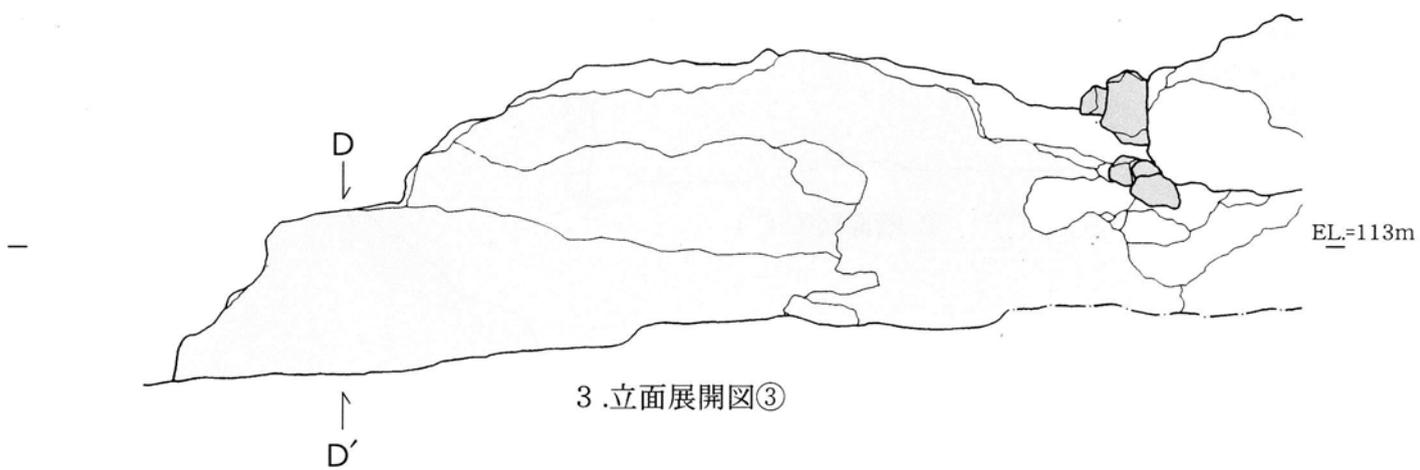
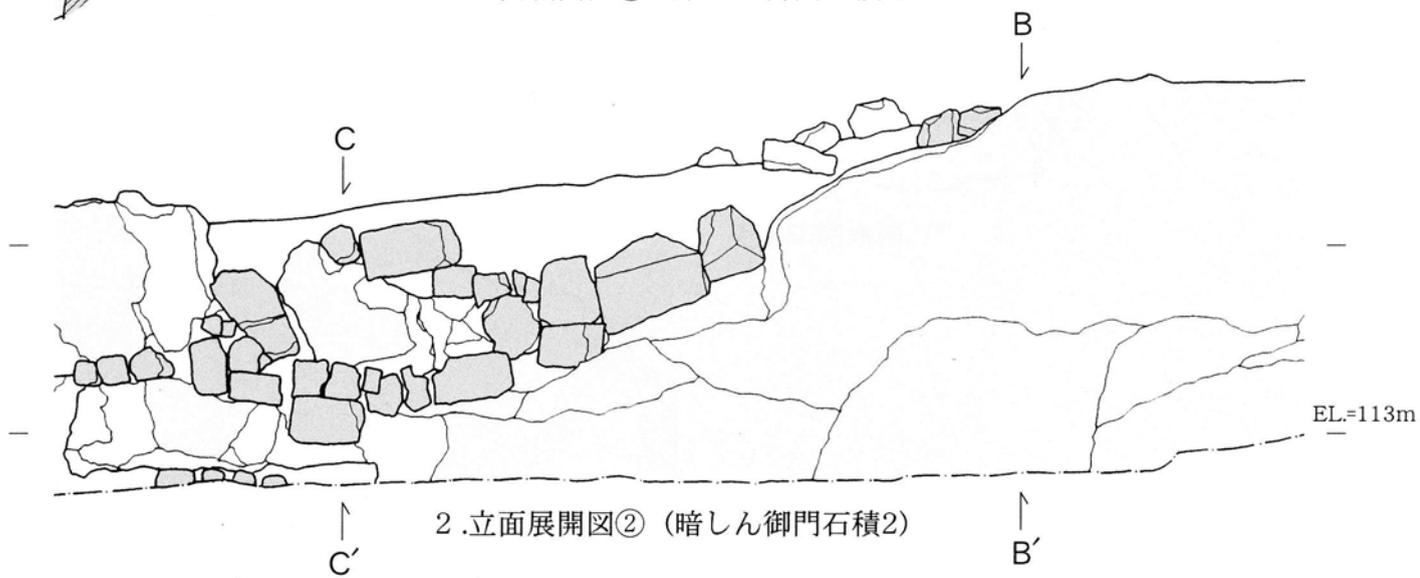
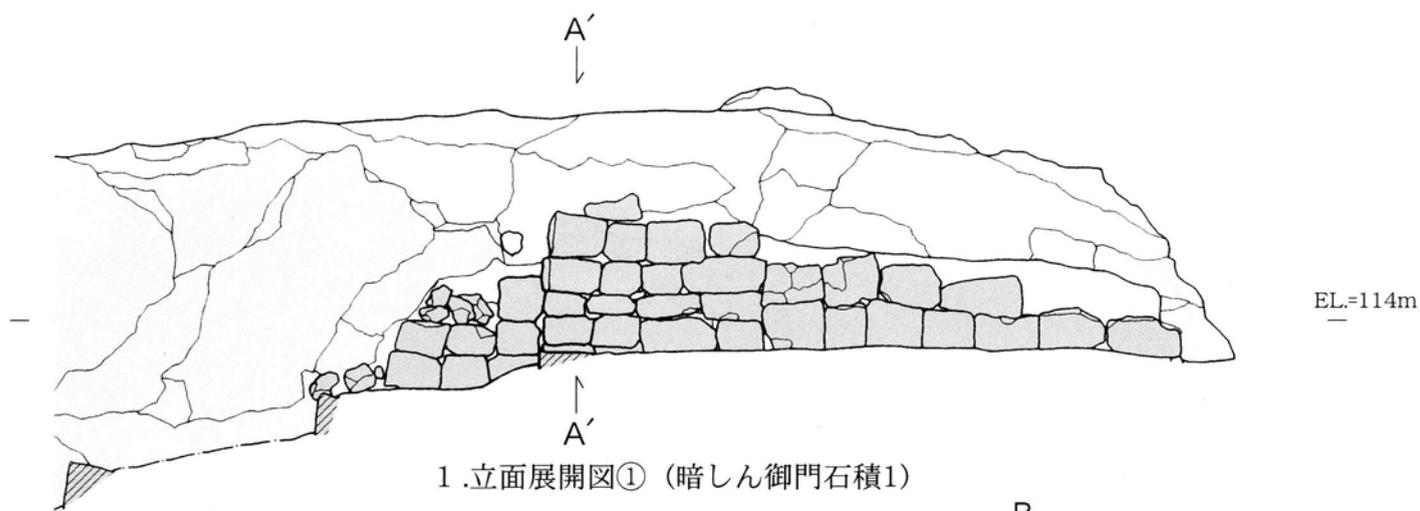
第46図 暗しん御門と浮き道平面図①



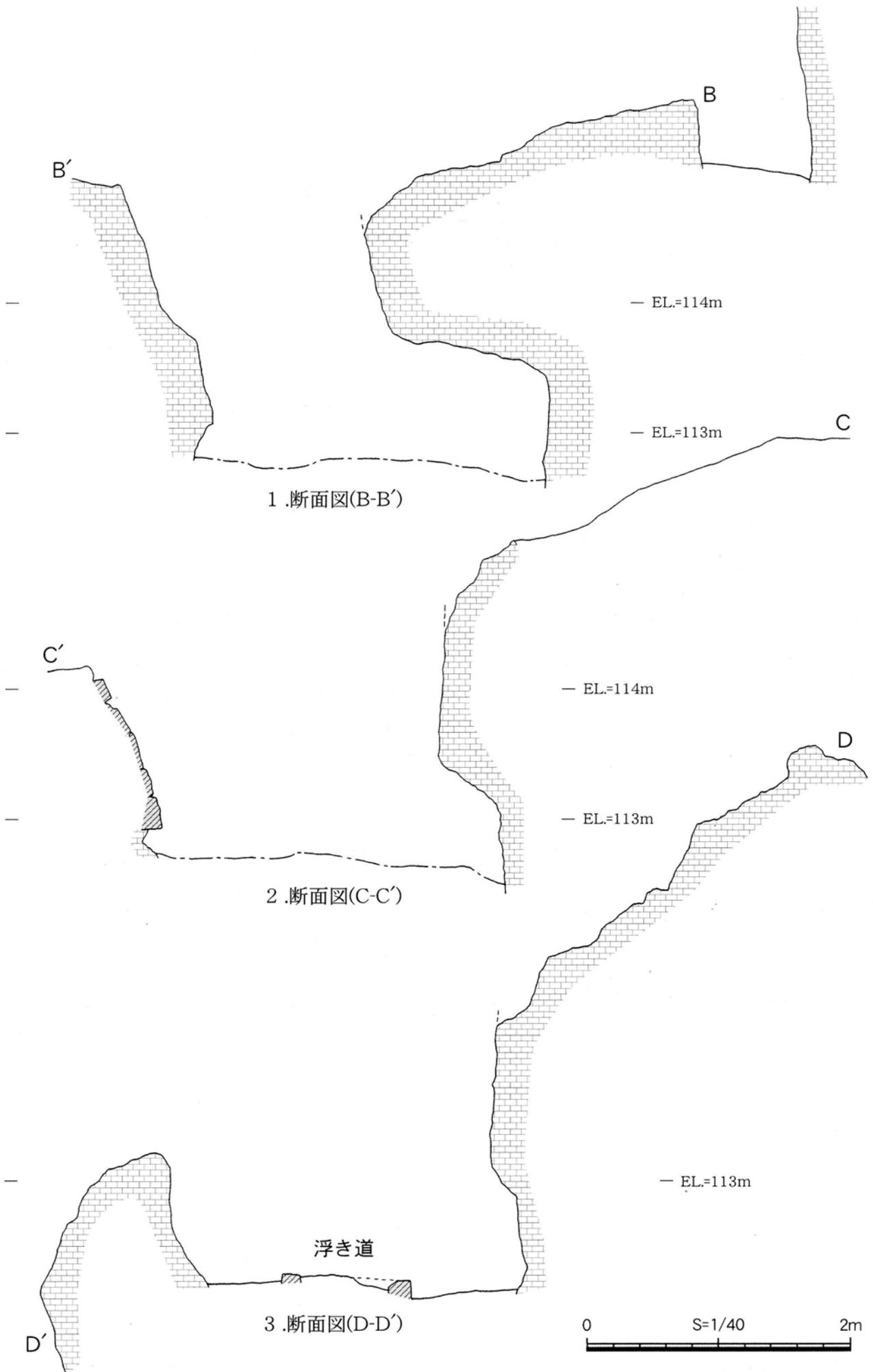
第47図 暗しん御門と浮き道平面図②



第48図 暗しん御門と浮き道平面図③



第49図 暗しん御門石積



第50図 暗しん御門石積及び浮き道

5. 前庭と参道

前庭の石積遺構は断続的だが、ラインを推定すると石積み全体の平面観は、鋭角の「L」状をなしていたと考えられる。

石積みは粗加工の石を使用しているが、最下部には長方形あるいは正方形に近い切石もみられる。積み直された可能性が高い。

前庭石積のうち、南北軸のものを北石積1、南西-北東軸のものを西石積とした。また、北石積のさらに北側下方の岩間に積まれた小規模石積みを北石積2とした。

北石積1は、中央部分で途切れ、東側と西側に分かれたかたちで出土している。両者は立ち上がり部のレベルや、石積み軸に違いが認められ、調査時には都合上、別々に実測した。これにしたがって、本書観察表でも北石積1-1、2にわけて扱うことにした。

次に参道についてだが、ここではユードゥリヌヒラから前庭手前の踊り場まで下ってくる道を参道A、踊り場から北側（字当山）へ下る道を参道Bと仮称しておく。参道Bは盛土した上に石段道を設けていたようだが、石段道は一部を残しほとんど欠失している。参道Bの西側は石積み擁壁で、残存状況は比較的よい。

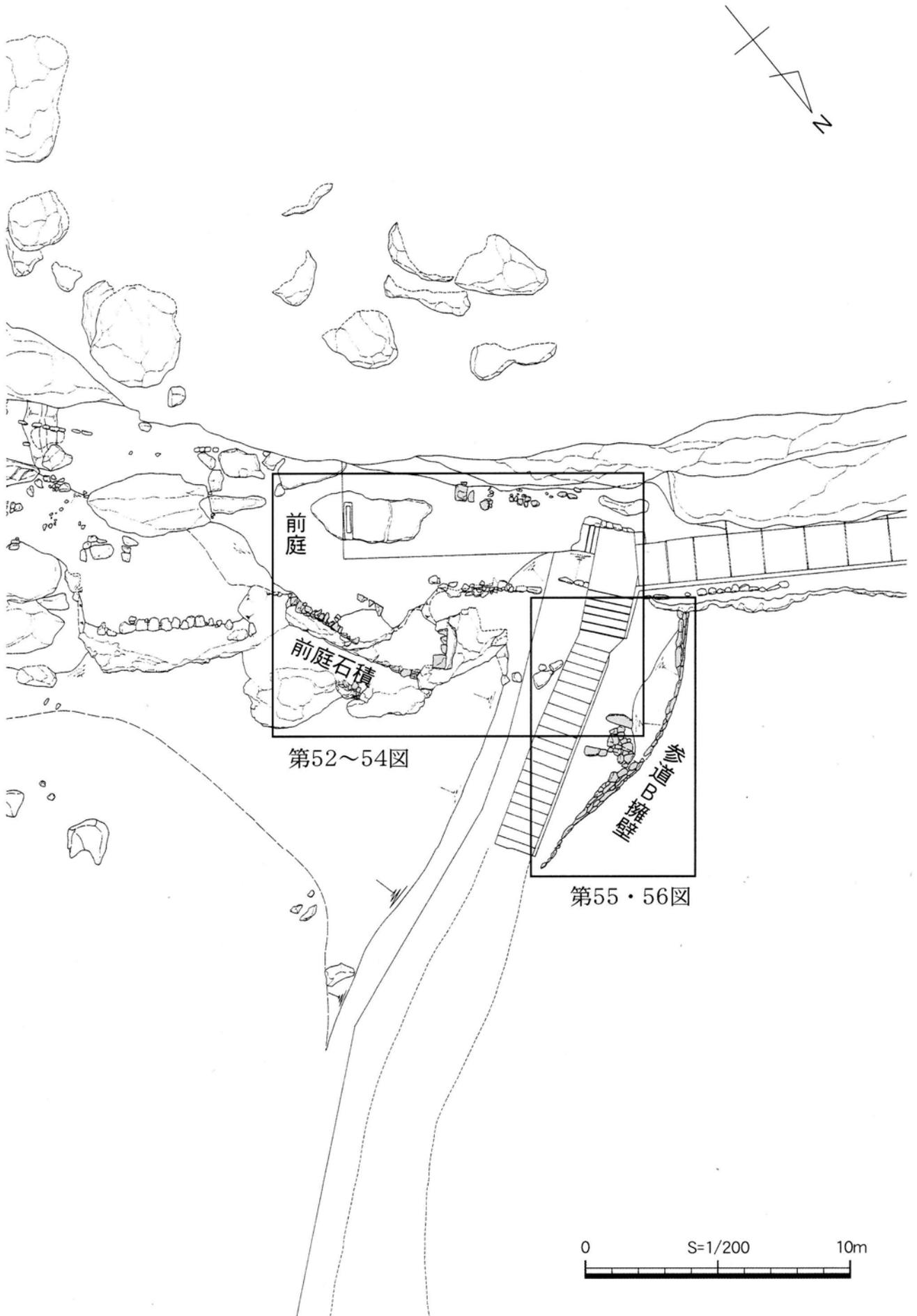
参道Aは現在使用している階段（戦後の整備で設置された）と重複している。未発掘のため遺構の詳細は示せないが、階段下にかつての石敷きの縁石が確認できる。参道Aについては、未調査のため、今回の報告から省いた。

表-8 遺構観察表（前庭石積）

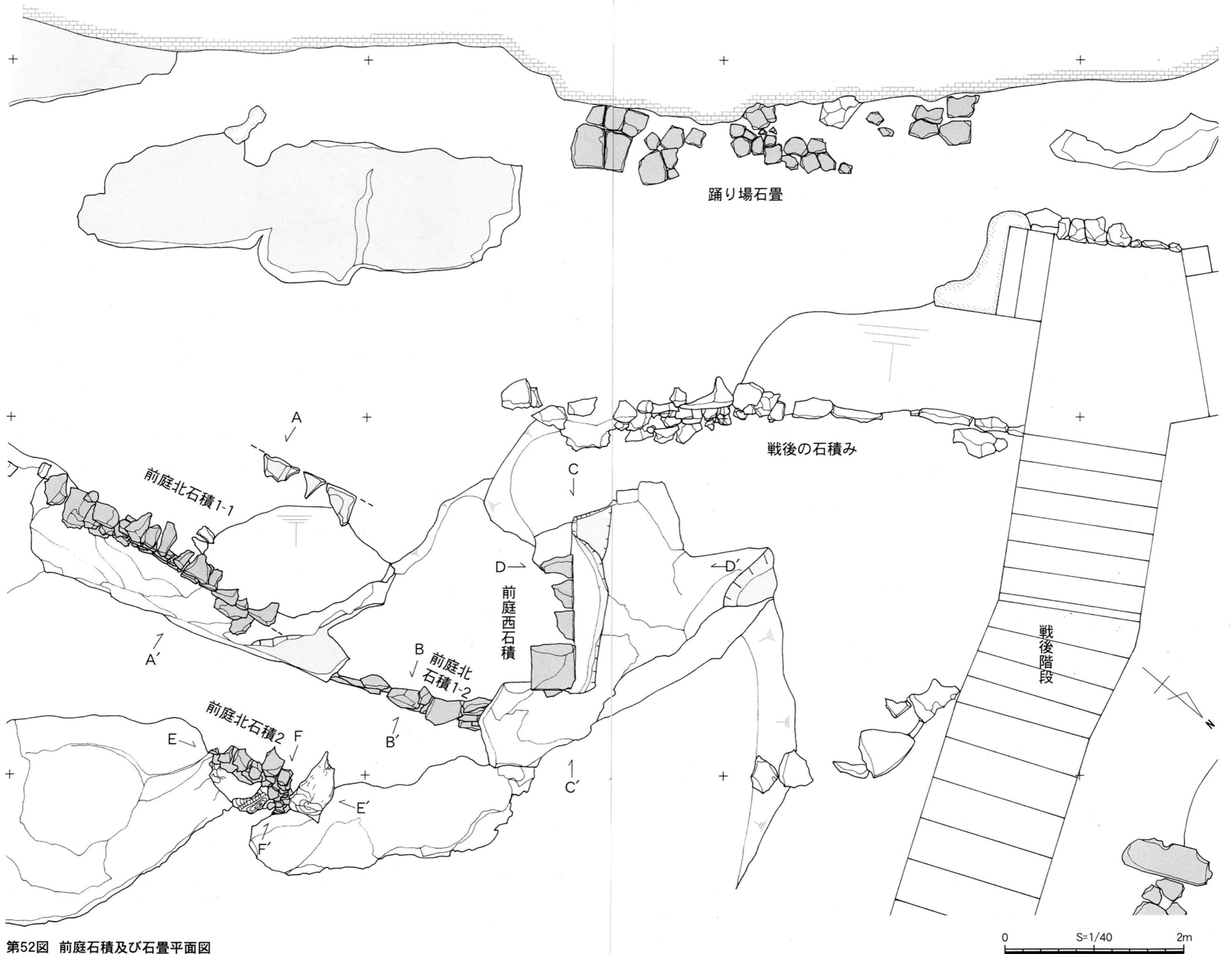
遺構名称	挿図番号 写真番号	技法	構造 (擁壁) (石牆)	①残存長 ②厚さ(幅) ③残存高(最大) ④勾配 ⑤軸方向	石のサイズ ①たて ②よこ ③控え	特徴・残存状況等 (性格・形状・工法・根拵え・裏込め等)
						他遺構との関係・その他
前庭北石積1-1	平面図 第52図 立面図 第53図1・2 断面図 第53図3 図版20	粗加工石積み	擁壁 + 石牆	①外面3.0m *北石積1-② までの総延長5.7m 内面1.1m ②1.6m ③70cm ④84° ⑤N10° w	①12cm~32cm (平均 18cm) ②22cm~38cm (平均 29cm) ③22cm~36cm (平均 28cm)	前庭北石積の残存部のうち、東側に位置する石積み。巨岩に直接積み上げている。積み石は粗加工で形や大きさが一定せず、隙間が目立つ。 平面観は直線的。外面では5~6段残っているが、内面は3個1段だけ残存。崩壊部で見ると、裏込めは小礫主体の混礫土。
前庭北石積1-2	平面図 第52図 立面図 第54図1 断面図 第54図2 図版20-上・中 図版21-上	粗加工石積み	擁壁 + 石牆	①外面2.1m ②- ③1.1m ④- ⑤N22° w	①12cm~35cm (平均 22cm) ②22cm~66cm (平均 33cm) ③-	前庭北石積の残存部のうち、西側に位置する石積み。北石積1-1より2.3m下位レベルから、岩間を埋めるように積み上げられている。東側の岩は北石積1-1の基礎となっている。 北石積1-1と同様、粗加工で隙間が目立つ。土圧により上半部が北側(石積みの表側)に傾いている。石積み下部に長方形の大型切石(35cm×66cm)が1個だけみられる。積み直した可能性がある。本来は切石積みか。
前庭西石積	平面図 第52図 立面図 第54図3 断面図 第54図4 図版20-上 図版21-下	切石積み (布積み?)	擁壁 + 石牆	①1.5m ②- ③40cm ④- ⑤N49° E	①- ②24cm~44cm (平均 36cm) ③21cm~48cm (平均 32cm)	北西向きの石積みで、前庭石積1-2と鋭角に連結するものと考えられる(内角70°前後)。4個の1段残存。巨岩の上面を溝状に削り切石を据えている。 前庭北石積に比べ、積み石の加工は丁寧。北端の切石は立方体に近く大型で安定している。

表-9 遺構観察表 (前庭石積・石畳・参道擁壁)

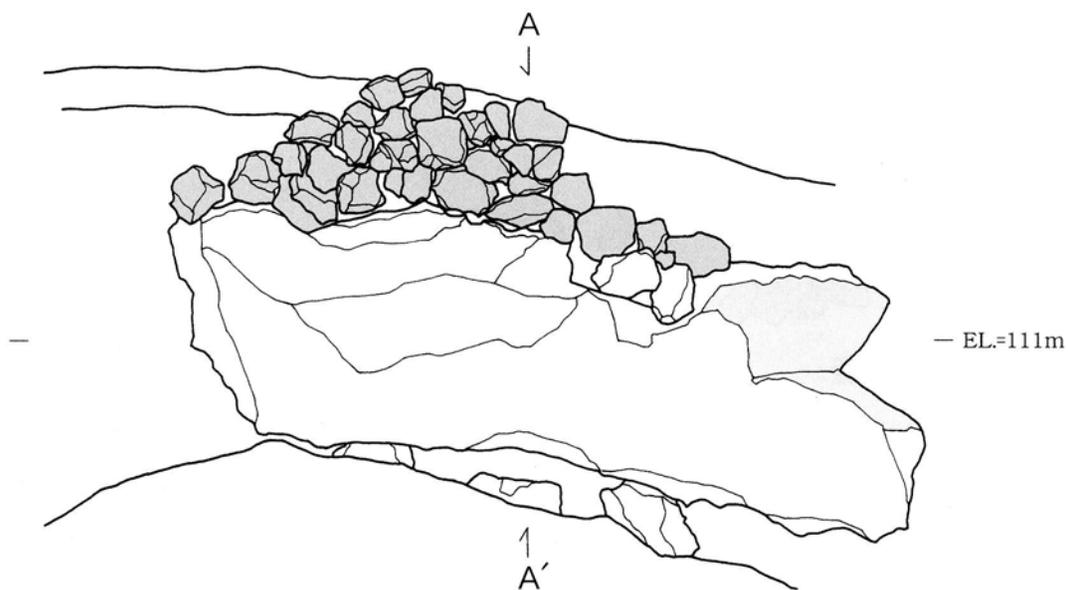
遺構名称	挿図番号 写真番号	技法	構造 (擁壁) (石簷) (その他)	①残存長 ②厚さ(幅) ③残存高(最大) ④勾配 ⑤軸方向	石のサイズ ①たて ②よこ ③控え	特徴・残存状況等 (性格・形状・工法・根拵え・裏込め等)
						他遺構との関係・その他
前庭北石積2	平面図 第52図	粗加工石積み	擁壁	①90cm ②- ③1.2m ④73° ⑤N15° w	①8cm~19cm (平均 13cm) ②7cm~28cm (平均 17cm) ③16cm~31cm (平均 20cm)	巨岩の隙間に積まれた石積み。前庭北石積1と何らかの関連性があると思われるが詳細は不明。 粗加工で小型の石を積み上げている。石積み面の約1/2は木根に被われて見えない。
	立面図 第54図5 断面図 第54図6 図版20-上・中 図版21-中					前庭北石積1から北へ約1.4mの位置にあり、同石積みとほぼ平行関係。
踊り場石畳	平面図 第52図	-	石畳	①4.5m ②1m前後 ③- ④- ⑤-	①10cm~49cm (平均 21cm) ②12cm~35cm (平均 22cm) ③-	踊り場に敷設された石畳の残存遺構。南側の岩盤沿いにわずかに残っている。敷石は四角形~多角形と一定しない。個別の大きさは20cm前後が主。東端(暗しん御門側)のものは大型四角形(約50cm)で、隣接する敷石と南北方向の目地で5cm前後の段差を設けている。
	図版22-上					古写真との照合の結果、本遺構は踊り場の石畳の可能性が高い。
参道B及び擁壁	平面図 第55図1 立面図 第56図1 断面図 第55図2 第56図2・3 図版22-中・下	切石積み (主に布積み)	擁壁	①12.8m ②- ③2.1m ④72° ⑤ほぼ東西方向 (平面観曲線)	①14cm~52cm (平均 30cm) ②12cm ~107cm (平均 39cm) ③-	前庭から北東側へ下る参道の擁壁。西端は岩盤にすり付けている。平面観は曲線的で「~」を伸ばしたような形状。 積み石は基本的に方形だが、中には五角形の石も見受けられる。石の大きさも一定せず、極端に大型もある。状況の良い箇所では6~7段残存するが、天端まで残る部分はない。 石積み上面は石敷きの参道だが、石段を含む長さ約1.7m、幅1.2mだけが残る。本来の幅員などは不明。現存部をみると、石柱状の切石を横位に据えて階段をつくり、次の段との間は石敷きを行っている。階段間の長さは少なくとも1.2m以上と推察される。石敷きの勾配は19°。



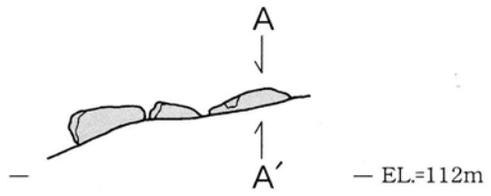
第51図 前庭石積及び参道位置図



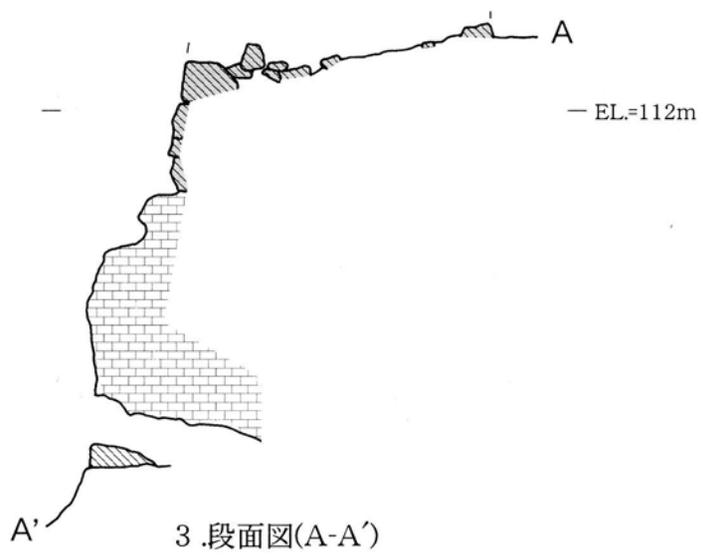
第52図 前庭石積及び石畳平面図



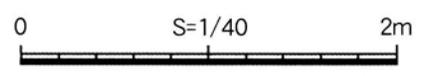
1. 立面图(外面)



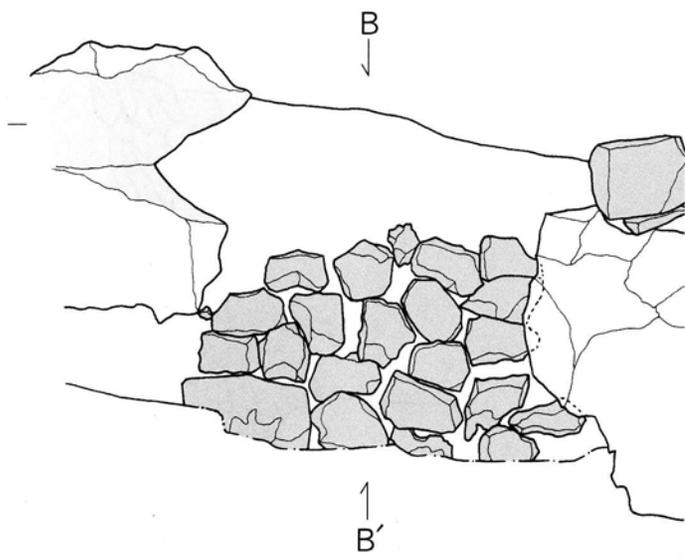
2. 立面图(内面)



3. 断面图(A-A')

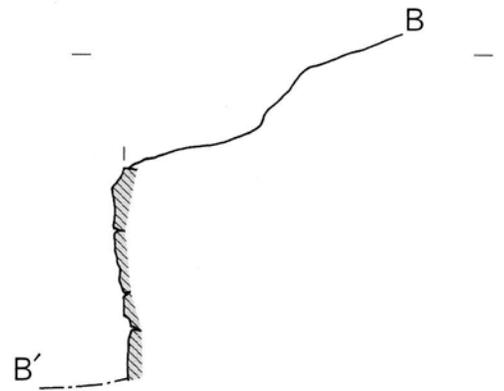


第53图 前庭北石積1-1

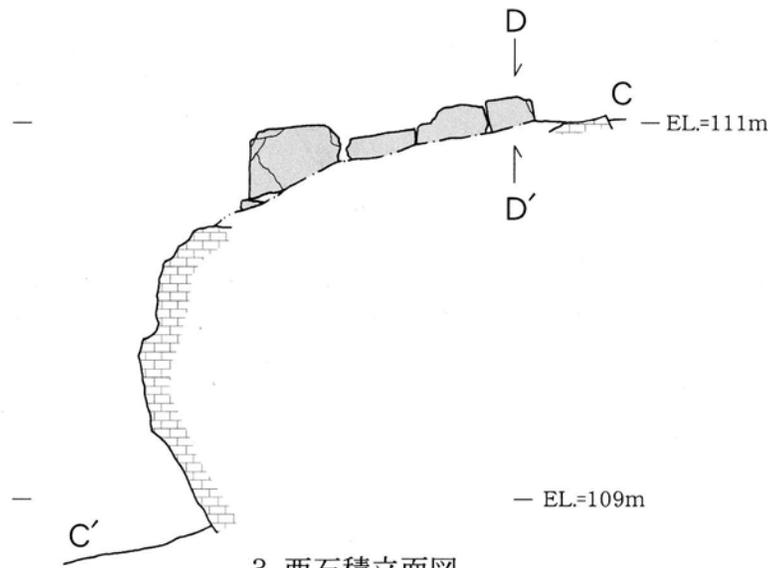


1.北石積1-2 立面図

EL.=111m



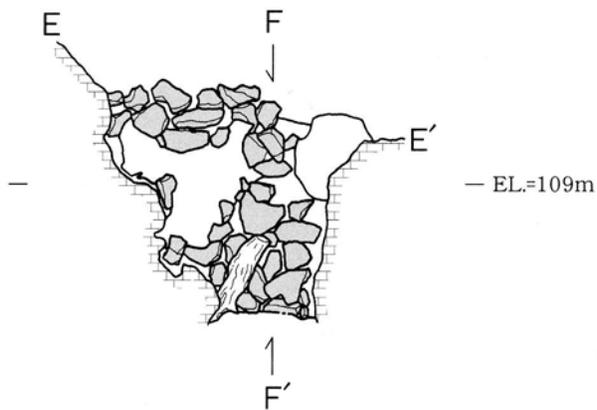
2.北石積1-2 断面図(B-B')



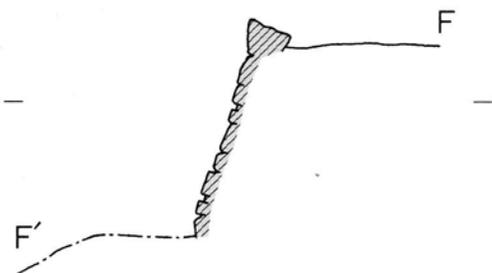
3.西石積立面図



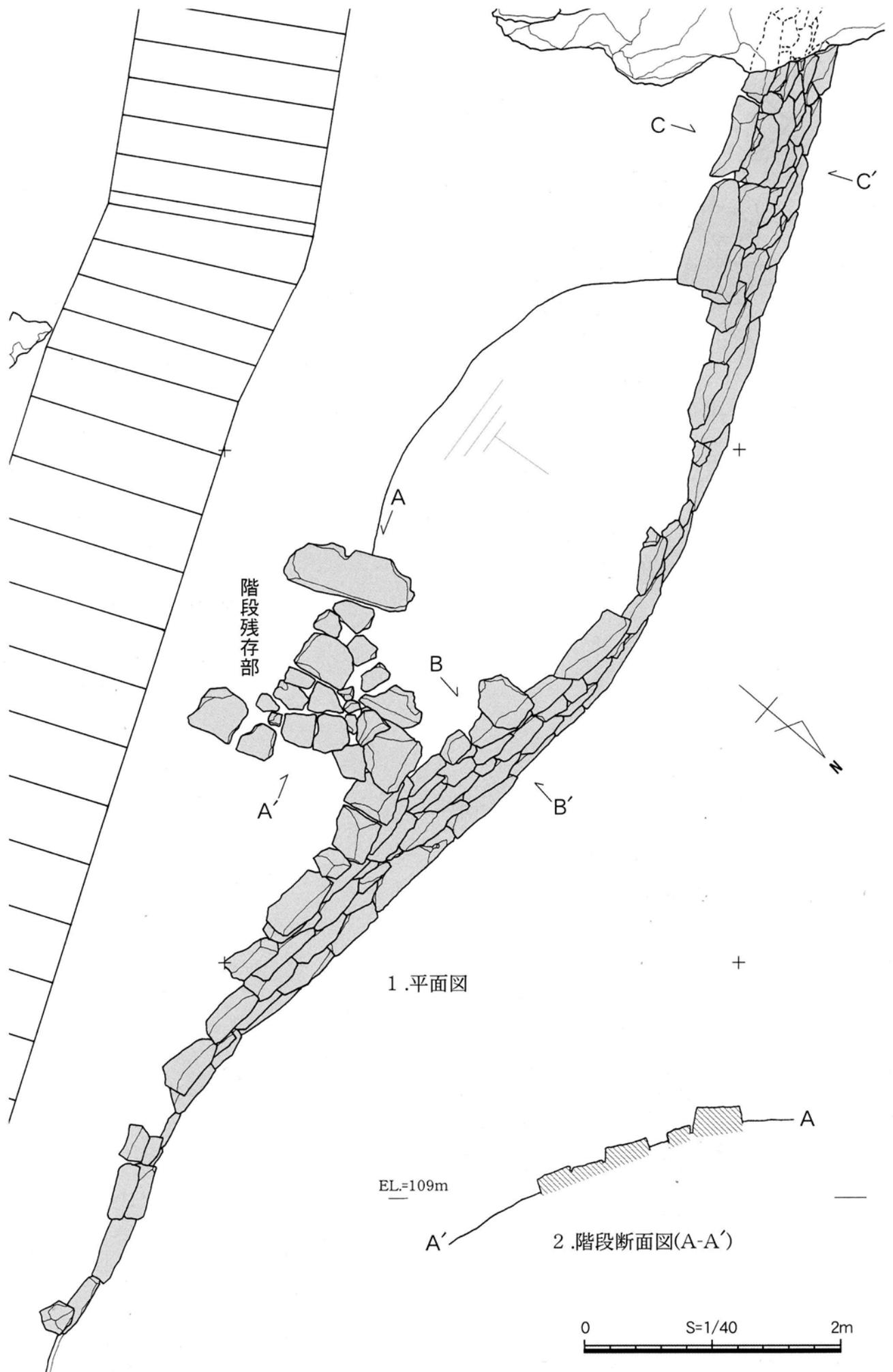
4.西石積2 断面図(D-D')



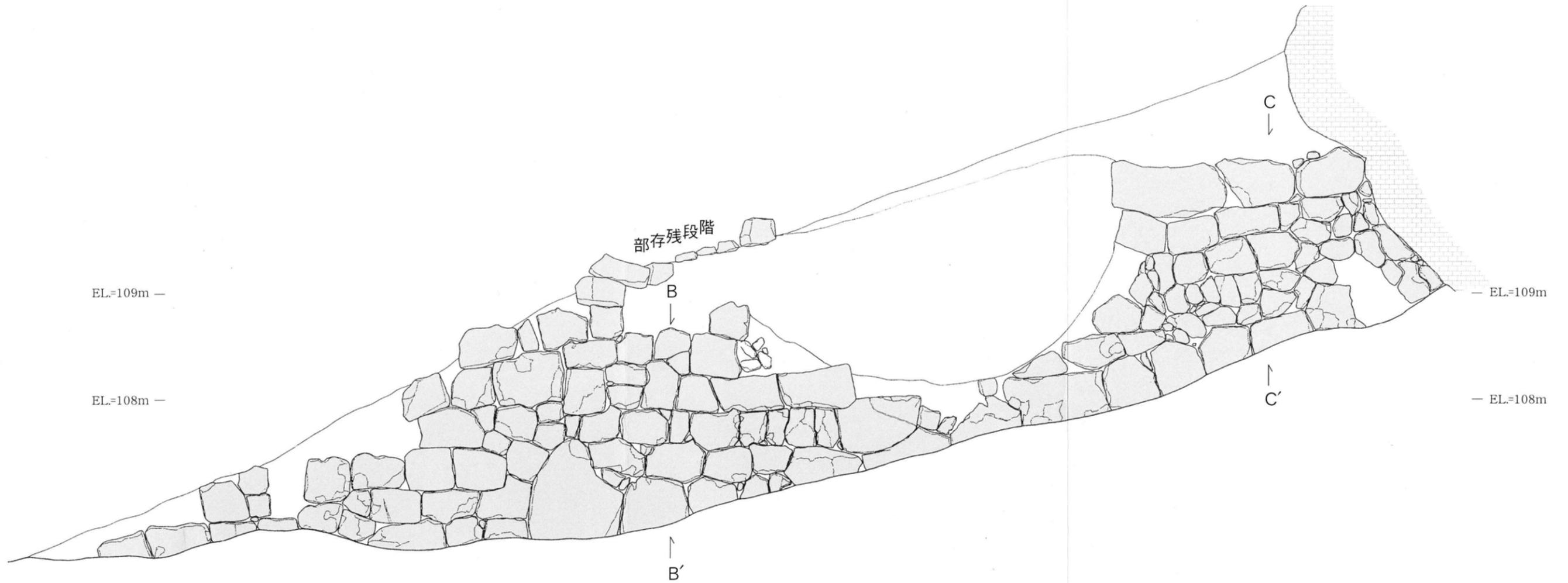
5.北石積2 立面図



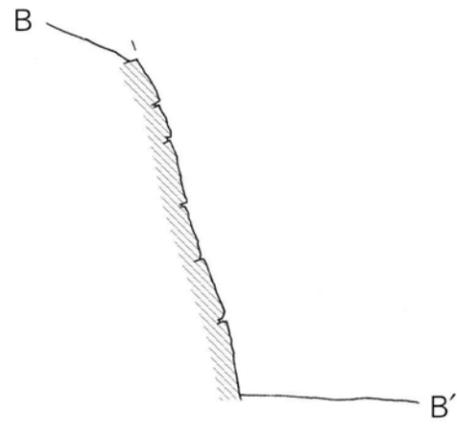
6.北石積2 断面図(F-F')



第55図 参道B及び擁壁



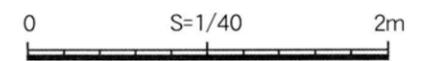
1. 立面展開図



2. 断面図(B-B')



3. 断面図(C-C')



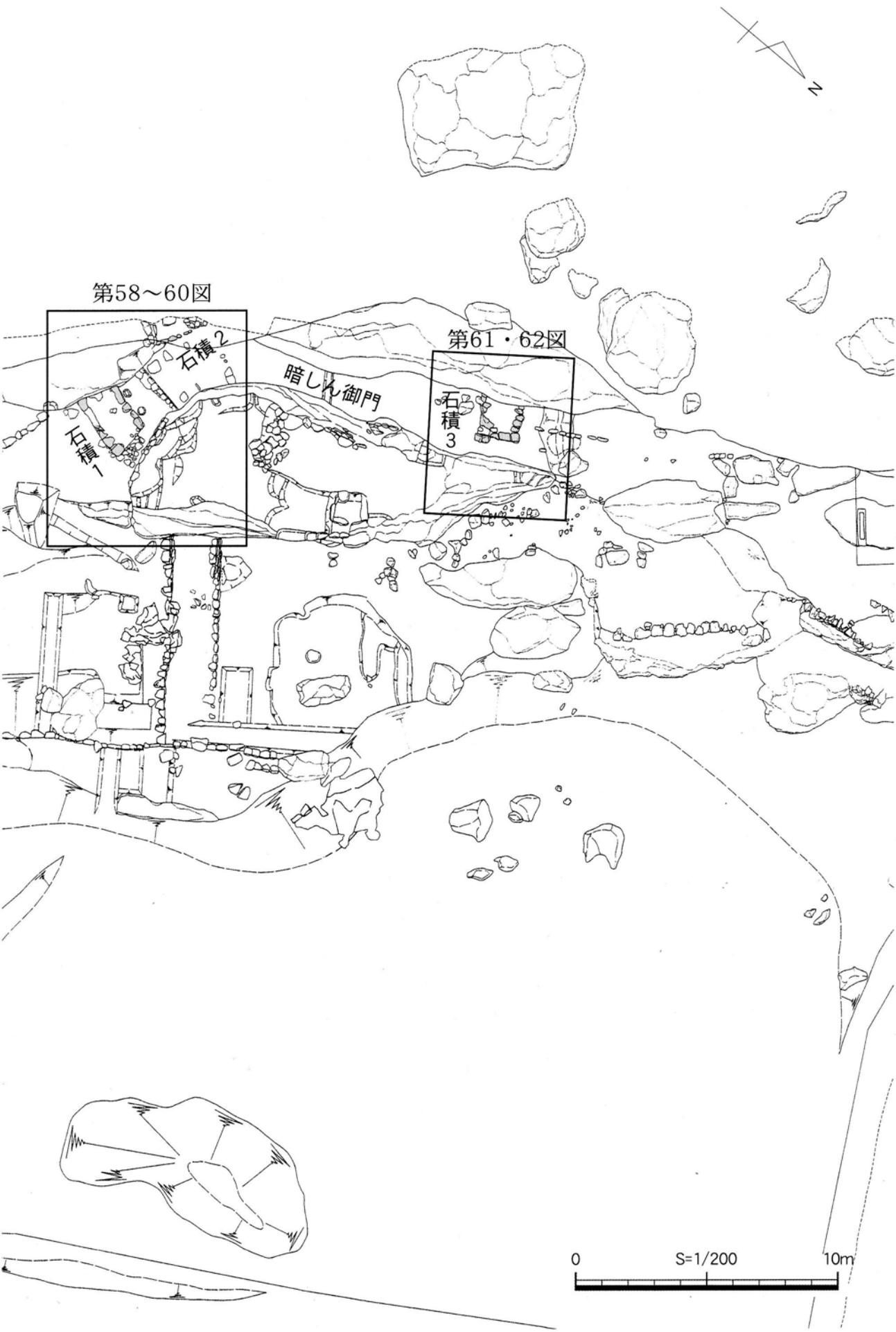
6. 戦中石積

暗しん御門に構築された戦時中の石積遺構をここにまとめた。発掘調査によって、暗しん御門は旧日本軍の陣地として使用されていたことが判明した。暗しん御門の入口と出口（正確には二番庭入口に位置する）に通路をわずかに残しながら、石垣を構築している。両石垣とも高さは50~70cmの残りで本来の高さは不明。石垣の構築には浦添ようどれの石積みを取り外して使用したと思われる。

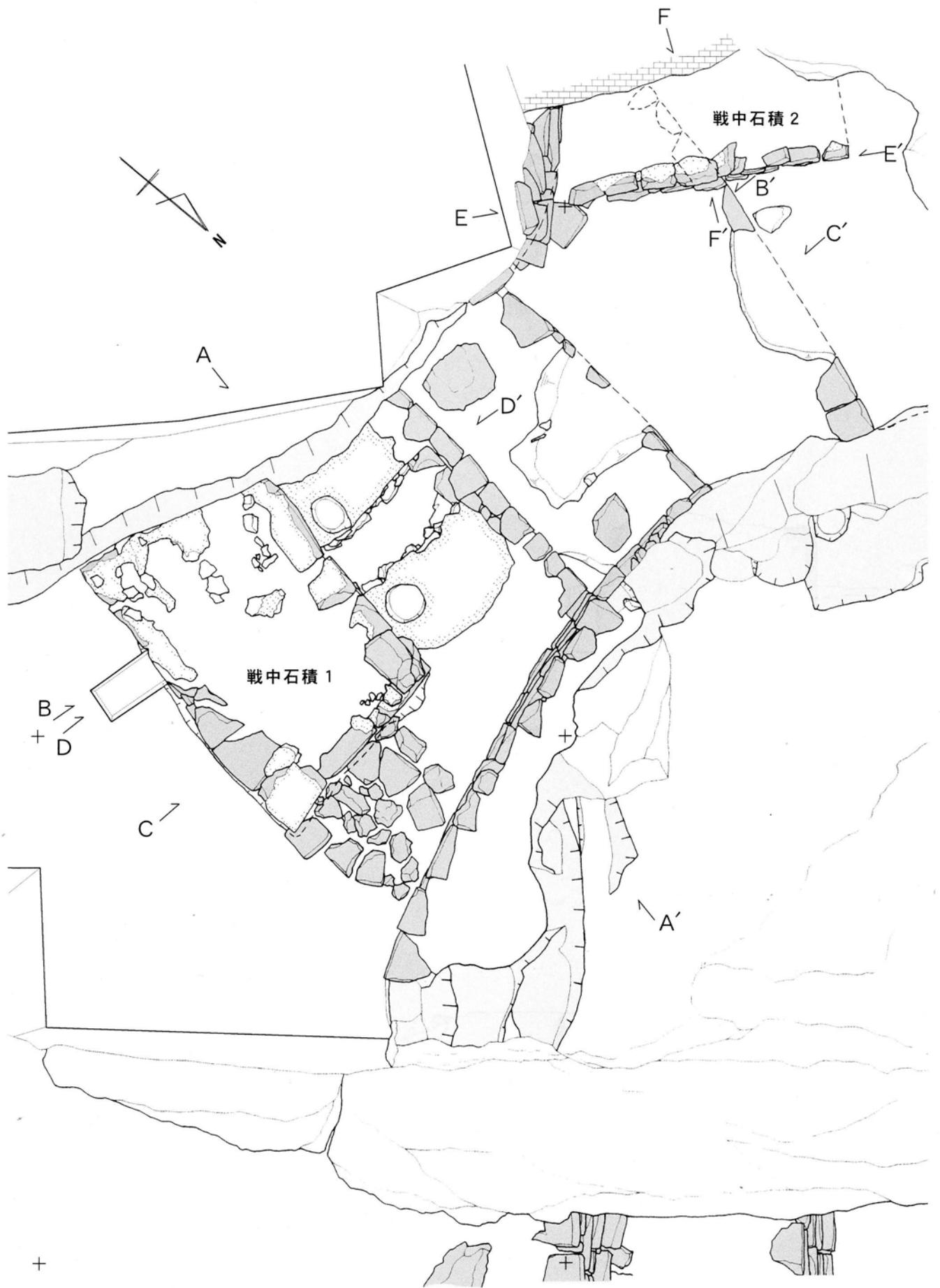
出土時の暗しん御門床面は、炭や灰層で黒く被われ、中から武器類や着用品など軍用品のほか、炭化した乾パンや米・豆などの食料、碗や皿などの日用雑器類が出土した。

表-10 遺構観察表（戦中石積）

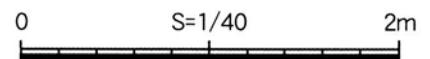
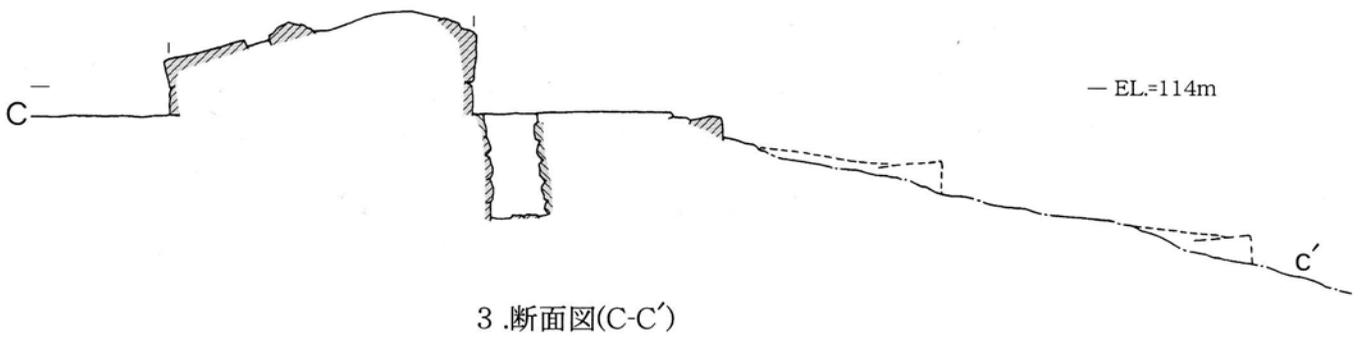
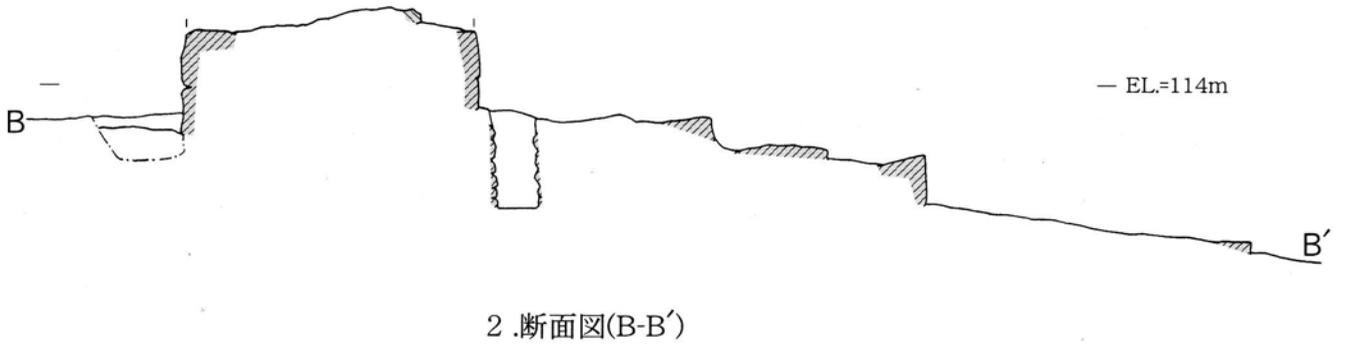
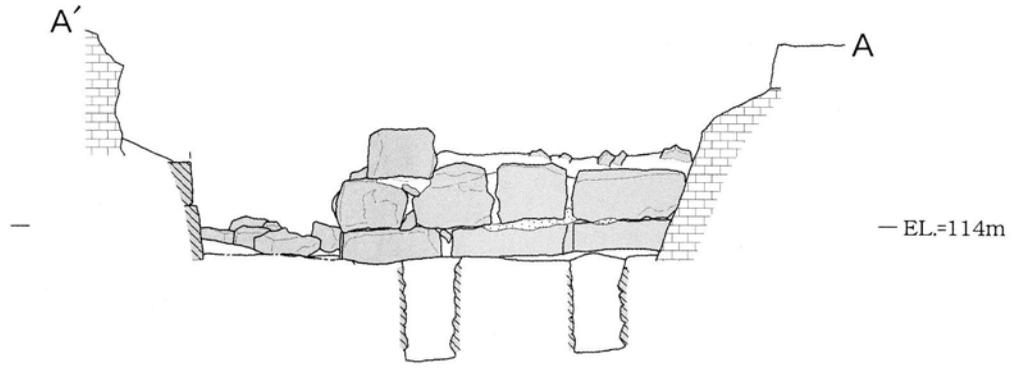
遺構名称	挿図番号 写真番号	技法	構造 (擁壁) (石牆) (その他)	①残存長 ②厚さ(幅) ③残存高(最大) ④勾配 ⑤軸方向	石のサイズ ①たて ②よこ ③控え	特徴・残存状況等 (性格・形状・工法・根拵え・裏込め等)
						他遺構との関係・その他
戦中石積1	平面図 第58図	切石積み	石牆	①2.5m ②1.6m ③70cm ④ほぼ垂直 ⑤N12° E	①26cm~34cm (平均 29cm) ②36cm~61cm (平均 45cm) ③-	二番庭入口(階段を登り切ったすぐ)に構築された石積み。平面観はほぼ長方形で、本来はもっと高く、衝立状の石壁だったことが推察される。石積みの南側は岩盤にすり付け、北側には70cm~1mの通路を設けている。石積みには大型切石が使用され堅固。セメントも使用されている。 基礎造成は床面を10cmほど掘削したあとに切石を据えている。 石積みの内側にはセメントが敷かれ、石積みに隣接して二個の柱穴がある(直径30cm前後、深さ50cm前後)。石積みに付随して電柱サイズの柱が立っていたことが窺えるが、機能は判然としない。柱は石積み構築のあとに立てられている。まず、床面を60cm前後の深さで階段ざわまで掘削し(セメント敷きの範囲)、柱を固定しながら5~20cmの礫を中込として詰めている。柱穴内の側面は礫とセメントが混在。
	立面図 第59図1 断面図 第59図2・3 第60図1 図版23					石積みの内側(セメント敷きの部分)をトレンチ調査したところ、柱を立てる際の造成層(中込)から昭和16年、17年の日本銭貨が2点出土。
戦中石積2	平面図 第58図	粗加工石積み	不明	①2.2m ②70cm~1m ③40cm ④ほぼ垂直 ⑤N49° W	①10cm~30cm (平均 16cm) ②18cm~43cm (平均 27cm) ③-	暗しん御門のつき当たり南側の石積み。石積みの面は北東向きで、南側岩盤を背にしている。掘削を伴う基礎造成はなく、床面から積み上げている。性格や機能等は不明。
	立面図 第60図2 断面図 第60図3 図版23					二番庭階段一段目の上位に構築されており、西側は二番庭南にすり付けている。
戦中石積3	平面図 第61図	切石積み	石牆	①1.7m ②1.4m ③50cm ④ほぼ垂直 ⑤N54° E	①20cm~44cm (平均 32cm) ②27cm~38cm (平均 32cm) ③-	暗しん御門の入口に構築された石積み。南側岩盤と北側岩盤との間に、入口を塞ぐようにある。石積みの南側は岩盤にすり付け、北側は戦中石積1と同じように巨岩との間に、約70cmの通路を設けている。石積みは主に四角形の切石が使われ、目地や岩盤との隙間など、随所にセメントが使用されている。 基礎造成は床面を10cmほど掘削したあと根石を据えている。 石積みの内側床面に、直径60~90cmほどの土坑があり、その内部から炭とともに円柱状の型の付いたセメント片が出土した。直径20~30cmの柱が立っていたようで、戦中石積1と同じ構造だったことがうかがえた。
	立面図 第62図1 断面図 第62図2 図版23					石積みの構築によって、前庭側から延びてくる浮き道が断ち切られている。

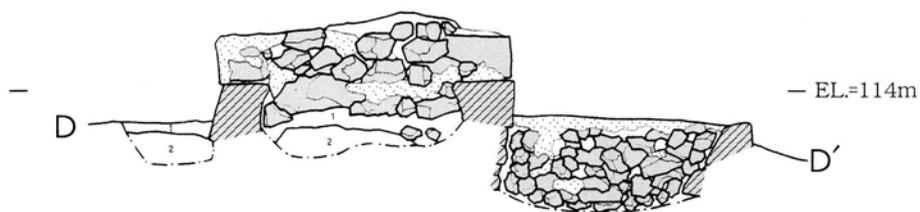


第57図 戦中石積位置図



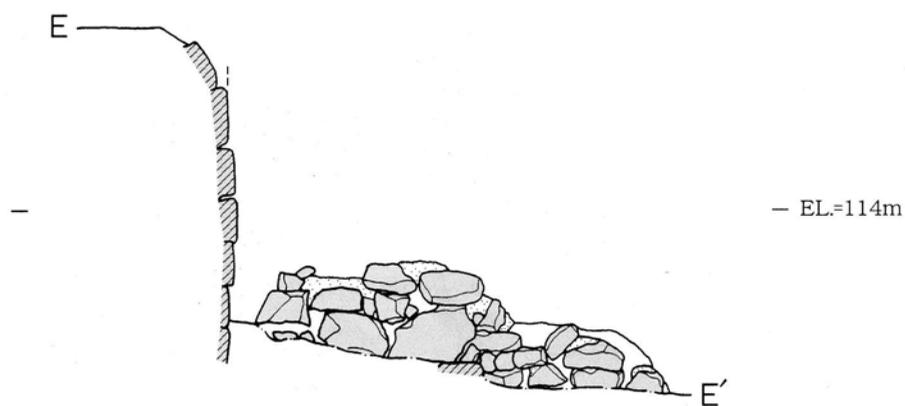
第58図 戦中石積1・2平面図



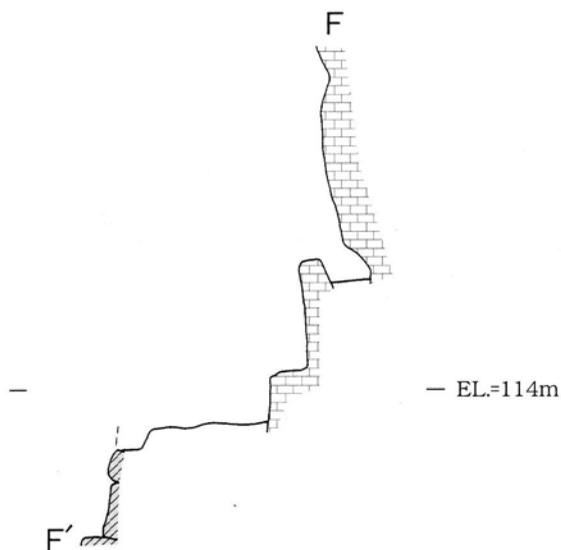


- 1. 淡褐色混礫土層 (二番庭床面仕上げ土)
- 2. 黄褐色石灰岩粉碎土層 (二番庭造成土)

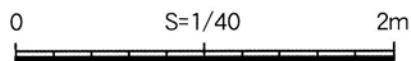
1. 石積1 断ち割り部断面図(D-D')

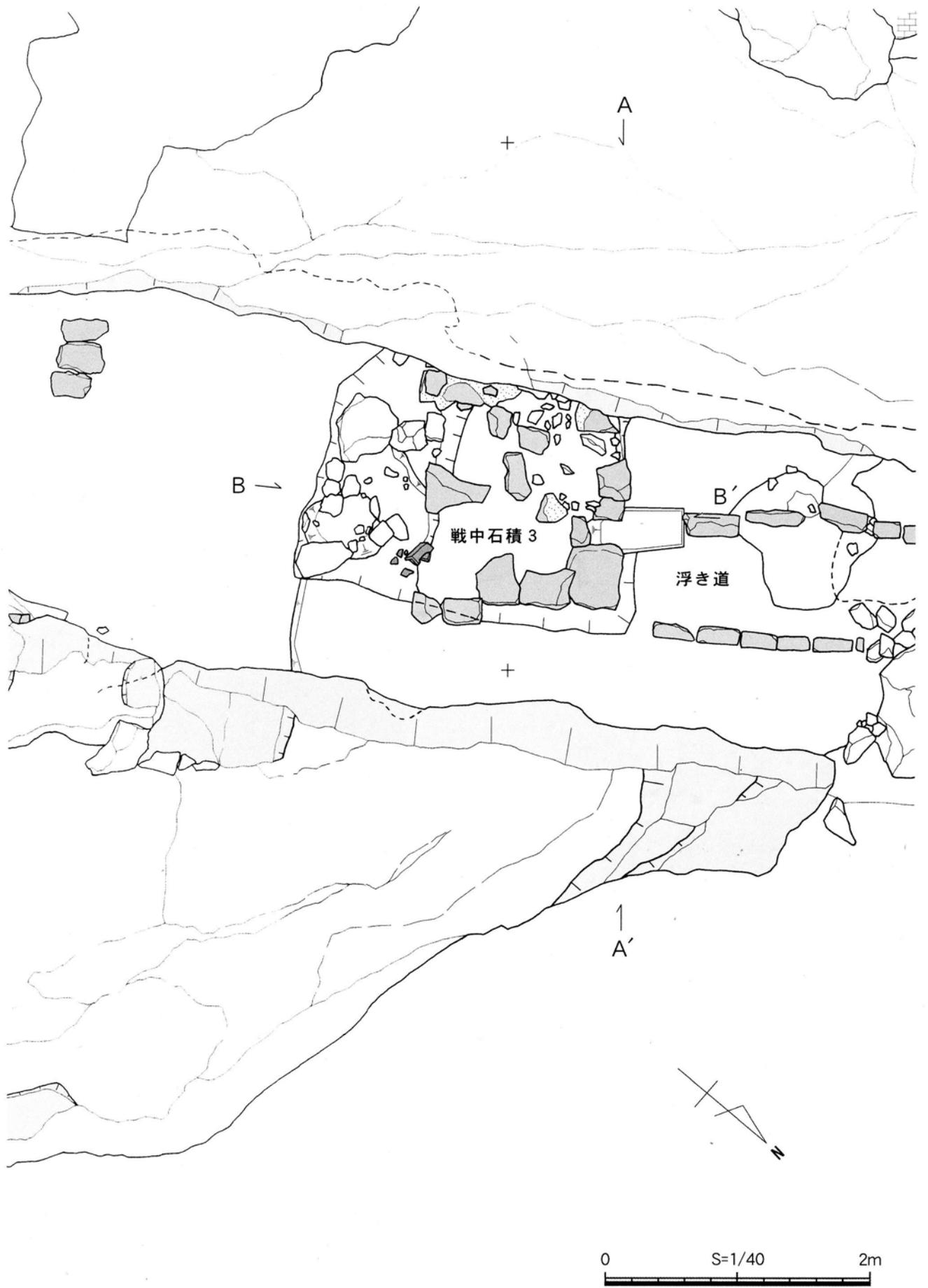


2. 石積2 立面図

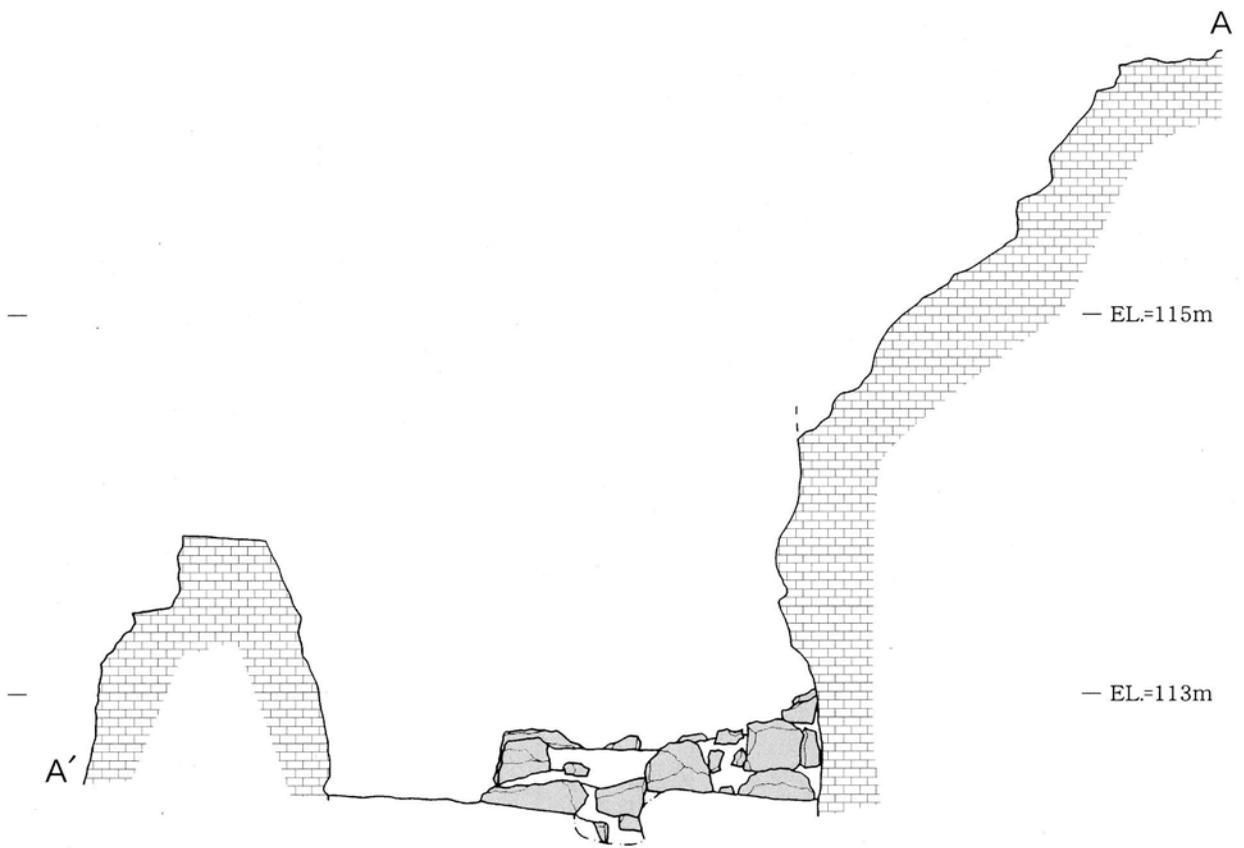


3. 石積2 断面図(F-F')

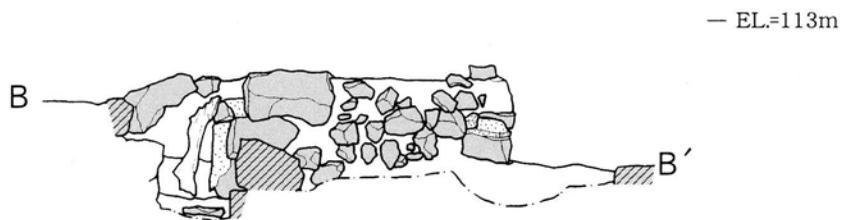




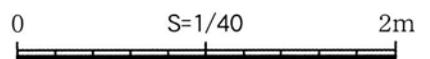
第61図 戦中石積 3 平面図



1. 立面図



2. 断ち割り部断面図(B-B')

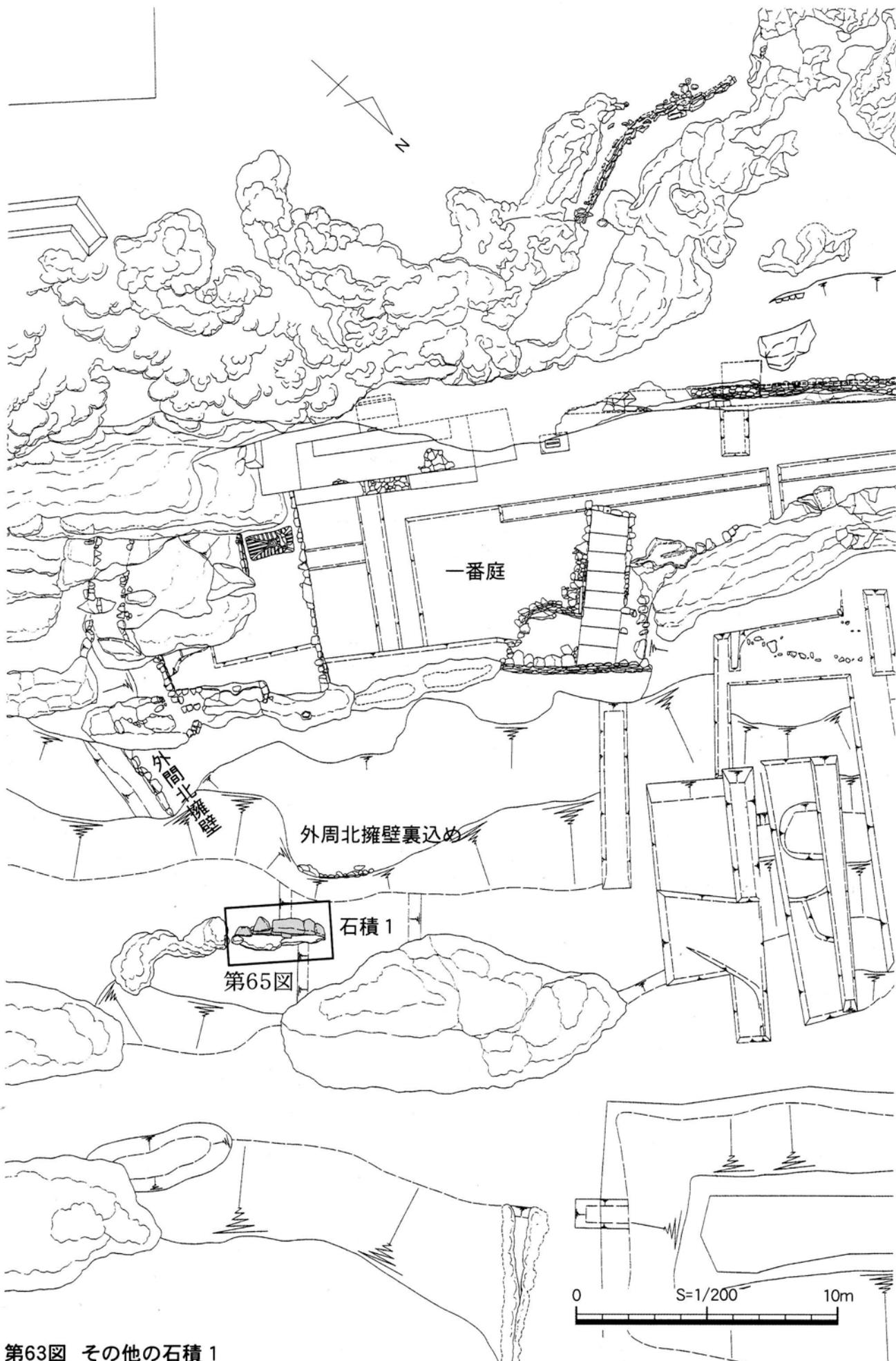


7. その他の石積み

出土した石積み遺構のうち、他の遺構との関連性が見出せず、性格や機能等を明確にし得ないものを本項にまとめた。

表-11 遺構観察表（その他の石積み）

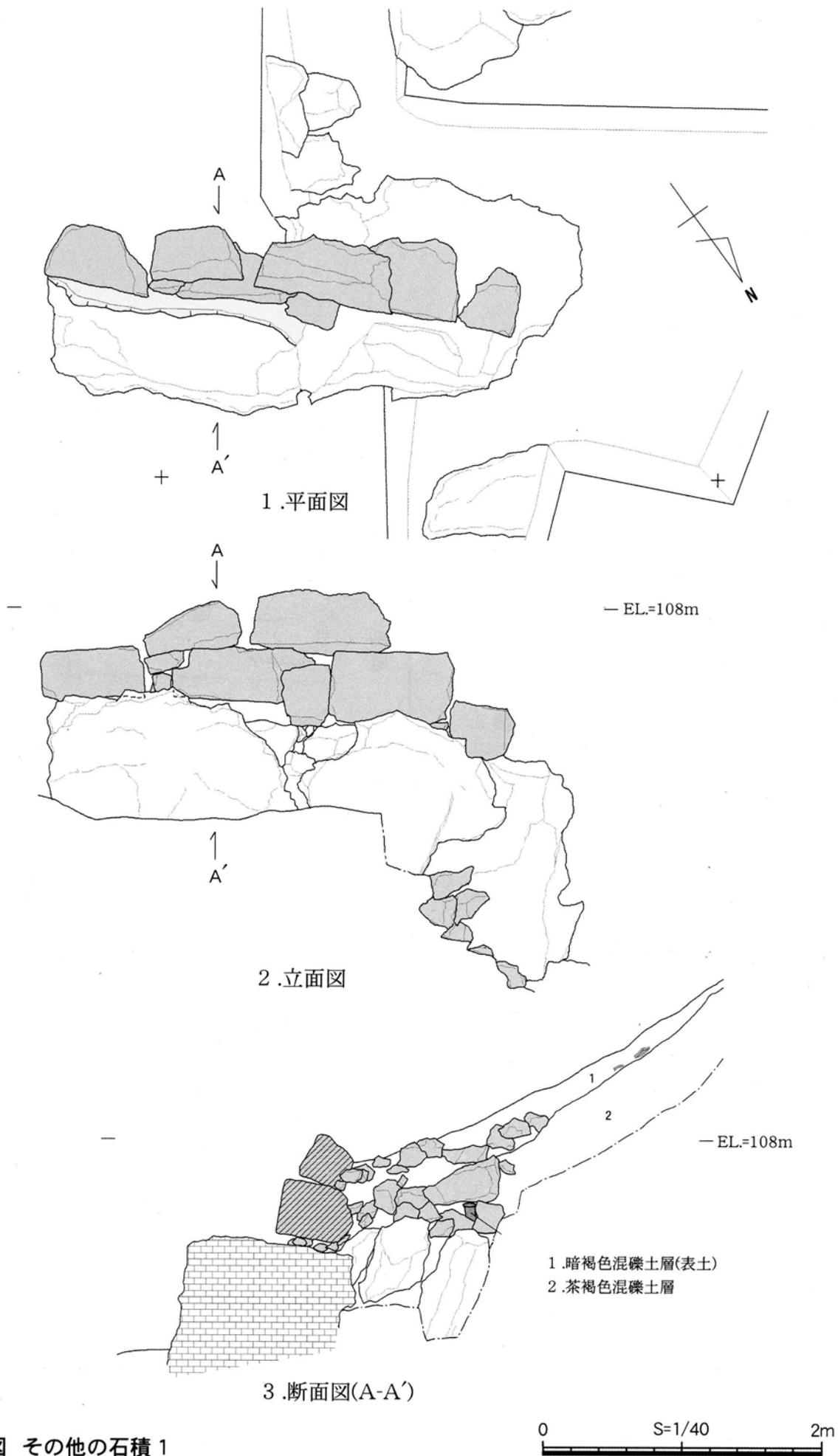
遺構名称	挿図番号 写真番号	技法	構造 (擁壁) (石牆) (石牆)	①残存長 ②厚さ(幅) ③残存高(最大) ④勾配 ⑤軸方向	石のサイズ ①たて ②よこ ③控え	特徴・残存状況等 (性格・形状・工法・根拵え・裏込め等)
						他遺構との関係・その他
その他の石積1	平面図 第65図1 立面図 第65図2 断面図 第65図3 図版7-上 図版24-上・中	切石積み (布積み)	擁壁?	①3.4m ②- ③90cm ④- ⑤N48° W	①20cm~50cm (平均 38cm) ②20cm ~100cm (平均 67cm) ③34cm~58cm (平均 44cm)	外周北擁壁1・2間の崩壊部直下に位置する。長さ4mほどの巨岩の上面を平坦に整え、さらに溝状に浅く窪ませて切石をのせている。大型切石6個の2段残存。巨岩下部の凹みには、20~30cmほどの自然礫を岩の面に合わせて詰めている。 本石積みについては、外周北擁壁の一部が、後背上部(崩壊部)から巨岩諸共徐々にすべり落ちたものと考えていたが、一方では4mほども落差のある場所から滑り落ちたにもかかわらず、石積みが崩壊せずに残っていることが疑問としてあった。 のちの土層断面調査の結果、石積みの裏側から近年のガラスびんが出土したことや、巨岩下部へ石詰めなどが行われていることなどが判明し、近年構築の可能性も出てきた。性格や機能等については未だ判然としない。
その他の石積2	平面図 第66図1 断面図 第66図2	切石積み (布積み)	?	①80cm ②- ③29cm ④- ⑤-	①- ②22cm~26cm (平均 25cm) ③26cm~30cm (平均 28cm)	切石が南西-北東方向に2段残る。石積みがずれているため、軸は正確に求められない。面は南東(一番庭側)に向いている。南西端は岩盤にすり付いている。一番庭西石積に関連するものと思われるが判然としない。
その他の石積3	平面図 第67図 立面図 第68図1 断面図 第68図2 図版24-下	粗加工石積み	?	①5.0m ②- ③30cm ④- ⑤N47° W	①12cm~36cm (平均 21cm) ②20cm~58cm (平均 31cm) ③29cm~45cm (平均 39cm)	前庭石積の東方(U4~V4区)に位置する。巨岩上部の混礫土(造成土と考えられる)の上に石列状に残る。 南西-北東方向の軸を有し、南西側から北東側へ次第に下っている。石は粗加工で野面に近い。北側は混礫土の斜面。 周辺のどの遺構にも関連性が見いだせず、性格は不明。



第63図 その他の石積 1



第64図 その他の石積2・3位置図



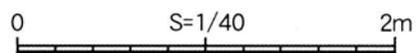
第65図 その他の石積 1



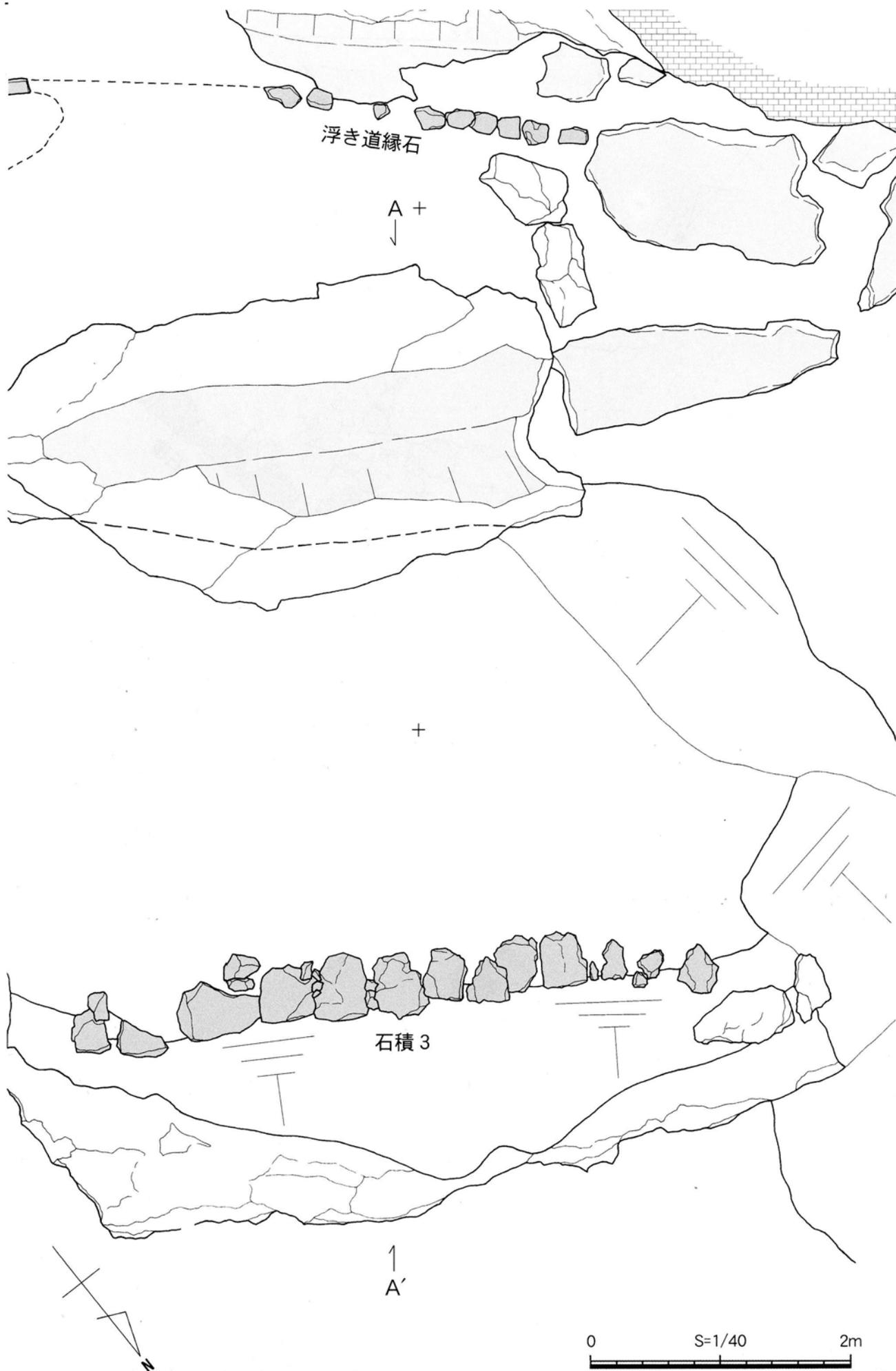
1. 平面図



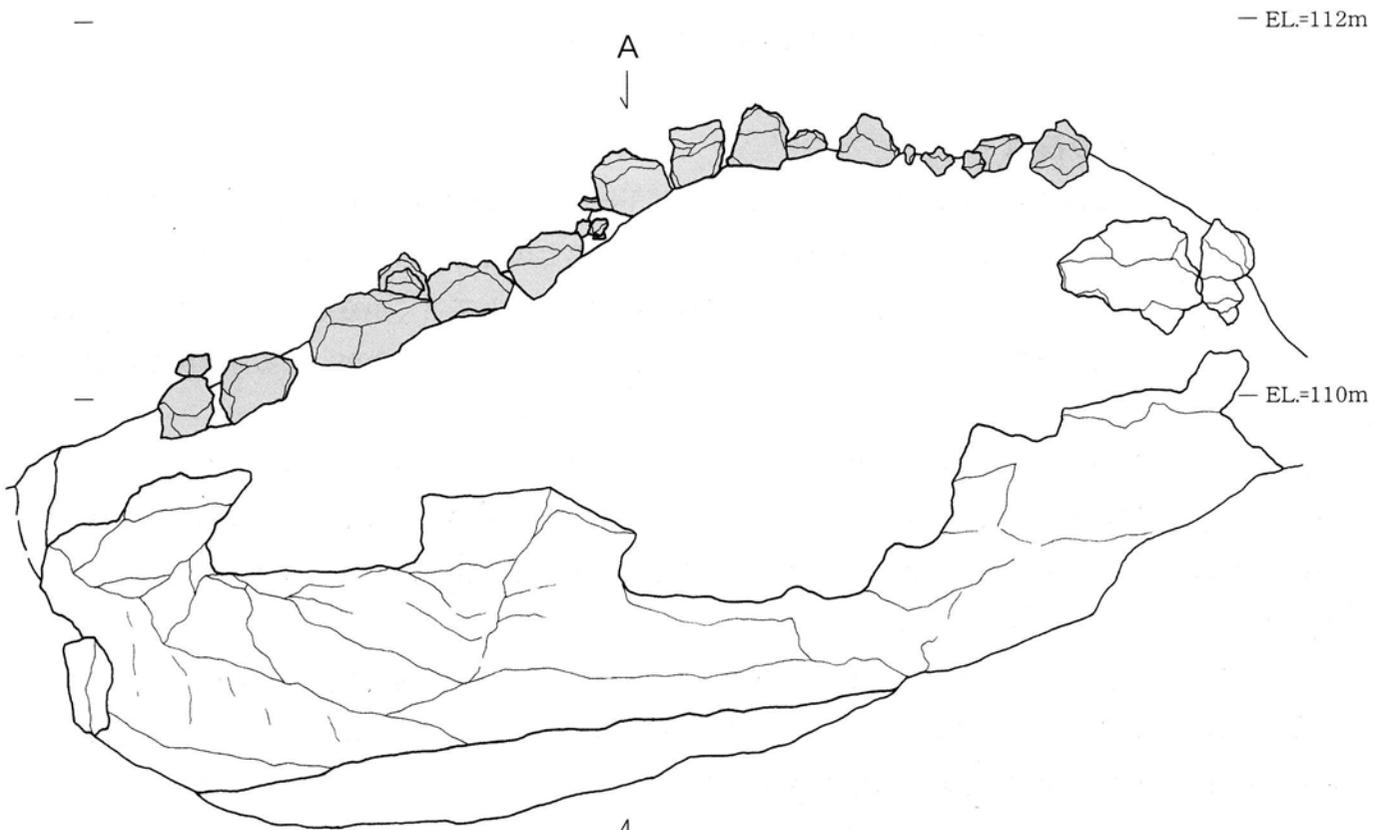
2. 断面図(A-A')



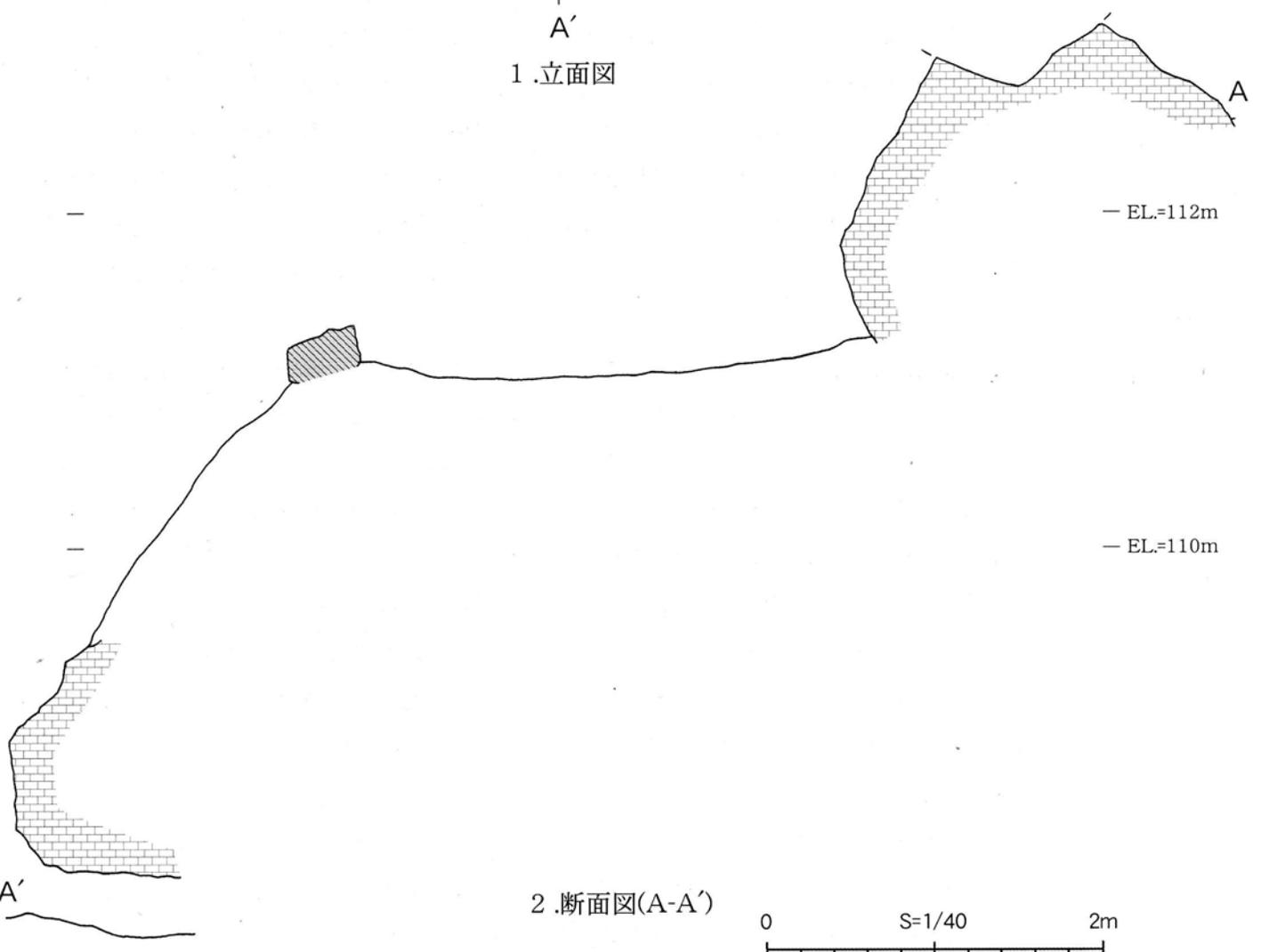
第66図 その他の石積 2



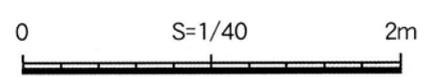
第67図 その他の石積 3 平面図



1. 立面図



2. 断面図(A-A')



第68図 その他の石積 3

第V章 まとめ—浦添ようどれの石積と年代

1. 浦添ようどれの石積

国指定史跡浦添城跡の中にある浦添ようどれは、琉球王国第二王統の開祖・英祖王によって13世紀後半に造営されたと伝えられている。1620年には、第二尚氏第七代尚寧とその一族の墓が修築された。首里にある第二尚氏王陵・玉御殿（玉陵）と並ぶ琉球王陵の一つとして古くから知られている。戦前まで、高い石牆に囲まれた荘厳な雰囲気のある王陵として国宝候補にあげられていたが、去る沖縄戦で壊滅した。

浦添市教育委員会では、浦添城跡整備の第一期事業として浦添ようどれを復元することを決定し、平成8年度から遺構確認の発掘調査を実施してきた。この報告書は、平成12年度までの発掘調査成果を、石積遺構を中心にまとめたものである。瓦溜まりや金属工房跡、出土遺物などは、遺構・遺物編として次回に報告する予定である。

本書の第Ⅲ章では、発掘調査による遺構実測図の上に、沖縄戦以前の図面、写真、古老からの聞き取りなどの資料をふまえて、浦添ようどれの石積構造の復元平面図（第7図）を作成した。第Ⅳ章では、各石積遺構の詳細図を掲げ、これに観察表をつけて解説した。

石積遺構の復元平面図をみると、浦添ようどれは、断崖をはさんで20m以上の比高差がある複雑な地形にもかかわらず、計画的な設計にもとづいて造営されたことがわかる。断面に沿って長方形の一番庭を設定し、その中央部の崖面を穿って英祖王の墓室を造営している。英祖王の墓室基壇は、長方形の一番庭の軸線に平行している。尚寧王の墓室基壇は、英祖王墓室基壇と軸線をずらしながらも、区画石積とはほぼ直角に交わる。尚寧王墓室基壇と区画石積は長さも同じで、尚寧王墓室前に正方形の空間が設定されている。一番庭の北石積と西石積は、擁壁とその上に築かれた石牆の二段構造になっているが、崖上に積み上げられた一番庭南石積も二段構造になっている。これは北石積や西石積との構造的対応を考慮したものと考えられる。

二番庭も一番庭をそのまま延長したような構造である。さらに、一番庭と二番庭の外側には、外周北擁壁が曲線を描いて取り巻いているが、崖上にもこの外周北擁壁に対応する南擁壁が造られている。全体として、長方形の一番庭・二番庭を楕円形の外周擁壁が取りまく構造になっている。

参道から暗しん御門を通り、な一か御門のアーチ門を抜けて英祖王陵前に至る構造も独特で興味深いものがある。ユウドゥリヒラのチジ（ようどれ坂の頂）から断崖に沿って下りる急坂の参道は、黄泉のひら坂を思わせる。そして前庭から浮き道を少し下りながら、暗しん御門とよばれるトンネルを通る。前庭から暗しん御門に向かう方向は東南東で、そのはるか先には久高島がある。この島は、琉球王国の最高聖地で、その東の海の向こうにニライカナイがあると信じられてきた。浦添グスクからみた久高島は、冬至の日にはこの島の方角から朝日が登る位置にある。暗しん御門は、大地の穴から地下に潜って、ニライカナイを訪ねるような演出効果を意図していると考えられる。そして、暗しん御門を抜けて二番庭に至ると、な一か御門のアーチ門を通して英祖王陵の墓室に至る。このアーチ門も、グスク、御嶽、寺院などの聖域に設けられる門であり、この墓庭が聖域であることを象徴的に示している。浦添ようどれには、参拝者を聖なる空間へ導くための演出装置が仕掛けられていたといえる。

2. 浦添ようどれ石積の年代

独特な石積み構造をもつ浦添ようどれは、いつ頃造営されたのだろうか。浦添ようどれの発掘調査の目的は、戦前の石積遺構を確認することにあるが、もう一つの目的は、英祖王が13世紀後半に造営したと伝えられている造営年代を、考古学的に検証することであった。この問題は、瓦溜まりや金属工房跡の遺構・遺物編で詳しく報告する予定であるが、ここではその概要を述べておきたい。

浦添ようどれの石積みの殆どは目地のおおる布積みで積み上げられている。このような石積み技法は、14世紀後半の糸数グスクの石積みに典型的に見られるが、1416～1420年頃の築城といわれる座喜味グスクでは目地が通らない技法に変化している。このような技法で積まれた二番庭西石積は、13世紀の玉縁白磁腕が出土した金属工房跡の上に積み上げられている。また、二番庭石積みの裏込め土で埋め立てられた瓦溜まり遺構から、高麗系瓦とともに検出した木炭の放射性炭素年代は 1150 ± 50 年、 1250 ± 40 年、 1260 ± 30 年と測定された。二番庭石積の造営と同時期と思われる新しい時期の金属工房跡から出土した木炭の放射性炭素年代は、 1390 ± 40 年、 1400 ± 30 年であった。

これらの資料から考えると、浦添ようどれの石積みは、14世紀後半～15世紀初期頃、つまり察度王統代(1350～1405)に造営されたと考えられる。これは、従来の文献史料ではわからなかった大きな成果であった。ただし、石積みの中には一番庭西石積のアーチ門のように、尚寧王代の1620年に修築された可能性がある石積みもある。尚寧王代にどの程度の修築がなされたか、あるいは英祖王と尚寧王と墓室の掘削造営時期も今後の検討問題である。

察度王統代以前の初期の浦添ようどれに関する情報も得られた。二番庭石積の下層から発見された瓦溜まりと金属工房跡は、石積み造営以前の初期浦添ようどれの形を具体的に明らかにできる遺構である。瓦溜まりから推定できる初期浦添ようどれの年代は、金属工房跡の玉縁白磁腕や放射性炭素年代測定値から、少なくとも13世紀後半に遡ると考えられる。これは、浦添ようどれは英祖王が咸淳年間(1260～1274)に造営したとする『琉球国由来記』(1713年編集)の記事を裏づける資料だといえる。

浦添ようどれの遺構や出土遺物からはまだ沢山の特筆すべき成果が得られているが、次の遺構・遺物編に譲ることにしたい。(安里 進)

写真図版

写真図版



▲ 浦添ようどれ遠景（北東から）



◀ 着手前の状況
（前庭～暗しん御門
入口付近）



◀ 着手前の状況
（二番庭付近）



◀ 着手前の状況
(西側から)



◀ 着手前の状況
(東側から)



◀ 石積みの発掘作業
(一番庭北石積)



◀ 発掘調査時の状況
(西側から)



◀ 発掘調査時の状況 (西側上位から)



◀ 発掘調査時の状況
(東側から)



▲ 尚寧王陵（左）と英祖王陵（右）



▲ 一番庭東部全景



◀ 一番庭東石積
(南岩盤側から)



◀ 一番庭東石積(内面)



◀ 一番庭東石積(外面)



◀ 一番庭袖石積全景
(西側から)



◀ 一番庭袖石積
(南側から)



◀ 一番庭袖石積
(西側から)



▲ 一番庭北石積1周辺



▲ 一番庭北石積1



▲ 一番庭北石積 2・3



◀ 一番庭北石積 3 (西側から)



◀ 一番庭北石積2
(根拵え)



◀ 一番庭北石積2
(断ち割り部の断面)



◀ 一番庭北石積3



▲ 一番庭北石積3（右）、北擁壁根石と裏込め（中央）、外周北擁壁の根拵え（左）



▲ 一番庭北擁壁根石と裏込め近景（後方は一番庭北石積3）



▲ 二番庭周辺（瓦溜まり拡張調査前）
写真上方の石積みが一番庭西擁壁、中央が瓦溜まり、右は戦中石積



▲ 一番庭西擁壁と瓦溜まり
擁壁は瓦溜まりを埋めた二番庭造成層（石灰岩礫層）の上に構築されている



▲ 一番庭南石積（英祖王陵上）



▲ 一番庭南石積（部分拡大）

◀ 一番庭南石積断面状況（崩壊部）



▲ 外周南擁壁全景（復元石積みの奥）



◀ 外周南擁壁
（西側から）
石積みの右は裏込
め層、左は一番庭南
石積の復元部分



◀ 外周南擁壁（立面）



▲ 二番庭北石積(写真下)と西石積み (中央)



◀ 二番庭北石積(立面)



◀ 二番庭西石積A(奥)
二番庭西石積B(手前)
石積みの手前は金属
工房跡
石積みの後方は瓦溜
まり



◀ 二番庭西石積Bの裏込め状況
左は西石積A、
右が西石積B



◀ 二番庭西石積Bと金属
工房跡の土坑
土坑埋没したあとに
石積みを行っている



◀ 二番庭南石積
(手前は二番庭階段)



◀ 二番庭階段
(右は二番庭南石積)



◀ 外周北擁壁1
(写真右は崩壊部)



◀ 外周北擁壁2 (裏込め)



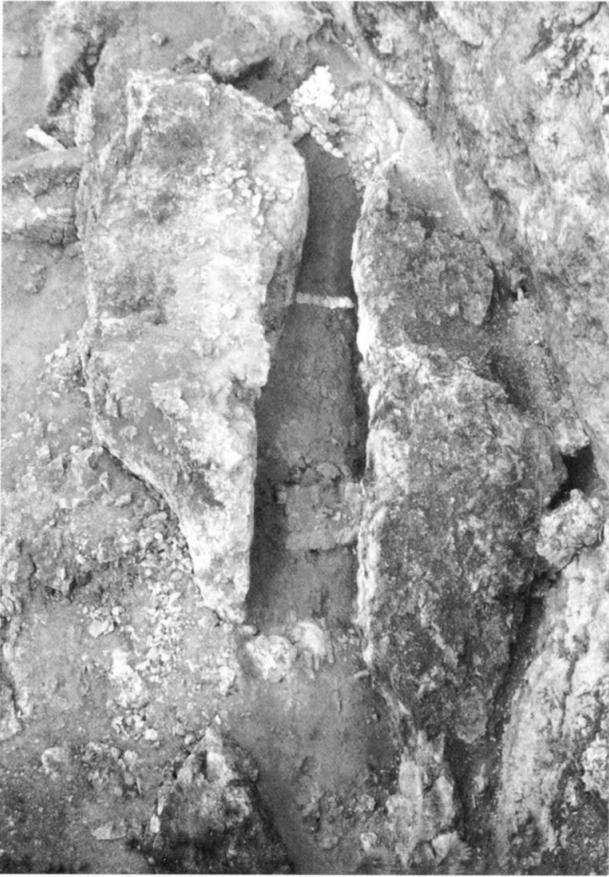
◀ 外周北擁壁 3 (根拵え)
(北側から)



◀ 外周北擁壁 3 (根拵え)
(西側から)



◀ 外周北擁壁 4
(中央岩盤上の切石2個)



◀ 暗しん御門全景（写真上端は二番庭）



▲ 暗しん御門と浮き道（西側から）



▲ 暗しん御門と二番庭（東側から）



◀ 暗しん御門石積 1



◀ 暗しん御門石積 2



◀ 浮き道 (東側から)



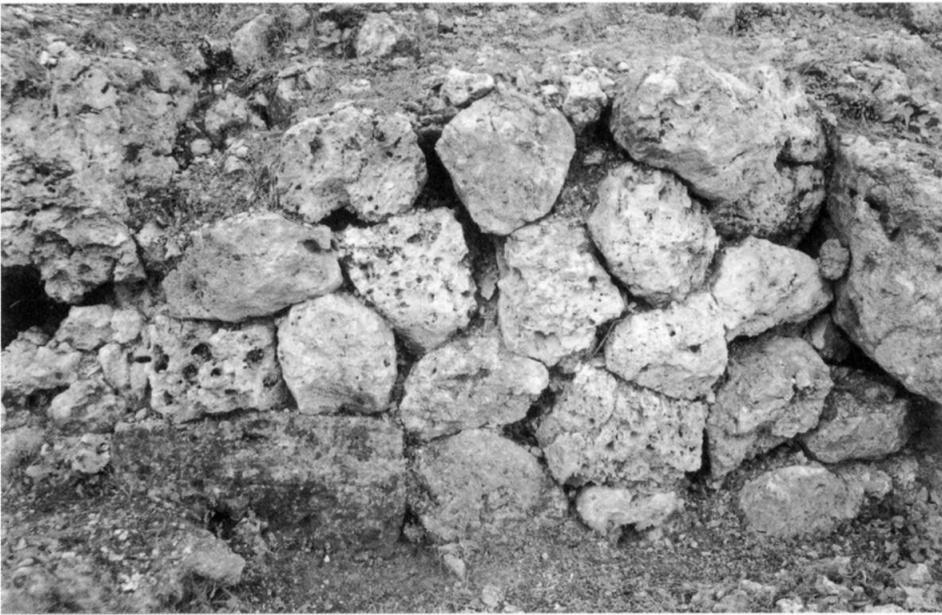
▲ 前庭石積全景（上空から）



◀ 前庭北石積1-1
（左上）
前庭北石積1-2
（中央）
前庭北石積2（中央下）



◀ 前庭北石積1-1



◀ 前庭北石積1-2



◀ 前庭北石積2



◀ 前庭西石積2



◀ 参道踊り場の石畳



◀ 参道Bの階段(右は擁壁)



◀ 参道Bの擁壁(西側から)



▲ 戦中石積1
(暗しん御門側から：手前は二番庭階段)



▲ 戦中石積3 (西側から)



▲ 戦中石積1
(北側から：左は二番庭、右は暗しん御門出口)



▲ 戦中石積3
(北側から：左は暗しん御門、右は前庭側)



▲ 戦中石積1 (断ち割り部断面状況)



▲ 戦中石積3
(断ち割り部断面状況：写真右は浮き道)



◀ 戦中石積2
(写真左端は二番庭南石積
右端の石積は今調査で積んだもの)



◀ その他の石積1 (立面)



◀ その他の石積1 (断面)



▲ その他の石積3

浦添市文化財調査研究報告書 第32集

浦 添 よ う ど れ I

石 積 遺 構 編

—史跡浦添城跡復元整備事業に伴う発掘調査報告—

発行日 2001年(平成13年)3月30日

発行所 沖縄県浦添市教育委員会

〒901-9501

沖縄県浦添市安波茶一丁目1番1号

TEL 098-876-1234

(内線6213・6214)

FAX 098-878-1487
